324
561₁

始

36.1225

ヨ995

324-56/1

文學博士田中義能著

# 神道哲學精義

大正
11. 9. 8
内交

# 序

明治維新を去る未だ久しからざりし時、某れの中學校に、漢文教師あり。英吉利を讀みてエイキツリと云ふ。一生問ふ。「イギリスと讀むにあらずや」と。教師聲を勵まして曰はく、「咄！沒分曉漢！僕は正に先師よりしかく教はりたり」と。近世、吉川惟足、度會延佳、山崎闇齋等の諸老先生、盛に祕傳なるものを唱へて以來、神道の研究には傳統の說を墨守するの風を生じたり。後荷田、賀茂、本居、平田四大人相承けて出で、熱心に神道の哲學的研究を行ひ、傳統の弊を除きたりと雖

も、教權的態度は、むしろその著しきを思はしむるものありき。

予や不敏、敢へて自ら揣らず、夙に、由來西洋に發達せる思想と教育とを研究し、之れを骨肉とし、日本固有の思想と教育とを研究し、之れを精神とし、以つて一の學的系統を組織し、我が國民教育に貢獻せんことを期せり。而して日本固有の思想の研究は、予をして神道の研究に入らしめぬ。是れ予が學生の當時より教育學と神道との二者を並せ研究し來れる所以也。茲に二者と云ふ。予を以つて見れば二者はもと二ならず。一也。即ち教育學にして、帝國憲法、教育勅語その他神道の根柢たるものに基かざれば、その研究せられたる教育も、我が國にありては、空論たるを免れず。神道にして、教育學的立脚地より研究せられざれば、到底世に徹底的指導を與ふる能はずして、亦空論たらんのみ。予が神道と教育學との研究に從事せる偶然にあらざる也。

已に神道の研究に從事するに當りて、先づ感ぜるは、從來多くの學者の研究的態度の墨守的教權的たること是れ也。若し神道をして佛耶二教の如き、單純なる一宗教たらしめば、かくても必ずしも不可なかるべし。而かも予の如く、之れを以つて學術の根柢と

し、進んで現代文明の空氣を呼吸せる青年を指導せんとするには、決してその可なるを見る能はず。かくて予は神道研究に於いて不敏ながら聊か新しき試みを企てたり。名けて神道哲學と云ふ。神道に向つて可及的科學的研究を行はんとするもの也。

本書は素より區々たる小册子。而してその稿の大部分は。已に十餘年前に成れるものにして、嘗て國學院大學に於いて講ぜる事もありき。今や江湖の特志諸賢より、その上梓を求めらるゝこと屢〻なるを以つて、即ち幽底より出だし、修正改補、敢へて之れを印刷に附することゝなせり。

今や歐露の風雲愈〻急にして、東洋の天地亦益〻多事ならんとす。此の時に當り、此の書を公にす。聊か我が國固有の思想の發展に資し、我が國民向上の信念に貢獻する所あらば、予の光榮とする所也。

大正七年三月十九日

東京に於いて

著者識

## 田中義能著述目錄

| | | |
|---|---|---|
| 一 系統的西洋教育史 | 既刊（絕ナシ） | 全一冊 |
| 一 最新科學的教育學 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 家庭教育學 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 平田篤胤之哲學 | 既刊（絕ナシ） | 全一冊 |
| 一 神道哲學要義 | 既刊（絕ナシ） | 全一冊 |
| 一 神道哲學變遷史 | 既刊（絕ナシ） | 全一冊 |
| 一 神道本義 | 既刊（絕ナシ） | 全一冊 |
| 一 本居宣長之哲學 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 神道大意 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 神道史綱要 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 國民道德要領講義 | 既刊 | 全一冊 |
| 一 神道哲學精義 | 既刊 | 全一冊 |

# 凡例

一 曰はく社家神道、曰はく復古神道、曰はく古神道。世、神道と稱するもの甚だ多し。著者の主張は純神道也。純なる我が固有の大道也。已に純也。是れ特に形容詞を冠せざる所以也。

一 本書は小册子にして、僅に著者の研究の一部を收むるに過ぎざりしを憾みとす。然れども著者は、全卷を通じて著者の神道に對する信念を、可及的徹底的に發表したるを信ずるもの也。

一 著者の曩日の著『神道本義』亦然るも、彼れは神道の實際的方面を主とし、此れは學理的方面を主とせり。

一本書は學理的方面を主とするも、文章は成るべく平易に、通俗に、且つ簡潔ならんことに努めたり。

一本書は文章を簡潔にせんが爲に、敬語は多く省略に從ひたり。而かも叙述の態度は、徹頭徹尾敬虔的ならんことを期したるは勿論也。

一本書の校正は、大いに努めたるも、尙魯魚の誤り、往々にしてあるべきを虞る。讀者の諒恕を希ふて止まざる也。

大正七年三月十九日

著者又識

# 神道哲學精義

## 目次

第一章　緒論……一―三
第一節　神道哲學研究の必要……一
第二節　哲學とは何ぞや……九
第三節　常識と科學……一三
第四節　上古の哲學……一六
第五節　宗教及び科學と哲學……一八
第六節　日本哲學……二五

第七節　日本哲學に於ける神道哲學の位置……二九
第八節　神道哲學と傳說の研究……三一

第二章　神の意義……三四—五四

第一節　傳說と「神」の字義……三四
第二節　「神」の觀念……三八
第三節　「神」の觀念の主觀的起源……四三
第四節　「神」の觀念の客觀的起源……四五
第五節　古代の「神」の觀念……四八
第六節　神道と「神」の觀念……五一
第七節　「神」に對する吾人の主張……五二



第三章　天御中主神……五五—七一

第一節　世界の起源……五五
第二節　世界の創造說……五七
第三節　傳說の本質……六〇
第四節　造化の三神……六三
第五節　天御中主神と絕對……六八

第四章　產靈神……七二—九七

第一節　產靈神の時代の研究……七二
第二節　產靈神に關する學說……七五
第三節　支那の學說との比較……七九

第四節　產靈神の眞意義……八一
第五節　託宣……八四
第六節　古傳說の神話的解釋……八八
第七節　神道の進步性……九三

第五章　元靈神……九八―一〇七
第一節　葦牙神……九八
第二節　天之常立神と高天原……一〇一
第三節　國常立神……一〇六

第六章　七代神……一〇八―一二五
第一節　七代神の序次……一〇八
第二節　七代神に對する學說……一一四
第三節　諸册神……一一八
第四節　國土の主神……一二一

第七章　三貴子……一二六―一六一
第一節　三貴子降誕の問題……一二六
第二節　三貴子と二貴子……一二九
第三節　天照大神と太陽崇拜……一三一
第四節　國民的精神と天照大神……一三四
第五節　神道の根本……一四一
第六節　三種の神器……一四三
第七節　天照大神の至德……一五三

第八節　八百萬神……一五九

第八章　神道の內容……一六二—一八一

第一節　道の觀念……一六二

第二節　神道なる文字の起源……一六七

第三節　神道の根本義……一七二

第四節　神道の特色……一七八

第九章　神道と政治系統……一八二—一九九

第一節　神道政治と敬虔の態度……一八二

第二節　神道政治と慈愛……一八四

第三節　神道の經典……一八八

第四節　臣道……一九一

第五節　神道政治と新領土の國民……一九四

第六節　神道政治と民本主義……一九七

第十章　神道と宗教系統……二〇〇—二三六

第一節　神道と宗教との關係……二〇〇

第二節　歷史的宗教と神道……二〇一

第三節　宗教の本義と神道……二一〇

第四節　神道の儀式……二一六

第十一章　神道と道德系統……二二七—二三七

第一節　道德の意義……二二七

第二節　神道道德の本義……二三九
第三節　忠孝一本主義……二三一
第四節　「家」の觀念……二三五
第十二章　結論……二三八—二五〇
第一節　神道の性質……二三八
第二節　神道と敬神崇祖……二四一
第三節　神道と教育……二四七
第四節　神道の將來……二四八

# 神道哲學精義目次 終

# 神道哲學精義

文學博士　田中義能著

## 第一章　緒論

### 第一節　神道哲學研究の必要

人生には色々と矛盾するやうな事があり、撞着するやうな事がある。例へば科學と宗教と云ふ風なものや、經濟と美術と云ふ風なものは、種々の點で矛盾し、種々の場合に撞着して居る。その他自由と强制と云ふやうなことや、保守と進歩と云ふやうな矛盾撞着は一々枚擧するに遑ない程である。けれども我々は此の間に處して、その調和を求め、その統一を得て、人生そのものを解決し、所謂人

生觀を立て、進んて世界觀をも定めんとするのである。之れが人生一般の傾向で、古往今來常に見らるゝ所の現象である。かかる方面の研究を行ひ、以つて人生觀・世界觀を立するのを哲學的研究と云ひ、その成果を哲學と云ふのである。

ゼームスは、人は生れながらに哲學者てある。之れを哲學として意識して居るか否かは別問題てあるが、何人でも何等かの哲學を有し、それによつてその行動を律し以つて世に處して行かないものはないと云つて居る。眞にその通りで、我々の日々の行動は、一から十まで盡く我々の體有して居る哲學觀によつて支配せられて居るのである。從つて其の時代に勢力ある哲學說は、自ら時代思潮を左右し、その國家社會に大影響を及ぼすのてある。彼の啓蒙學派の哲學は、佛國の思想界に深刻な影響を與へ、遂にかの慘憺たる大革命を醞釀したのである。又、フィヒテとかヘーグルとか云ふ學者の哲學が、近代獨逸の國家觀念に影響し、歐洲近代史の一偉觀である獨逸帝國の勃興に與つて大いなる力を有したのは爭はれない。更に最近に於いて、露西亞帝國や獨逸帝國が、相尋いで土崩瓦解したのも、マルクスその他の唯物哲學の深甚なる影響の爲だと見ても、大した差支はあるまいと思はれる。退いて之れを我が國に見ても我が國家の空古の大改革であつた維新の宏大な事業の完成にも、江戸時代の中期頃から、急速に開展して來た、神道哲學の、著しい影響のあつた事は、少しく國史の眞相に觸れたものゝ、何人も首肯する所である。

今や時代思潮の動搖は、世界的の事實である。而して近時メッキリ地位を高めて、世界の檜舞臺に乘り出した我が帝國は、政治、經濟等の方面から、風俗、習慣などに至るまて、世界の影響を免れることは、どうしても出來ないやうになつて來た。從つて我が國の思想界も亦歐米の時代思潮動搖の弊を受け、國家社會に對する我が國民の信念動もすれば混亂の狀態に陷らんとするのてある。されば我々は此の際大いに神道哲學の研究を行ひ、思想の根本を培養し、國民をして種々擡頭して來る所謂新しき思想に對して、誤る所がない樣にするは、現下緊切の急務と信ずるのである。然るに世人はどうかすると神道と云ふ名を聞いた丈けでやれ頑迷だやれ偏狹な愛國心の鼓吹だなどゝ云ふのである。けれどかゝるは自己の淺薄な皮相的批判者であることを表白するに過ぎないのである。

勿論多數の神道家の中には、前世紀の頭腦を以つて偏狹な議論を試むるものがないとも限られない。がしかし、神道家と雖も、明治・大正の敎育を受けたものである。東洋の新興文明國の環境に生活するものである。例外はいさ知らず。その全般の頭腦が頑迷偏狹たるべき理由が何れにあるか。

或は云はん。神道そのものが古代のもので、現代とはかけ離れたものである。それを現代に鼓吹するのは時代錯誤である。西洋哲學の滔々天下に行はるゝ今日、陳腐な神道說又聞くに堪へないと。かゝる淺薄な議論をするものがあればこそ我々は益、神道の哲學的研究を行ひ、彼れ等を自覺せしむるの必要を認むるのである。今日彼れ等の謳歌する西洋哲學でも、果して皆斬新なものであるか。二千年前のプラトーンやアリストテレースの學說が屢、反復せらるゝのはどうしたものか。之れに對して我が神道の極めて進步的であるのを知らないのではないか。元來神道と云ふのは、讀んで字の如く、神の道である。神は古代に勿論出でられて居るが、同樣に現代にも出でられ、將來も亦出でらるべき所のものである。從つてその道は日に新で、又日日に新なる性質を有するのである。

即ち創造に次ぐに創造を以つてし、不斷の創造の行はるゝ所の道である。神道は陳腐ならんと欲するも、得べからざるの道である。

神道の門外者は又或は非難して曰はく、歐米の學說は極めて幽玄深遠であるが、神道のそれは皮相淺薄である。皮相淺薄の學說は、以つて現代を指導するに足らないと。勿論佶屈贅牙な文字を臚列したのを見て、驚いて幽玄深遠な學說と云ふならば、神道は幽玄でもなければ、深遠でもない。けれどもかゝる意味の幽玄とか深遠とか云ふのは、一の遊戲と見て差支へない。遊戲は遊戲で、眞理とは沒交涉である。

抑も我が國が世界に比較すべきなき國家を組織し、特有の文化を有せるは爭ふべからざる事實である。而してかゝる事實の存在は必ずそれに十分なる理由がなくてはならぬ。根據がなくてはならぬ。此の理由又は根據は即ち我が神道なることは、我が國民なると或は外人なるとを問はず、少しく徹底的に我が國家を研究せるものゝ容易に首肯する所のものである。況んや之れを輓近歐米殊に米國に盛に唱道せらるゝプラグマチズム(實用主義)に見よ。「眞理は必ず

實際上の効果を有するものでなくてはならぬ」と說き、徒らに佶屈聱牙なる文字を臚列するを避け、實際上の應用を尊び、思想上の遊戯を排斥して居るではないか。

實際神道は或る點からは、プラグマチズムである。希臘のアリストレースとか、獨逸のヘーゲルとかのやうに、所謂佶屈聱牙な文字で、深遠な學說を說くを好まないのは、プラグマチズムである。今シラーの說を見るに人間の知と行とに關しては四つの見方がある。その一は知を先に見て行は之れに從ふとする。即ち行ふには前に知ることが必要であるとする。ソクラテースの見方である。その二は知と行とは別である。知は人間以上に純なるものに進み、遂に神となる。人間の實用的知識の如きは劣等のものであるとする。アリストレースの見方である。その三は亦知と行とを別とする。即ち異つた精神作用から發する。併し行即ち意志の働が貴いとする。カントの說である。その四は第一の說の反對で、行を先に見て、知を後に見るのである。即ちすべて實行から實際的知識が發達し、理論的知識は之れに從つて發達して來ると云ふのである。之れがプラグマチズムの見方である。神道亦事實を貴ぶのである。實行を尊重するのである。要は實行にある。百千の知があつたとて、實行に價値のないものは、無用のものとするのである。此の點當に神道哲學はプラグマチズムの哲學と云つてもよい。

けれどもプラグマチズムの哲學は、實際上まだ知に偏するやうに思はれる。此の點が神道哲學と十分に一致し得ない。神道哲學は此の點から云へば、主知說(インテレクチュアリズム)又は主理說(ラショナリズム)と云ふが如き、理性或は認識に重きを置くばかりでなく、感情にも意志にも重きを置く、つまり人間そのものを立脚地とするヒューマニズム(人本主義)であると云つたがよいかと思ふ。

されど吾々は神道哲學が、プラグマチズム若くはヒューマニズムそのものと云ふのではない。東洋哲學は、東洋哲學の特色を有して居るから、神道哲學を直にプラグマチズム若くはヒューマニズムとは云へない。唯、比類を西洋哲學に求むればかく云はれると云ふに止まる。

之れを要するに、佶屈聱牙なる文字を臚列するは、一部のものゝ嗜好には投す

べきも、眞理と沒交渉であるは、かゝる西洋哲學に見ても、體得せらるゝことゝ思はれる。

或は宗教的感情に厚い人の中には、人は信念によつて動くのである。信念は感情に立脚する。神道の徹底は人の感情に訴へて然る後得らるゝので神道の哲學的研究の如きは無益であると主張するのである。勿論人は感情の動物とも云はるゝ位に、感情によつて動く場合も多いが、併し人の活動の淵源である信念は、單に感情ばかりから出來るのではない。之れには人の有する觀念、概念が餘程關係を持つて居る。て、我々は神道の哲學的研究を行ひ、人の精神の全方面から、日本哲學の神髄を發揮せんと務むるのである。

想ふに輓近の我が學界、思想の研究盛に行はれ、文化運動頻りに高調せられ、實に空古の偉觀を呈して居る。けれど深くその眞相を觀察すれば、遺憾ながら、西洋文化の翻譯と云はなくてはならぬ。西洋思想の模倣と云はなくてはならぬ。勿論陸海軍備の制度、殖産興業の組織、其の他文學科學等の學術技藝、之れを模倣し、之れを翻譯する敢へて不可なきのみならず、大いに之れを奬勵しても可なりである。唯、夫れ我が國家成立の根本思想に至つては、斷じて我が固有獨自のものによらなくてはならぬ。之れをも模倣するに至つては我が國民は永久に歐米を師としなくてはならぬ。永久に歐米の後塵を拜さなくてはならないのである。是れ豈に大和魂を有する我が國民の堪へ得る所であらうか。

以上の諸點から我々は大いに神道哲學を研究し、之れを神髄とし、西洋文化を日本化して之れを皮肉とする、我が國民獨自の人生觀、世界觀を開拓するを必要とするのである。

## 第二節　哲學とは何ぞや

神道哲學と云ふと、先づ第一に起る問題は「哲學とは何ぞや」と云ふのである。ホッブスは此の問題を解釋して、「哲學は原因によつて物體を說明する學問だ」と云つて居る。ユーベルウエッヒは、「哲學は諸原理の科學である」と云ひ、スペンサーは「哲學は完全に組織せられた智識である」と云ひ、先年我が國に來た米國のラッドと云ふ學者は、もつと詳はしく解釋して、「哲學は、終局の實在に關して、

種々の科學で、假定したり又は設定したりした、もろ〳〵の原理の進歩的合理的體系である」と云つて居る。學問も澤山あるが、哲學位色々の學者によつて、色々に解釋せらるゝ學問はたんとないと思はれる。そこで著者は哲學の起源から說いて、その意義を明にしやうと思ふ。

天には日月星辰が、萬古に變幻し、東西南北に出沒して窮極する所がない。地には河海山嶽が、或は奔流し、或は起伏して居る。人はその間に生れ或は社會をなし、或は國家をなして居る。萬象實に複雜である。而して此の間に君臣父子の關係の生ずる所以、夫婦昆弟の關係の生ずる所以、その他、禽獸の活動する所以、魚鼈の游泳する所以、且に之れと應接し、夕に之れと進退するも、一念の注意至るなければ、何等の奇なく、何等の妙もないが、一たび想を彼れに走せ、退いて深く自ら省みて見ると云ふと、一體何う云ふ譯でかう云ふ樣になるのであるかと云ふやうな、色々の疑問が起つて來る。ひとつ此の解釋をして見やうと思ふのが即ち哲學なのである。哲學と云ふものは、人の思ふ通りそんなに深遠高尙のものでなく、當り前のことの考察であつて、何人でも一種の哲學觀は有して居るのである。

それから一方から見ると、我々は生れつき物を知りたいと云ふ考がある。物を究めて見たいと思ふ。解らない事でもあると奧齒に物が挿まつて居る樣な氣持がするものである。假令ば新聞に何か解らないものがあると字引を引くとか人に聞いて見るとかして見る、「オイ君此間新聞に斯ういふことがあつたが、ありや何だ」とすぐに聞いて見る。子供が「お父さんありや何だ、これは何だ」と矢鱈に物を聞く。これは皆物を知り度いからである。支那の朱熹と云ふ人。此の人が、四つの時に天を指し、父に向つて「これは何だ」と云ふ、父が「天だ」と云ふと「天の上には何物があるか」と聞いた。すると父は「奇妙なことを問ふ子だ」といふたといふことがある。凡べて人と云ふものは、以上述べたやうな山川草木の存在する根元、禽獸蟲魚の存在する所以、其の原因を知りたがるものである。我々は親に孝行をしなければならぬ、君には忠節を盡さねばならぬ、これは當り前であるが、何故に親には孝行、君には忠節を盡さねばならぬかと云ふことを究めたがる。かう云ふ工合に天地萬象について驚異の念を起し、その然る所以を知ら

んとする考を生じ、夫れで始めて研究して見る氣になる。これは斯うとかあゝとか自ら說明が出來るか。又は說明してくれる人があれば始めて滿足する。かくて我々は哲學に這入つて行くのである。だからアリストテレースは、「古今を通じて人は驚異によりて、哲學に志すものだ」と云つて居るのである。

更に眼を轉じて、哲學と云ふ文字を見るに、元來哲學はフキロソフキーと云ふ語の譯字である。而してフキロソフキー(Philosophy)と云ふ字は、もと希臘語のフキロソフキアから來て居るのである。フキロソフキアは、愛智識(love of wisdom)を意味して居るのである。蓋し我々人類は已に述べた通り、知識に對して自然的欲求を有して居ることは爭はれない。だから希臘の昔に哲學なる言葉の成立に種々の歷史があつたにしても、要するに知識を愛すると云ふ考がその根本であつたのは明白である。而して物を求めこれに執著するのは愛で、事物の眞相を知るのは智識である。だから哲學と云ふものは何でもむづかしいものではない、我々の日々接する事物の眞相を知りたいとする學問、これが哲學である。哲學はむづかしいものではなく普通のものであつて、誰れにも解るものである。

## 第三節　常識と科學

前節に述べた通り、我々が色々のことを知りたいと云ふ强い欲求を以つて居る、そこで直に常識に訴へて之れが解譯を求むるのである。さてその常識とか哲學とかいふことは、普通新聞にも何でも出て居るから、斯う云ふ語はよく解つて居るやうであるが、實際はちよと解らないのである。一體哲學とか、常識とか、理想とか、聯想とか云ふ語は普通の人も常に用ひて居るが、其の意味はといふとちよと解らない。時に理想とか聯想とか云ふ題が中等敎員の國語漢文檢定試驗等に出るが、何うも色々の答案が出るさうである。聯想とは聯は聯絡の聯なり、想は思想の想なり、故に此方の想を先方へ聯るなりと云ふやうに解釋をする。國語の學者は『古事記』や『土佐日記』のやうな古いものばかりでなく、今日の國語も知らなくてはならない。國語の學者に限らず、今日の人は勿論今日の語をよく知る必要がある。今は國語の御話をして居るのではないからこんな事は

閑話休題にしませう。さて常識とは英語のコンモンセンスを譯したものでコンモンが常、センスが識なのである。普通の意識―意識、これは我々の普通の心の働き、普通と云ふのは一般の人が皆持つて居る、例へば「誰某れが死んだ、何所そこの太郎兵衛が死んだ」、「そりや可哀想だ」といふ、それが普通の意識と云ふものゝ働きで常識の働きであるが、夫れを若し「彼奴が死んだと、そりやいひ事をした」などと云ふものがあるが、これは一般普通の場合にては、普通の意識の働きではない。よく人が「常識で判斷し玉へ」と云ふが、是れは普通の人の持つて居る心の働きで判斷せよといふことである。マア月を見る。月を見るといふと中に黑い物がある。「アリヤ何だらう」、「何ッ兎が餅を搗いて居るのだ」、「さうか大きな兎だな」といふ。これは幼稚な解釋ではあるが、やはり常識である。常識の程度が低いばかりである。「オイ君此の小刀はなぜコンナに錆たのだらう」、「それは床の下に落ちて居たから腐つたのだ」と解釋する。鐵の小刀の腐つたと云ふのもヤハリかゝる常識の解釋である。漁夫がよく明日は風だとか雨だとかを當てる、之れは必要に迫られて天候を見るのである。これらは皆彼れ等が常識で見るのであるが。其の常識は科學や哲學と何ういふ區別があるかと云ふに、漁夫が天候を見て大概間違はない。けれども此の漁夫を山國につれて來て、明日の天氣は何うだと問ふ。彼れ等の判斷は中々當らない。當らないのは道理、夫れは彼れ等の住める海濱の地理に依つて、風がどうとか、あの山に雲が何うとか、其の土地にあるものに就いて、永年の經驗の結果が遂によく當る事になるので、山國へ來て見ると四方八方に山ばかりで、當てにして居た山がないので、當ることが出來ない。然るに東京の天文臺の先生をつれてくると、どんな山國へ來てやつて見ても大抵當る。西洋へ連れて行つても支那へつれて行つても大抵間違はない。常識と云ふ方は往々間違がある。天文臺の先生の方は、常識でなく科學で判定するのであるから間違が少くない。無いとは言はぬが先づ少ない。丁度同じ天氣を見るにしても、漁夫が見るのと、天文臺の先生が見るのと違ふが如く常識で見るのと科學で研究するのとは違ふ。一體我々は常識で判斷する丈では滿足が出來ぬ。お月樣の中に兎が餅を搗て居るでは滿足が出來ぬ。鐵の小刀が腐敗するでは滿足が出來ぬ。これを研究して見るのが科學である。

科學とは此の宇宙の事物の現象に關する智識で、つまり哲學の初步で、更に一步を進めたものが哲學である。科學は哲學の門戸で、哲學は科學の堂奥である。さりとて哲學が深遠と云ふ譯ではない。手近な門戸から入れば手近な堂奥に上られる次第である。

## 第四節　上古の哲學

夫れで科學と云ふものは、我々が一般の常識では滿足が出來なくて、一步を進めて何處へでも應用の出來る研究をして見たいと云ふので、研究して出來るのである。所が上古に於いては、科學も又これから這入つて行く哲學も、極めて單純なもので、それが所謂傳說によつて現はれて居る。元來この傳說と云ふものは當時の民族の文化の精華を集めたのもである。尤も其の哲學科學と云つても、今日のそれらと比べて同じとは云はれぬ。つまり傳說は當時の文明の精華が悉く集まつて居るのである。言ひ換ゆれば傳說は當時の哲學である、科學である、歷史である、道德である、宗敎であるといふ樣にあるらゆ物が包含されて居るのである。

傳說は當時の哲學と云つても當時の傳說と、今日の哲學とを比べて見ると大いに違つて居る。其の違つて居る點を述べて見れば、次の樣である。傳說と今日の哲學とは其の包含する所の智識の程度に於いて著しき差異のあるのは、殊更に云ふ必要もないが、その他に傳說には餘程想像が這入つて居る。今日の哲學は理論理窟に走つて居る。傳說の方は太古に成れるものだから何ういふ人によつて作られたかといふことが明かでない。即ち其の民族全體で作つたものと解釋される。哲學は、素より、民族の經過した時代精神を根柢とするのであるけれど、外觀一個人の產物であるかの樣である。そこで哲學では誰れ某れと名が付いて居る。西洋ではアリストテレースの哲學、カントの哲學、スペンサーの哲學とか、日本では伊藤仁齋の哲學、荻生徂徠の哲學、本居宣長の哲學、平田篤胤の哲學だといふやうに、皆其人の名が付けられる。傳說には誰れの傳說と云ふ事はない。先づ大體の區別はこんなものである。其れで傳說が發達して來ると種々になつて來る。即ち、

傳說――{知的方面に發達しては……哲學、科學
　　{情意的方面に發達しては……宗教、道德

斯ういふ工合になるやうである。然ういふ釋で傳說と云ふものが、發達して來ると、知的方面、即ち我々が色々の事物を知りたい、研究したいと云ふ方面が發達し來ると哲學となり、科學となり、情意的方面即ち我々が安心立命を求めたり、良心の滿足を求めたりする感情意志といふ方面が發達して來ると、宗教となり、道德となるのである。

## 第五節　宗教及び科學と哲學

哲學と宗教とは、どんな差があつてそんな名がついて居るのかと云ふと、宗教は詰り我々が或る我々以上のもの、即ち人間よりも、より以上のものを認識して、これに依從し、安心し、生活して行く狀態を云ふのである。それが哲學と何ういふ區別があるかと云ふに、本は同樣に傳說から出たものであるから嚴密に區別することは出來ぬ。が今日世間の學者は斯ういふ風に區別して居る。即ち成立の主體が違うと云ふて居る。宗教の建設者と、哲學の建設者とが違う。宗教の方は民族的に出來て居る。哲學の方は一人の人が唱へて居る。宗教の方は歐羅巴の耶蘇教とか、猶太の猶太教とか、印度の佛教とか云つて居るが哲學の方は誰れ某れの哲學と云ふて居る、斯ういふ區別を立てる。けれどもこれも餘り當らぬものである。佛教は釋迦とか、耶蘇教は基督とか、波斯教はゾロアスターとか、マホメット教はマホメットとか云ふやうに矢張り一人の人が創めて居る。哲學の誰れ某れといふのと同じ事である。宗教の方は神祕的の傾がある、それから又想像的である。夫れから又詩的である。哲學の方は方法的である。それから系統的で、概括的である。と云ふのが、又學者の區別である。これは大體に於いて區別したもので、もと二つながら傳說から來て居るので劃然と區別することは出來ぬ。ヘーゲルと云ふ人の哲學や、基督の如き宗教では、こう云ふ風に區別も出來るが、佛教などでは當て箝らない、神祕的の處もあるが、又哲學的の處もある。元來宗教でも、哲學でも、共に世界觀、人生觀を立て以つて我々人類の精神的欲求を滿足せしめやうとする點に於いては、毫も異る點はない。唯、知的

方面に傾いて居る人は哲學を取りて、その滿足を得んとし、情意的傾向に强い人は、宗教に歸してその慰安を得んとして居るのである。コー云ふ次第であるから動物と植物とが、根本的に區別せられないやうに、宗教と哲學とも根本的の區別は出來ない。で、今は唯、其の傾きを以つて區別するだけのことである。

科學、これに就いては已に先きに論及したが、今少し述べて見やう。科學と云ふ言葉は今日非常に用ひられて居て、實に科學萬能と云ふ位である。少し學問すると、すぐ科學と云ふ。口ではよく云ふが科學といふものゝ説明はといふと是れも亦一寸其の答の出來ない者が少くない。さて科學と云ふものは何んなものかと云ふと、我々の色々の狀態を見てそれを知りたい、それを知るには常識では滿足が出來ない。で常識から一歩進んで、これを研究せんとする。それが科學なのである。丁度先きに述べた通り、海濱の漁夫は常識で判斷するけれども、天文臺の先生は天文學でやる。即ちこれが科學。電車が縱横に動く。これは電氣工學と云ふ科學で、電車を作る。それを常識でいゝ加減に作つたなら、いつかな動きはしない。隧道を穿つ。これは土木工學、それを常識でいゝ加減にやれと云ふので掘つたなら、間違つて行き違ひとなつて終う。夫れが一寸も間違はないのは科學の應用である。コー云ふ科學は何ういふものかと云ふに、然うむづかしいものではない。我々の普通の智識を整頓したまでゝある。事實と云ふものが茲にある。雨が降る、水が流れる、腹が減る、頭痛がする、眠たい、子供が生れる、鳥が鳴く、これ皆事實である。此の澤山な事實の中、一類の事實を成るべく澤山集めて來て、それを實驗し、觀察し、統計に訴へて、然して得た處の智識を秩序を立て、それを統一的に組織したもの。これが科學である。假令ば人が怒る、人が泣く、人が注意する、人が同情する。これは皆人の心に關した事實である。これを色々澤山集めて來て、その狀態や法則を研究して出來るのは心理學と云ふ科學、雨が降る、雷が鳴る、水が氷る、火が燃ると云ふやうに物理的の事實がある。それを集めてその狀態や法則を研究したものが物理學と云ふ科學、而して水は冷くなれば氷る、熱すれば蒸發する、これは事實、水は氷るといふが一つ實驗して見やうといふので零度にして見ると成程氷る、熱して見ると矢張蒸發する、これが實驗である。然し又實驗して見ることの出來ないものがある。地球が運轉

すると云ふがこれを一つ止めて置いて、そして回轉さして見ると云ふやうな事は出來ない。日蝕を人工的に作つて見やうと云ふことは出來ないかう云ふことは觀察でやるより外はない。觀察、これは或る物に注意して見る。例へば時計の鳴る音を聞いても無意識で居れば解らぬが、注意して數へて見れば何時といふ事が解る。これは聞くのであるが、見ても聞いても、それをよく注意するやつばり觀察である。我々はかやうに一類の事實を實驗したり、觀察したりする、それから統計を取つて見る。コー云ふ風にして大いに確實な智識を得るのであるけれども、これもばら〳〵ではいかぬ。その觀察したり、實驗したり、統計したりした結果を一々分類して系統的に秩序よく綜合しなければならぬ、これが即ち科學である。科學と云ふと非常にむづかしいやうだが、然うむづかしい者ではない。其の科學と哲學とは何ういふ別があるか。心理學、物理學、醫學、それからこの醫學と云ふ中にも解剖學もあるし、內科學、外科學と色々あつて、千差萬別數へきれぬ程あるが、要するに我々の目の屆く處、耳で聞く處だけしか及ぼして居らぬ。假令ば、水が氷る、湯が沸く、然ういふ事實に就いて云ふ丈で、さう云ふ人間は何ういふものか、然う云ふものが實際に存して居るか、或は空想ではないかと云ふ樣な、そんな事には一切構はぬ。それを科學より更に遡つて、水の水たる所以、人の人たる所以、さう云ふ風に研究する、これが哲學である、同じ事を見ても哲學の方は一歩進んで居る。西洋にては哲學の事を科學の科學と云ふ人もあるのである。凡べての現象を一歩遡つて研究して居るのである。常識を以つて滿足することの出來ない我々は、研究する人そのもの、研究せらるゝものそのもの、その因果の關係とか、時間や空間、そんなものを全くあるものと假定してその研究をなして居る科學を以つては、滿足が出來ない。茲に哲學に突入するのである。

そこで哲學と云ふものは、科學で以つて研究せられた、もろ〳〵の原理原則を材料として、世界人生の根本原理を考究せんとする所のものである。で、ヴントは「哲學は特殊科學によりて與へられた一般の知識を少しも矛盾しないやうに一つの體系に組織した科學で、古今東西に施してもとらない所のものだ」と云つて居る。シヂウィックと云ふ人もコンナことを云つて居る。即ち「哲學と云ふも

のは、色々の科學や、色々の秩序系統ある思想の原理、方法及び重要な結論を共に比較したり、考究したりして、出來る丈け高等な統一の組織を得やうとする研究である」と云つて居る。要するに一言で云へば、哲學は宇宙や人生に於ける根本原理の研究に外ならないのである。

哲學は右のやうな次第で、百般事物の根本原理の研究をするものである。百般事物と云ふからには、その研究事項が如何に廣汎であるかゞ想像される。だから之れを研究せんとするには先づ以つて之れを正確に分類して、どんな風に研究すべきであるかを定めなくてはならない。希臘の哲學者、プラートンの哲學は、辯證法、物理學、倫理學のやうに分れ、辯證法にては論理學、形而上學を研究し、物理學で精神界物質界等を研究し、倫理學で以つて人生を研究したものである。近世の學者ベーコンも亦哲學を三つとし、之れを天然哲學、人生哲學、神學に分つたのである。天然哲學の中には、自然科學や、形而上學を含み、人生哲學には倫理學や、政治學を入れ、神學は、天然神學、天啓神學に分つたのである。處が輓近の學者になつて、此の哲學の分類は益、複雜になつて來た。が我々は之れを認識哲學、自然哲學、人生哲學の三つに分つを最もよからうと思ふ。で自然哲學で世界觀を定め、人生哲學で人世觀を研究するのである。

## 第六節　日本哲學

そこで我々は我が國に於ける哲學の研究に從事しやうと思ふのである。かの樣に我々が我が國の哲學と云ふと、一部の人士は論じて方今文運は極めて隆盛で、學術も極めて振興して來た。其の結果として哲學も亦盛に起つて來たけれども、我が日本固有の哲學とか、我が國の神道哲學などと云ふことは、甚だ可笑しなものである。日本には由來哲學と云ふものは存在しないのである。偶、哲學のやうなものが存在して居るとしても、是れは皆支那、印度より輸入して來たものであつて、日本固有のものではないのである。即ち日本の哲學と云ふものは、印度思想系、支那思想系に屬せるものであつて、日本固有の思想系と云ふものはないのである、と主張するのである。けれども能く考へて見ると云ふと、哲學と云ふものは、先きに述べた通り、元來人類が自然に受くる所の外界の刺戟と、其の

知的欲求とに基いて起つて來たものである。人類は之れに依つて宇宙の眞理を發見し、之れに依つて其の精神の要求を滿足させやうとするのである。斯くて哲學は文明の根柢となり、開化の源泉となるものである。だから苟も古より國民的の發達を遂げ、國民的文化に進んで居る人類種族には、何等かの形式の、哲學の發達を見ないと云ふことはないのである。古來東洋に立國して、文化の夙に發達して居る我が帝國に、固有の哲學がないなどと云ふのは、餘りに考へのない話であらうと思はる。素より論理學や、認識論、自然科學等の如きものゝ基礎の上に立てられたものでなければ、斷じて哲學でないと云ふならば、それは「日本に哲學は無い」と云ふても、宜しからうと思はれる。が併し此の立脚地から論じて行くと云ふと、西洋の哲學と云つても、古代や中世に於けるものは、殆んど其の哲學たるの價値を有さないのである。然るに僅に萬有の根本は水であると主張した所の、タレスを以つて西洋の哲學の鼻祖とし、宇宙の本體は無極であると唱へた所の、アナクシマンドロスを其の宗とし、又それらの哲學に、論理學や認識論や、自然科學の這入つて居ると、否とを問はないのである。さうして見ると



「古來日本に哲學はない」などと云ふのは、甚だしい撞着ではないか。試みに古來我が國民中に出た所の、學者、思想家の學說に就いて、仔細に調べて見よ。西洋で所謂唯物論とか、唯心論とか、神祕論とか、唯理論とか、樂天主義とか、厭世主義とか云ふやうなものは、皆之れを指摘することが出來るではないか。吾々は假りに一歩を讓つて斯かる我が國の哲學思想は、支那や印度の思想の影響を蒙つて成立したものとするも、而かも彼の希臘の哲學も、亦埃及やフェニキヤ、其の他西亞細亞地方の思想の影響を受けて居り、獨逸の近世の哲學も、英國や印度の思想の影響を受けて居ることが、尠くないではないか。だから我が國の哲學が、支那や印度の思想に負ふ所があつても、我が國の哲學たるに於いて、何等の係はる所はないのである。元來世界の原理は、東西の別なく、人世の眞理は、彼我の差はない筈のものである。即ち之れを稱して普遍的であつて萬古一であると、云ふことが出來るのである。斯く眞理に國境なく、原理に時代がないのであるけれども、而かも其の眞理が差別界に寫象せられ、其の原理が實際界に顯現せらるゝに至りては、或は風俗習慣の影響を蒙むり、或は土地氣候の勢力の爲に支配せられ、或

は國民固有の性向の爲に制限せられ、東西彼我の間に、著しい差異を來し、學として現はれ來る場合に、一個の特色を帶びて來るのは、誠に自然の勢ひである。而して我が國民は、古來日本國民として一種の特色を有して居る、所謂日本固有の哲學即ち神道哲學を產み出して來たのである。此の日本固有の哲學の思想は、我が一般の國民の思想の基礎となり、我が一般の國民の精神の根柢と成り來るのである。「西洋の哲學が整頓して居ると云つても、西洋の哲學が發達して居ると云つても、直にこれを輸入して、我が國民の要求を十分に滿足せしむることは出來ないのである。けれども、支那の哲學でも宜しい、印度の哲學でも宜しい、西洋の哲學でも素より不可はないのである。苟くも斯の思想の基礎の上に立てられ、斯の思想の根柢の上に組織せられたならば、初めて我が國家社會の要求を滿足せしむることが出來るのである。是れと云ふも其のものが、即ち日本の哲學であるからである。斯う云ふ筆法で昔から、支那の哲學も這入つて來て日本の哲學となり、印度の哲學も這入つて來て日本の哲學となり、我が文明の進步に貢獻し、國運の發展に寄與して、今日に及んだのである。今や西洋の發達したる哲學が、澎湃として我が國に侵入して來て居るのである。吾々は須らく上下幾千年陶冶し來つた所の、我が固有の思想の研究を行ひ、之れを基礎として此の西洋哲學を日本化し、之れを利用して、新たに一大哲學系統を組織すべきである。是れが抑々我が國民の一大任務である。徒らに彼れ等の餘瀝を歃り、彼れ等の糟粕を嘗めて居ると云ふのは、吾々の取るべき所ではないのである。

## 第七節　日本哲學に於ける神道哲學の位置

抑も日本の哲學には、既に述べた通り、支那の思想が這入つて、日本の思想となつたものもあるし、印度の思想が這入つて、日本の思想となつたものもある。而して其の間に立つて、我が國固有の思想の發展したものも大いにあるのである。隨つて日本の哲學と云ふものは、頗ぶる複雜な哲學となつて居るのである。けれども、英國の哲學が、如何に種々に變化しても、而かも經驗說を以つて其の思想を一貫し、大陸の哲學が如何に幾多の波瀾を有して居つても、常に合理說に傾き、以つて其の特色を發揮して居る工合に、日本の哲學も亦動かすべからざる固有

の思想を持つて居つて、有らゆる外國の思想を日本に同化するに於いても、常に其の特色を發揮して居るのである。而して其の特色の最も純粋に發達して來て一大系統を爲すものは、神道哲學であるのである。それに次いで武士道哲學心學哲學と云ふやうなものがあるのである。それから外國の思想を取つて來て、日本で同化した所の哲學には、無論儒敎哲學、佛敎哲學、道敎哲學と云ふやうなものがあるのである。之れを表にして見ると云ふと、左の通りである。

- 日本哲學
  - 日本固有の思想の發展せるもの
    - 神道哲學
      - 惟神神道哲學
      - 佛敎的神道哲學
      - 儒敎的神道哲學
    - 武士道哲學
    - 心學哲學
  - 外國の思想の日本化せられたるもの
    - 儒敎哲學
    - 佛敎哲學
    - 道敎哲學



此の表に就いて見る通り、日本の哲學に於いて、最もよく我が國固有の思想を代表して居るものは、實に神道哲學であるのである。で、吾々は、日本固有の思想を研究せんが爲に、此の日本固有の思想を代表して居る所の、神道哲學を研究せんとして居るのである。其の神道哲學は、日本の哲學であつて、勿論日本固有の思想の上に成立して居るのである。日本固有の思想と云ふものは、上古に於いては已に述べた通りの次第で、專ら傳說として發表せられて居る。そこで其の傳說は、神道の根柢となつて居るのであるから、神道哲學の研究は、先づ第一に、是非とも傳說によらなくてはならぬ。

## 第八節　神道哲學と傳說の研究

我が國の傳說の研究は又是れが種々の方面から出來るのである。即ち神道的方面、武士道的方面、心學的方面、神話學的方面、純歷史的方面、先づ此の位である。神道的方面は傳說を神道として研究し、以つて人の知的、情的、意志的要求に應じやうとするのである。然るに此の方面の中には、更に多少の偏する所があるの

を免れない。そこで惟神神道的の研究、佛教神道的の研究、儒教神道的の研究と云ふ風に分れて來る。又武士道的の研究法からは、從來の我が武士的階級に、最も適するやうに研究してあつて、心學的研究方面からは、我が商賈に從事して居る者に、特に其の行爲の規範となるやうに、研究されて居るのである。けれども、此の武士道的、及び心學的の研究は、何れも人の意志的要求を滿足せしめんとするのであつて、殊に一方に偏して居るのである。次に傳說を、世界の各國に在る所の神話と同一に見て、之れに科學的研究を施さうとするものがある。之れが神話學的の研究で、又純粹なる歷史的研究を以つて、傳說に臨まんとするものがある。併し此の二つは、共に主として人の知的要求を滿足せしめんとするのであつて、亦十分とは云はれない。で今之れを表示して見ると左の通りになる。

日本固有の思想＝傳說

で均しく日本人と云つても、或は理性に偏して居る者もあるし、感情に偏して居る者もあるし、意志に偏して居る者もあるからして、此の日本固有の傳說の研究にも、或は武士道的とか、心學的とか、或は純粹なる歷史的とか、神話學的とか云ふ風ないろ〳〵の區別も起つて來るのである。けれども吾々は此の神道的研究、殊に惟神神道的研究が、最も吾々の知的要求、感情的要求、意志的要求に應じて居るものと認めて、神道的方面の研究を行ひ、さうして、神道哲學の、完全なる系統的組織の根柢としたいのである。

# 第二章　神の意義

## 第一節　傳說と「神」の字義

我が固有の傳說は、その端を神の觀念を以つて發して居る。而して或る意味より云へば、我が傳說は今日に於いて活躍し、無限の生命を以つて發展し、その內容は全く神の活動の歷史とも云はるゝのであるから、傳說を根柢として研究する所の神道哲學の研究は、先づその神なるものゝ解決より初めなければならぬ。そこで神と云ふ言葉は、どう云ふ意味を有つて居るのであるか。と云ふ問題になつて來ると、昔から學者の間に色々の解釋の仕方がある。或は神を以つて鏡若くは鑑と云ふ風な言葉の約りとして解釋しやうとする學者がある。例へば忌部正通と云ふ人は、カミはカムガミの略語であつて、カヾミと云ふのも詰り此のカンガミから出て來て居るのである。そして其の意味は神慮は明鏡の萬物を照すが如くに、一法を捨てず、一塵を受けないのであると云ふ樣に解釋して居る　それから僧契沖は之れを以つて、鏡の略語として居る。カガミの中のガの字の畧されたのであると主張するのである。それから谷川士清と云ふ人は、之れを以て明見のアの字の省かれたのであると解釋して、神明の照臨ましますから斯う云ふ名が出たのであると云ふ意味に解釋したのである。さう云ふ風に國語學者の方から解釋を下して居るのと同樣に、又支那流の解釋を下さうとして居る者もある。即ち支那流と云ふのは、支那では德は得なり、仁は人なり、義は宜なり、天は顚なりと云ふ風に、音の近きものを以つて解釋して行かうと云ふのである。斯う云ふ樣な解釋を取つて來て、さうして神の言葉を解釋して見やうと云ふのが、儒者の方の說である。其の一二の例を言ふて見ると、貝原益軒は「神は上なり」と言つて居る。さうして、カガミのガの字を畧されたと云ふ說があるが、それがわるいと云ふことは『直指抄』と云ふ本にも見えて居る、鏡の未だ出來ない時、既に神の名はあつたのである、此の上の字の正訓を取らないで、鏡を取つて附會する、すべて斯う云ふことは僻事であると云ふのが、益軒の說である。それから伊勢貞丈も亦此の解釋を取つて、神をカミと言ふは上である。尊ぶべき

ものなる故、上に在します名にて、カミと云ふのである。斯う云ふ解釋を取つて居る。それから新井白石のも亦此の類の見方である。白石の說で見ると、神と云ふのは人である。我が國の俗、何でも尊ぶ所の人を呼んで神と云ふのである。古今の言葉は同じであるから、此の神と云ふのは尊稱の意味に取れる。今の文字を借りて用ひるものだから、或る時には神と記し、或る時には上と記すやうな別が出來た。昔は唯、何れにもカミと言つたのである。斯う云ふ學者の說は、皆神と云ふ字を上と云ふ意味で解釋して行かうと云ふのである。所が神道學者はどう云ふ風に解釋して居つたかと見ると、本居宣長は、神と云ふことに就いては昔から色々說があるが首肯すべきものは、どうもない。が、自分にも未だ一向考が附かぬと言つて、何とも說を立てゝ居らぬ。その門人平田篤胤は、まだ若い時神道の本を書いた、『靈能眞柱』と云ふのである。其の本に於いては、神と云ふのはカビモエと云ふ言の轉略したのではないか、何故かと云ふと可美葦牙彦舅神と云ふ神は、成り始めに出來た神であるから、それで神と言へば、此の可美葦牙彦舅神を本として言ふたものと見える。斯う云ふ工合に、可美葦牙彦舅神と云ふ神から、カビモエと云ふ解釋を取つて來て、さうして其のカビモエが轉り略かれてカミと云ふ言葉が出來たのであると云ふ解釋を下したのである。が、併し此の時には未だ非常に疑はしい、「あらざるか」と云ふやうな言葉を使つて居たけれども、後篤胤が一生の心血を濺いで『古史傳』と云ふ書を著はせる時に方つては、此の言葉は千言萬語の中で一番初めに辨へて置かなければならぬのである。斯う云ふて神と云ふ言葉は『日本書記』の初めにある所の「天地未だ剖れず、陰陽分れず、渾沌たること鷄子の如く、溟涬て牙を含めり」。此の牙と云ふのが本である。昔は之れをアシカビと訓んだけれども、それは間違ひで、又キザシとも訓むが之れも允く當らない。カビと訓まなければならぬ。で其のカビと云ふ字のカは彼の意にて物を其れと指して云ふ言葉、ビは、轉じてブとなつて加夫となり、又加牟ともなるのである。そして其のビの意味は、實に靈妙なるものを言ふのである。斯う云ふ解釋である。尙此の他に平田翁の學說を承けた美甘政和は、カはカスミ、カゼ、カヲル、カスカ、カクルなどのカで、ビは奇靈のビで靈妙の義とし、鈴木重胤はミと云ふ方を精靈と云ふやうな意味に解釋して居るので

ある。

## 第二節　「神」の觀念

で、斯う云ふ神の言葉の解釋を引括めて見ると、神に對し、略、三種の見方がある と云ふことが了解せられるのである。即ち政治的見解を下して見ると、益軒や貞丈の樣に、上の字を以つて解釋するのである。上に在ます人であると云ふ風に說いて來るのである。又宗敎的見解を下して見ると、どうしても平田流の靈妙なるものと云ふ風の意味になる。又道德的見解を下して見ると、忌部正通一派のやうに、神は鏡の如く萬物を照されるもので、吾々の心の善い事惡い事直に皆神に映るのである。神はさう云ふ風に照臨在すのであるから、吾々は常に善い事をして惡い事をしてはならぬ。斯う云ふ解釋が附いて來るけれども、神道はさう云ふ工合に、政治的とか、宗敎的とか、道德的とか云ふ風な、一方面に限られた道でないのである。であるから斯う云ふ風に、一方面を主として神の言葉を解釋しやうと云ふ事は非常に困難な事になつて來る。近來は蒙古語などを研究して、カミの語原を之れに求めんとする人もあるのである。けれども神と云ふ觀念は、西洋の學者などが、人間に先天的に有るものだ、詰り生れ付に斯う云ふ觀念があるものだと云ふやうな工合に、世界何處に住つても、どんな人種について見ても、其の觀念の存在を認めることが出來るのである。勿論非常に發達して居るのと、極めて幼稚なものとの別はあるけれども、どんな人種についても、何か或る種の神と云ふ樣な觀念を有つて居ない人種は、先づ無いと言つて宜からうと思はれる。さう云ふ工合に神と云ふ言葉は、一般の人種が有つて居るのであつて、さうして又生れ付とも言はれる位に古い言葉である。であるから、今日から國語の研究家が色々の方面から研究しても、中々神と云ふ言葉について正しい解釋を得る事は困難であらうと思はれる。從つて到底感服の出來るやうな解釋は難かしいかと思はれる。唯、神は上であると云ふ說は、取るべきであるやうに思はれる。此の神と上とが同一であると云ふ解釋は、語源の研究と云ふ譯ではない。語源と云ふと、それはカミと云ふ言葉は、どう云ふ根本から出たのかと云ふ風に、遡つて行かなければならぬ。けれども先づ神と云ふ言葉は、上と

同じである、斯う云ふ説が最も穩當であらうと思はれる。隨つて此の上と云ふ解釋は、上に在ます所のものを以つて、神と云ふのである。で今日でも朝廷のことをオカミと云ふし、又長官の事をカミと云ふ。昔でも伊豫守、武藏守と云ふやうな事も言つて居る。頭、長、守と云ふ字は、皆同一の意味で、唯、漢字を當嵌めたから、色々の字を書くやうなもので、加美と云ふ事に付いては、同一であらうと思ふ。所が或は斯う云ふ説に反對する者もあつて、此の神と上とは音に上下がある、所謂アクセントが違ふ。だからして同一ではないと云ふのである、成程日本語には、垣と柿と牡蠣、皆カキと言ふけれども、それはアクセントが違つて居る。「私はカキを喰べました」と言へば、柿を喰べたと思ふ者はない。又私は「カキを喰べました」と言へば、牡蠣だと思ふ者はない。人の能く言ふ橋、端、箸、皆同じハシだけれども音に上下がある。それに依つて意味が違つて來る。で、此の神と上との差は、猶鎌と釜との差の樣な違があると云ふのである。成程鎌と釜とは違ふ。神と紙とも違ふ。けれども神と上とは區別は無いやうに思はれる。そこで私は先づ我が國の神の意義は、此の上から來て居るのであると解釋して、さうして前にあつた所の忌部正通流の説や、平田篤胤流の説は、矢張此の意味の中に含めて、上に在ます所の者は、自ら靈妙なる德を有して居られる。さうして又自ら部下を照臨なさる。斯う解釋したら宜からうと思ふ。今日の事實に就いて見ても、どうしても今の長官とか云ふ者は、其の部下の者よりか偉い。勿論、長官にも凡人があることもあるが、それは例外で、一般には長官になつて來ると云ふと、學問の素養も澤山あらうし、又其の德も高い。隨つて部下の者が、此の位の事はしても、長官は知りはすまいと思つて、胡麻化さうと思つても、長官は能くそれを見拔く。是れは即ち照臨するのである。で、部下の者から見ると云ふと、まるで神樣のやうに見える。すべて勝れた人に比較すると智惠が足りないと斯うも違ふものか知らんと思ふ樣に、愚かな者は同じ事をしても、廻り遠くて、非常な時間と、勞力と、そして經費とをかけてする。所が悧口な者は直ぐそれをやる。數學などでも能く分る。例へば此處に大きな河があつて河の向に大きな木が一本あるとする。さうすると其の樹の高さは何尺あるか、此方から計つて見ろと言ふ。すると普通の者には出來ない。出來ても色々の苦辛がいる。所が數學

に長じて居る者は、そんな事は平氣でしてしまふ。何丈何尺ある。疑つて實地に就いて計つて見ると確に其の通り。數學を知らない者から見ると云ふと、まるで神樣のやうに思はれる。斯う云ふ樣に總べての方面に勝れた人が神になるのである。それは智識の方について見たけれども、道德の方面から見ても、例へば朝早く起きて、さうして堅忍不拔で働いて、慈愛心に富んで居ると云ふ樣な事は、どうも普通の人から見ると神樣のやうに思はれる。普通の人は及ばない。乃木大將の如きは其の一例である、乃木大將は學問の點から言つて見れば、大將の學問と云ふものは、大したことはないと思はれる。軍人であるけれども、軍略とか戰略とか云ふやうな事になつて來ては、矢張り若手の中佐大佐と云ふやうな人で、洋行でもして大いに研究して歸つて來た人に較べて見ると、乃木大將のは舊式であつて、比較にはならぬかも知れぬ。然るに乃木大將が乃木大將として大いなる價値を有し、一般の尊崇を受けらるゝと云ふのは。詰り彼の大將の人格の勝れた所である。人格は皆誰れでも有つて居る、萬人同樣に有つて居るのだけれども、併し其の人格に非常に優劣がある。勝れた人格は神と同じ、寧ろ、神なりである。乃木大將は生ながらにして國民から神と尊崇されて居つた。詰りどの點に就いて見ても、上に位する所の者は神であつて、又上に位して居る者は其の德が勝れて居る。其の德が勝れて居る所の者は神なんである。我が傳說の中には、狐も狸も狼も皆神となつて居る。併し是れなどは其の當時の下級人民が、さう云ふものの力が迚も人間の力の及ばない所のものがあると見て、さうしてそれを神としたのである。當時既に神神たる方々は、決してさう云ふものを神とされた譯のものではない。神道に於いて神と云ふのは、詰り上に在(まし)ます所のものを神と云ふのである。

## 第三節　「神」の觀念の主觀的起源

斯う云ふ神の觀念の起つて來ると云ふものは、先きに述べた通りに、先天的と西洋で言ふやうな工合に、自ら吾々に起つて來る所のものである。それは吾々が斯うして日常大騷をして生活をして、精神が常に外物に向つて轉々として行つて居る時には、吾々は一向平氣で居るけれども、併し吾々が極く暗い晩などに

於いて、學校その他の廣い建物などに往くと云ふと、何となく或る一種の存在物があつて、さうして神祕的に吾々に或る威力を加へるかのやうに感ずる。さう云ふ樣な感情が人間に在る。膽だめしなどもこんな事から行はれるのである。こんな感情は、實際多くの人の經驗して居る所である。即ち今迄の吾々の過去の經驗に就いて考へて見ると云ふと、斯うしてバタ〳〵日常の生活に追はれて居る時には何ともないけれども、病氣になつて一室に閉籠つて寢て居るとか、暗夜中に知らない途を辿つて居るとか云ふやうな、或る機會に於いて、吾々が眼に於いて見る事の出來ない、耳に於いて聽く事の出來ない、或る一大威力があつて、吾々に其の威力を加へて居るやうに感ずる事があるのである。之れを西洋では實在の感情と云つて居る。實際に在るものの存在を感ずるのである。家があると思つても、山があると思つても、河があると思つても、冥想の裡へ這入ると家も見えなければ、河も見えない。總べてのものが見えない。此處に立派な金銀財寶があると思つても、冥想して居る間に金銀財寶の存在を認めることは出來ない。けれどもさう云ふものでなしに、ちやんと必ず實在する或るものがあつて、それが威力を吾々に與へて居るのであると云ふ感情、さう云ふ感情が吾々に有る。

## 第四節　「神」の觀念の客觀的起源

主觀的に其の感情が吾々の方面にあるが、又客觀的に、此の森羅萬象が斯う云ふ工合に秩序整然として出來て居る。春夏秋冬は時を違へずして循環して行く。又吾々の體に就いて見ても、不要な物は漸次に除かれ、有用な物は益、發達させられて行く。例へば人間も以前は尻尾を有つて居つたのだと云ふ。所が其の尾が今はない。何故尾がないかと言へば、詰り吾々に必要がない。犬や猫には色々の點に於いて尾が必要なんである。犬などは尾を動かす事に依つて感情を發表する。喜ぶ時には尾を振る。恐れて居る時には尾を下げる。さう云ふ工合に必要である。馬などの尾と云ふものは、蠅などの來るのを追拂ふ一つの必要なる道具なんである。又外見を飾る道具にもなつて居る。彼れ等には斯う云ふやうな必要があるけれども、人間は着物を着るから尾の必要はない。

蠅が止つた所が之れを尾で追ふと云ふ必要もない。又尾を以つて表情の道具にすると云ふ必要もない。さうすると何方から見ても、尾と云ふものは不必要になつて來る。そこで段々世界の經濟的構成に依つて、尾がなくなつて來る。けれども今日吾々が尾が無いのを見て、人間には昔から尾がない、祖先以來尾がなかつたものだなどと言ふと、是れは大いに耻を掻く。何となれば比較解剖學に依つて解剖されると、ちやんと證據が出て來る。即ち腰の廻りに或る筋肉がある。其の筋肉は不必要な筋肉である。何の爲に存在するかと、專門家が調べると、まがうかたなく以前に尾があつた時に、其の尾を動かす爲の筋肉であるんである。それが幸か不幸か殘つて居る。それが證據である。どうしても仕方がない。それから又耳を動かす筋肉もある。昔は耳を動かした。所が今の人間は、東西南北何方へでも首を廻す事も出來れば、體を廻す事も出來るから、敢へて耳を動かす必要はない。馬などは體が大きくて、自由に後に向くと云ふやうな事が出來ないから、耳を動かすのである。所が人間に於いてはさう云ふ必要がないから、耳を動かす筋肉は殘つて居ても、耳を動かさない。ヒョッとすると

動かす人があるが、それは例外である。其の他皮膚を動かす筋肉も殘つて居ると云ふ。どうも困つたものだ。昔の人間は皮膚を動かして、蠅などが止ると馬の樣にビリ〳〵つと動かして、之れを追つたものだ。所が現今は着物を着て居るから蠅が止つても苦痛を感じないから、皮膚を動かす必要がない。それで其の筋肉が段々と退歩して來る。之れに反して腦だの、四肢だのと云ふ風なものは、巧妙に發達して來るのである。さう云ふ風に必要のものは益〻發展して行くし、不必要のものは益〻衰へて來る。詰り是れは一種の經濟、此の自然に一つの經濟と云ふものが行はれて居る。それから又他の方面から見ると云ふと、宇宙には色々の星などがあつて、始終循環して居る。どうも無限に斯うある星などが循環するならば衝突もしさうなものである。何時ぞや西洋で、來年の何月何日かに、地球が或る星に衝突して、粉碎されて仕舞ふ。從つて地上のあらゆるものも滅びてしまふ。だから財產などを殘して置いても仕方がない。皆んな使つて榮耀榮華をして置かないと、折角溜めた金が無益になつてしまふと云ふので、散々榮耀榮華をして、來年の何月何日かを待つたと云ふことである。所が其

の日になつて見ると、一向地球が衝突しない。金は使つてしまつたので、非常に困つたと云ふ事があつた。さう云ふやうな譯で、地球が衝突するとか何とか云ふけれども、一向衝突もしないで、キチン〳〵と循環して行く。總べての力と云ふものが皆衝突しないで行く。之れを以つて見ると云ふと、何か此の點にも人間以上の或るものがあつて、さうして斯う云ふ風にされるものではないかと云ふ考が、どうしても誰れにでも起らざるを得ない。其處に、茲に神と云ふ人間以上の者が在しますのである。斯う云ふ風な考、詰り一方からは主觀的に自分の心に或る一種の實在の感情を有つて居るのと、それから又客觀的には森羅萬象を見て、どうも是れは人間以上のものがあつて、斯う云ふ工合にされるのではないかと云ふ感じが起つて來る。斯う云ふ感じが殊に今日のやうに學問の發達しない古代に於いては強いのである。であるから古代には斯う云ふ觀念が非常に一般に行はれて居る。

## 第五節　古代の「神」の觀念

そこで我が國の古代に於いても、既に神と云ふ觀念が存在して居る。所が此の時代に方つて已に我が國には色々の神々が出られた。即ち伊弉諾伊弉冊の二神、天照大神と云ふ樣な色々の神々が古代に御居でになつた。之れと同時に此の時代に無智蒙昧な下級の人民も、中々澤山あつた。一體『古事紀』や、『神代紀』を見ると、昔の人は皆神のやうに見られて居る。神代には神樣ばかりのやうに思はれて居る。又學者などでも、さう云ふ風に考へて居る人もあるやうである。神武天皇が東征に御出でになる時、釣を垂れて居る漁人に遇はれた。臣は國津神某と云ふ。釣をして居るのも神である。斯う云ふ風に、何んでもかでも神代のものは皆神であると考へる人もある。けれども、どうもさうでないやうである。矢張り所謂神代と云ふ時代にも普通の人民は澤山居つた。其の證據には伊弉諾伊弉冊の尊の所で、伊弉諾尊が一日に一千人を殺すと仰せになつたが、伊弉冊尊は千五百人を產むと仰せになつて居る。さうすると都合五百人宛餘計出來て行く勘定である。其の他天照大神の詔の中にも、色々靑人草と云ふ言葉がある。例へば保食神が素盞嗚尊に殺された時に、保食神の體から五穀

が出た。天照大神はそれを見られて、「こは青人草の食ひて生くべきものである」と言はれて、非常に御喜びになつた。それから又伊弉冊尊が黄泉軍を率ゐて伊弉諾尊を御攻撃になる時に、伊弉諾尊は桃子に御助けられになつた。そこで伊弉諾尊が大いに感心遊ばして、桃子に、「御前は能く吾を助けて呉れた。此の葦原の中つ國の青人草が、苦瀬に落ちて患しまん時に、又吾を助けた如くに助けて呉れ」と仰になつた。こんな次第で其の時に青人草なるものが澤山居つたと云ふ事が分る。詰り青人草と云ふのは、神代に於いて所謂神でない所の人民で、當時それが澤山居つた。青人草所謂人民から見ると云ふと伊弉諾、伊弉冊尊や天照大神の如きは、實にどうも飛び離れて尊い御方である。飛び離れて勝れた御方である。飛び離れて偉い御方である。偉い御方、勝れた御方、尊い御方である所の御方を、其の當時の青人草が一般に崇敬し、之れをお上として之れに歸服したのは當然である。そして之れを神とするに至つたのも自然の順序である。此れと同時に當時の神々御自身にも、その權威、その崇高、その偉大によりて、當時の青人草の頭となり、長となり、司となり、之れが支配者となり、之れが統御者となり、進んでは之れが主權者となり、遂に自ら神と仰せになつたものと思はれる。

神の起源は、かう云ふ風であるが、之れより更に進みては、天地山川に靈的存在を認め、之れを主神とするに至つたのである。詰りさう云ふ譯で我が神道に於ける所の神と云ふのは、人々の勝れた偉い尊い方で、上に位せられる所の御方々、又爾かく、人々の考へて居る所の御方々を言ふのである。その結果として神は當然その本質は有形のものたるべきも、又爾かく考へられたる神に至りては、無形の神も亦存在せられ得べきである。であるから過去に存在まし〳〵た神も、矢張り神として尊敬し、又現在の人に就いても、矢張り神と言ふのである。それで先きに述べた樣に、傳說に於いては、古代人が自分の知識が非常に劣つて居るし、又德も劣つて居る。總べての點が劣つて居るものだから、それで例へば狼の如きでも、或は虎の樣なものでも、狐のやうなものでも、自分が或る場合にはどうもする事も出來ない樣な場合には、それを直ぐ神としたものである。

## 第六節　神道と「神」の觀念

けれども今日にては、我が神道に於いては、さう云ふ古代の青人草が信じて居つた樣なものを、神とするのではない。我が神道に於いて神とするのは、もつと合理的な神である。で若し『古事記』や『日本書紀』にさう云ふ動物等が神となつて居るならば、其のものは詰り或る神の神靈を表象するものであると解釋すれば差支なからうと思はれる。其の神靈を表象すると言ふのは、例へば西洋では死と云ふのに鎌を以て表象とし、望を示すに錨を以つてし、勇氣を示すに獅子を以つてし、狡猾を示すに狐を以つてし、謙遜を示すに鳩を以つてし、魂を示すに蝶々を以つてし、罪惡を示すに蛇を以つてすると云ふやうな事がある。矢張りさう云ふやうに解釋すれば差支なからうと思はれる。例へば稲荷神社には狐が必ず附いて居る。それは狐が稲荷神社ではなくして、狐は稲荷神社の御使である（別に理由もあるが）。或は稲荷神社の御愛獸である。斯う解釋して行けば差支なからうと思はれる。それは傳說の解釋の仕方である。

## 第七節　「神」に對する吾人の主張

兎に角神道の神と云のは皇祖皇宗、及び皇祖皇宗の神とせられた所の者、又は吾々國民が一般に神とする所のものである。」であるから本居宣長や平田篤胤は神と云ふものを、神代に限られ、神の道と云ふのは、神代の神の道であるかのやうに解かれて居る。で賀茂眞淵にしても、上代の道、又は神代の道として、神道は上代の神の行はれたる道、斯う云ふ工合に解釋して居る。尙宣長は、吾々の行ふべき事は、神代の神々の事蹟に何もかもある。足らない事はない。斯う云ふ工合に言つて居られる。斯う云ふ學者は皆神道の神と云ふものを、神代にのみ求められて居るのであるけれども、是れは私は宜しくないと思ふ。私は神代以後の人であつても勝れた者、偉い者、尊い者は、皆神であると、斯う見る。詰り吾々のさう考へて居る者、それが神道の神である。であるからある意味から云へば、あらゆる國民は皆神であるとも云はれる。とに角、我が傳說は無限の生命を有するものであつて、神も亦神代人代の別なく無限に出でらるるのである。斯う解釋する。隨つて神道と云ふものが、本居、平田二翁の考より非常に廣くなつて來る。和氣淸麿公にしても、菅原道眞公にしても、楠正成公にしても、皆神である。和氣

清麿公の言葉は神の御言葉である。和氣清麿公の行はれた事は神の御行ひである。菅原道眞公の言葉は神の御言葉である。菅原道眞公の行ひは神の御行ひである斯う云ふ風になつて來るのである。此の事は、此れ等の大人物が、皆人の上にあつて、吾々國民に偉大な事業をなして遺され、遂に皆神として祀られて居られるによりて明白である。然るに多くの學者想ふて茲に至らず。神を以つて徒らに古代に限らんとするのである。是れ生々發展の神道を保守固陋の者とせんとするのである。誤れるも甚しと謂ふべきである。是れ吾人の年來大聲疾呼その非を叫んで、右の如き神に對する一家の見を主張する所以である。否吾人は、是れを以つて正確に神道の神を解せるものと堅く信ずるのである。これで先づ大體神道の神の何たるかを解釋したと思ふのである。

# 第三章　天御中主神

## 第一節　世界の起源

以上神と云ふ意義を說いたから、進んで我が傳說の一番初めにある造化三神に就いて述べやうと思ふ。神道哲學の方面からは此の三神をどう云ふ風に解釋し奉れば宜しいかと云ふ問題である。前にも述べたやうに、此の世界と云ふものが、どう云ふ風にして出來たのであらうか、斯う云ふ問題を提起して考へて見ると云ふと、どうしても此の世界は、誰れかに依つて造られたに違ひない。或る人々は斯う考へて來るのである。それで支那では斯う云ふやうな事が傳へてある。「古、天地が未だ分れないで、混沌たる事が雞子のやうであつて、盤古氏と云ふ者が其の中に生れ出で、一萬八千歲にして、さうして天地が開けた。日は甲子、年は甲寅、清輕なるものは昇つて天となり、濁つて重い物は降つて地となり、盤古が其の中に在つたのである」と云ふ風な事が傳へてある。其の他盤古氏夫妻

は陰陽の初めであると云ふ事も傳へてある。それから又盤古氏の後に天皇氏地皇氏人皇氏の三皇があつた。是れ即ち天地人の初めである。斯う云ふ事も傳へて居るし、又猶太の古傳にも神が世界を七日間に造られたと云ふやうな事も傳へられて居るし、又希臘へ行くと哲學でもつて、世界は水から出來て居るのであると云ふやうな事を言つて居る。斯う云ふやうに何れの國民でも世界の初めと云ふことに就いて、何とか其處に或る一つの考を得て、そしてその知識慾を滿足させやうと云ふ事を努めて居る。所で我が國民はどうであるかと言ふと、我が傳說に就いて見ると『古事記』には劈頭第一に「天地初發の時高天原に成りませる神の名は天之御中主神斯う云ふ風に傳へてある。かくして造化の三神が成りまして、國が稚くて海月の樣であつた時に、葦牙の萠騰るやうなものに依つて神が一つ出られた。それは宇麻志阿斯訶備比古遲神と云ふのであると云ふやうなことが書いてある。又『日本書紀』を見ると「開闢の初、洲壤浮漂すること譬へば游ぶ魚の水の上に浮ぶが如し。時に天地の中に一つの物生れり、狀葦牙の如し、便ち化りませる神を國常立尊と號す」と云ふやうなことがある。尙

『一書』には、「天地初めて判るる時一つの物虛の中に在り。狀貌言ひ難し、其の中に自ら化ませる神あり、國常立尊と號す」と云ふやうな事が書いてある。斯う云ふやうな工合に、天地の初がどう云ふ風にして出來たか知らんと云ふことは、色々人の頭を苦しめるので、そこで又色々の傳說が起つて來るのである。我が古傳に於いては、右のやうに『日本書記』では國常立尊が初めのやうに書いてある。『古事記』では天御中主神が初めのやうになつて居る。で、中古の、『日本書紀』の多く行はれた時代には、天御中主神と國常立尊とは同一の神であると云ふ意味にして居つたけれども、本居宣長に依つて『古事記』が研究されてから、矢張り別の神であると云ふことに一般になつて來た。

紀

## 第二節　世界の創造說

吾々が日常見る所の、机なら机、本なら本、時計なら時計、何でも其の一つの道具が出來るのは、吾々が造るのである。人間が造るのである。獨りでに出來ると云ふ事はどうもないやうである。それは獨りでに出來ると言へば言へない事

もないやうなこともあるけれども、併し多くの吾々の必需品は、家屋にしても、衣服にしても、其の他の日常の調度品でも、皆誰れかゝ造るのである。斯う云ふ考を起して進んで見ると、矢張り此の天地も誰れかゝ造るのではないかと云ふ工合になつて來る。是れは誰れかゝ造つたに違ひないと云ふやうになつて來る。そこで以つて基督教では、神が七日間に之れを造つたのであると云ふやうな說を傳へて居る。我が神道に於いてもさう云ふ考が學者の中に起つて來る。そこで『古事記』や『日本書紀』をさう云ふ眼を以つて解釋して行かうと云ふ學者が出て來る。即ち本居平田二翁などは、其れである。本居宣長は此の世界を以つて高皇產靈神、神皇產靈神が造られたのである。即ち此の天地を初め、有りとあらゆる萬物は皆高皇產靈神、神皇產靈神が造られたのである。斯う云ふ具合に言つて居られる。けれども古傳を調べて見ると云ふと、伊弉諾尊、伊弉冊尊が國を產み、島を產み、山を產み、河を產み、日の神を產み、月の神を產むと云ふやうなことは、皆書いてあるけれども、高皇產靈神、神皇產靈神が天地を造り、而して萬物を造られたと云ふやうなことは、一つも無い。全く無い。然るにどうもそこに

高皇產靈神、神皇產靈神が天地を造られたと唱へるのには、何か其の證據がなければならぬ。そこで其の證據として本居宣長や、平田篤胤は、日神、月神の託宣なるものを擧げて居られる。篤胤は曰はく、「何を以て此の神天地を造り賜へることゝを知るぞとなれば、日神、月神の御託宣によりて知らるゝなり。そは、顯宗天皇の御『紀』に、三年二月阿閉臣事代任那に使されしとき、月神人に着て詔く、我祖高皇產靈神は、天地を造りましゝ御功あり。民地を奉るべし。我は月神なり、もし請はしのまゝに獻らば、我福へてむと詔り賜ひき。事代これに由りて京に還り、具に奏しき。歌の荒巢田を奉り賜ひて、壹伎縣主、先祖、押見宿禰をして侍祠らしめたと見え、また四月に日神人に着て、阿閉臣事代に詔く、磐吾の田を我祖高皇產靈神に獻れと詔給ひき。日神のこの御託宣に產靈神の天地を造り給へる御功のことを詔へることのなきは、月神の御さとし言にゆづりて省かれたるものなり。事代かくと奏しゝかば、神の乞しのまゝに、田四十丁を献り賜ひて對馬下縣直をして侍祠らしめきと有を以て、知るべく、又、この二柱の神の御名の義と神代の事實の上にて著明し」と、けれどもどうも其の證據が天地を造らるゝと云

ふやうな大事件の證據としては、甚だ薄弱である。で、何か其の他に證據があれば兎も角もだなれど、どうもそれがないから、其の點には本居、平田二翁も非常に困られたやうに思はれる。一體此の天御中主神や高皇產靈神、神皇產靈神に對する本居、平田、其の他の神道學者の見解が、甚だ不明瞭である。何だか薄い紙を通して見るやうな譯で、細かい所がどうしても判きりしない。或る物を間に置いて、向を見るやうな工合である。そこで判きりした答を得やうとすると云ふと、古傳がないから分らないと言はれて居る。傳へが無いから知られない。「傳なければ知るべからず、斯う云ふ工合に傳說の中に隱れられてしまふ。甚だどうも遺憾であると思ふ。

## 第三節　傳說の本質

吾人が考へて見るに、第一是れは傳說と云ふことを一つ調べて見なければならぬ。神道に於いては傳說と云ふことを尊ぶのであるが、其の傳說と云ふのは一體どう云ふものであるか。本居宣長にしても平田篤胤にしても、盛んに古傳々々と云ふことを言はれる。古傳は大事である。けれども、併し古傳の意味を十分に調べて見なくてはならぬ。本居、平田二翁のやうな工合に神道を以つて神代に限られて居ると主張する學者から見ると、古傳が殊に大事である。けれども吾々のやうに、神道の神と云ふものは、決して神代の神に限られないのである。神代の神と同一の形式と內容とを以つて、それより以後に神があるのである。即ち神代に於ける例へば武甕槌神、經津主神は武神として尊い神である。尊い神であるけれども、矢張りそれと同じやうに、楠正成公乃木大將も武神として尊いのである。武甕槌神、經津主神が其の當時の朝廷に、獻身的に御働きになつたならば、楠正成公も乃木將軍も獻身的に御働きになつた。而して吾々は一方に香取鹿島に御宮を建てゝ此の神々を祭ると同時に、又楠正成公も湊川に御宮を建てゝ祀るのである。乃木將軍も亦東京にも、地方にも御宮を建てゝ祀らるゝのである。神道の神と云ふものを、斯う云ふ工合に擴張して見ると古代の傳說と云ふものが、本居、平田二翁の言はるゝやうな工合に絕對的に重いものではない。さう云ふ工合に古傳說萬能、一にも古傳、二にも古傳と云ふやうな工合

に、古傳のみを非常に尊重する譯には行かない。古傳說より後の傳說即ち國史其の者も、矢張り大事になつて來る。明治天皇が國史の成跡は炳として日星の如しと戊申詔書に仰せになつて居るが、其の國史の成跡と云ふ者が、非常に重大になつて來る。國史は矢張り神道の一つの重大な權威、肝要な典據となる。古傳說と同じやうに尊重すべき者である。所謂古傳說、即ち『古事記』や『神代紀』に書いてある所のものは、私の考ふるのには、その大部分は、伊弉諾尊、伊弉冊尊、天照大神の御時代に出來たものであると思ふ。本居、平田二翁の說に依つて見ると、古傳は神々からの傳でつて、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神から傳へられた所の傳である。斯う言はれるのである。而して平田篤胤は天御中主神を以つて、老子の謂ふ所の道と同じである。或は『易』の太極などと同じである。斯ういふ風に解釋して居られるのである。さうして始めもなければ終りもない神である。斯う解釋して居られる。さうすると老子の所謂道と云ふやうな、さう云ふ神樣が、吾々見たやうに人格を有つて、さうして古傳を傳へられたと云ふことになる。これは慥に問題であらうと思ふ、でどうしても是れは古傳と云ふものは、詰り伊弉諾尊、伊弉冊尊、天照大神頃に出來て、それより以前の事は伊弉諾尊、伊弉冊尊や天照大神の時代に御考へなさつて、斯う云ふ神々が御居でになつたのであると云ふことで、御傳へになつたものと解釋し奉るのである。さう解釋しませんと云ふと、どうも解釋が附かぬ。殊に純歷史家などは、歷史的に天御中主神はどうだの、高皇產靈神はどうだのと云ふことを申すけれども、是れは歷史的に迚も考の附く筈のものではない。「人は天地の後に生れて天地の初を知る」と云ふけれども、是れは哲學的のことであつて、決して歷史的に知り得べきものでない。歷史の知り得るのは所謂有史以來と云はれて居る。勿論、化石や何かで有史以前のことも、多少研究せらるゝが、有史以後のことに比ぶれば僅かなことで、又嚴格な意味では之れは歷史とは云へない。で詰り我が國の古傳の太古に關する所のものは、伊弉諾尊、伊弉冊尊、天照大神の頃になつた所のものである。斯う見るのが宜しいやうである。

## 第四節　造化の三神

そこで古傳をさう解釋して見ると、それより以前の天御中主神や高皇產靈神、神皇產靈神を、どう云ふ風に解釋し奉れば、最も合理的であるかと云ふ事が問題になつて來るのである、其の當時に伊弉諾尊、伊弉冊尊、天照大神其の以下の神々がどう云ふ風に考へて御居でになつたかと云ふことを、今日に於いて攻究して見なければならぬ。

所が天御中主神や高皇產靈神、神皇產靈神に就いては、殆んど御名が傳はつて居るのみである。其の他に殆んで御事蹟と云ふやうなものが傳つて居らない。それであるから此の神々の性質、此の神々の御行ひ等は、吾々が斯くあつたであらうと云ふ研究を以つて決定するより外はないのである。其の中でもつて最も合理合的であると信ずべきものに據るより外に仕方がないのである。

そこで天御中主神と云ふ神はどう云ふ神にましますかと云ふことになつて來ると、是れは已に述べた通り、平田篤胤は老子の道などと同じと云ひ、又中古の學者には大分國常立尊と一緒に見て、之れを吾々の所謂實在其のものを指すやうに解釋して居る者もある。がどうしても是れは先づ篤胤と同じやうに、無始無終の神であると云ふことにしなければ解釋が附かぬ。始めもなければ終りもない。篤胤はさう云ふ神にしやうと云ふので、それで『古事紀』の「天地初發の時高天原に成りませる神の名は天御中主神、次に高皇產靈神、次に神皇產靈神、みな獨り神成坐して身を隱くし給ひき」とあるのを、『古史成文』と云ふ自己の古傳研究の本に於いて、「天地未だ生らざりし時、高天原に神ましき」と書き「天地初發の時」を『書紀』の一書によりて「天地未だ生らざりし時」と改め「高天原に成りませる神」と云ふのを「高天原に神ましき」として居る。「有神焉」の語は、直に無始無終を意味して來るのである。けれども「獨り神成坐して身を隱し給ひき」と云ふのはどうもされなかつた。そこが妙である。「獨り神成坐して身を隱し給ひき」と云ふことになつて來ると「獨神成坐して」と云ふのは、前の「成りませる神の名は」と照應して居るので、獨りに出られて、さうして身を隱し給ひきと云ふのは、詰り御崩れになつた——肉體を離れての神靈となつて御生活なさると云ふ風に解釋すべきである。勿論「身を隱し給ひき」は「隱身にましき」とも讀まるゝが、何れにしても問題である。兎に角「獨神成坐して」と云ふのは「成りませる神の名は」に照應して

居るのである。であるから「高天原に成りませる神の名は」を「成りませる」を削つて「高天原に神さしき」とする事になると、今度は「獨神成坐して身を隱し給ひき」の「成坐して」を削つてしまはなければならぬ。さうして唯、「天地未だ生らざりし時、高天原に神ましき。天御中主神、次に高皇產靈神、次に神皇產靈神」と言ひ切つてしまつて置かなくてはならぬ。

古傳は已に述べた通り、神代に出來たのであるけれども、併し是れが又それから後に色々傳へられる中に、誤謬を含んで來て、幾多の間違を生じて來て居る。是れは爭ふべからざる事實である。如何なる學者も是れは是認する。たとへば七代神に就いても、七代か五代になつたり、三代になりたり色々になつて居る。それから又『日本書紀』には國狹槌尊と云ふのが國常立尊の次に出て居るが、「古事紀」には國狹槌尊と云ふのはない。それから先きに申しました御食津神を殺されたのは、『日本書紀』と『古事記』とに依つて、一方は素盞嗚尊とし、一方は月讀命としてある。それを根據として、篤胤の如きは月讀尊と素盞嗚尊とを同一の神と主張して居るのである。さう云ふやうな例を擧げて來れば幾らでもある。



であるから其の古傳が徹頭徹尾一字一句違はないと云ふことは言へない。段々傳へる中に幾多の誤謬が這入つて來た。それは印刷術も起らず、文字もなかつたから――假りに無かつたと斷定して置く。これには色々議論のあるのである――隨つてそれを正確に傳へる事は到底出來ない。それは「語部」と云ふものがあつたと言ふが、併しそれも口から耳に傳へるのであるから、どうしても正確に傳へ得る事は出來ない。そこで幾多の誤謬が這入つて居る。其の誤謬は取捨選擇をしなくてはならない。そこで今の『古事紀』の一番初めの「獨り神成坐して身を隱したまひき」と云ふのは『書紀』の所謂造化三神の傳の所には全然ないのであるから、これは誤謬であると看做して「天地未だ生らざりし時高天原に神ましき。天御中主神、次に高皇產靈神、神皇產靈神」と、斯う云ふ事にして解釋して行けば、初めて此の天御中主神と云ふ神が無始無終の神であると云ふことが解釋の出來るのである。で篤胤の見解も、詰りは其處になくてはならぬ。篤胤の前後の說を綜合すると、さうなつて來なくてはならぬ。それでなければ論理に合はない。

そこで天御中主神をどう解釋し奉るかと云ふ事が、愈々本問題になつて來る。

## 第五節　天御中主神と絶對

平田篤胤は天御中主神を以つて已に述べた通り、老子の謂ふ所の道、それから又『易』で謂ふ太極、『禮記』で謂ふ太一等と等しいもので、無始無終の神である として居る。要するに此の天御中主神と云ふものを絶對其のもの、即ち宇宙の本體と云ふ風に解釋するのは、多くの神道學者に於いて、一致して居る所である。已に絶對其のものに解釋するのであるから、此の神は、生れられることもなければ、又滅せられることもない。即ち生滅と云ふことがないのである。其の質も增さるることもなければ、又滅せられることもない。常住不變であつて、而して又一般普遍である。無盡であつて無限である。何かの原因又は條件によつて出來るものでもなく、變化せられるものでもない。そして又なんらの制限を受くるものでもない。從つて宇宙のあらゆるものを包含し、あらゆるものゝ原因となり、あらゆるものゝ條件となるべきものである。さう云ふのが此の天御中主神を說明すべき言葉である。であるから天御中主と云ふ言葉は、本居宣長の解釋に依つて見ると、「天の御中に在まして主(大人)たる神である」と云ふのである。詰り此の天と云ふのは、通常謂ふ所の宇宙を言ふのである。範圍の無限なる大宇宙を云ふのである。尤も後世之れに就いて、種々の意味を附けられて居る樣であるけれど、當時の天は、宇宙そのものである。從つて天と云ふのは無限である。其の無限其のものを體として、此の神は御居でになる。だから此の神は、宇宙至る所に存在ましますのである。既に宇宙は無限であるから、何處でも此の無限の宇宙から言つて見ると云ふと御中であるのである。元來中と云ふことは中心と云ふことである。中心と云ふことは、何方へも距離の同じと云ふことである。所が、それが無限なんであるから、何の點でも、其の點から上下左右、何れにでも同距離である。つまりそこが直に中心になる。限りがあれば其の兩端の中を中心としなければならぬけれども、限りがないのであるから、何處でも或る點が直に中心となる。その中心が即ち天御中主神の無限の御體の中心となるのである。之れを吾々の身體に就いて見ても、若し指の尖に負傷でもすると、

そこがひどくいたむ。そのいたむ所に吾々の全精神は存在するのである。併し身體の他の部分に、より大いなる事件あれば、全精神は、それに來り、又指の尖の負傷は念頭に殘らない。けれども餘地あれば直に亦復り來る。此の精神の身體の一部より他の部に移るには、殆んど何等の時間を要せざるが如く、實に間髪をいれないのである。唯、吾々の精神身體は不完全にして缺點多き、とても天御中主神に比較し得べきものでないけれども、もと〳〵天御中主神の一部分として生存するものなれば、その性質に於いてしかく異るものでない。されば天御中主神の宇宙に於ける略、吾々の精神身體の關係を以つて類推し奉るべきである。從つて天御中主神の御全精神は宇宙至る所にましますと申すのである。天御中主神をさう云ふ風に解釋し奉るのであるから、隨つて本居宣長のやうに、此の神を此の世界以外に存在せらるゝ一つの神、即ち西洋で謂ふ所の「ゴッド」と云ふ風には解釋しないのである。平田篤胤などの說も、或る所では老子の道と同じやうに解釋されて居るけれども、又或る所に於いては本居流の說を奉じて此の神を世界外に置いて、さうして宇宙を創造せられた神であると見て、宇宙創造說と云ふものを組織しやうと云ふ計畫があつたのである。けれども神道の意味から見ると云ふと、さう云ふ風に解釋するのはどうかと思はれるのである。少くとも私はそれに贊成しない。本居平田二翁は、私は斯道の先輩大家として衷心の尊敬を致すのであるけれども、その說は、一から十まで、全部盲目的に服從することは出來ない。右の點などもその一つである。そこで私は先づ天御中主神は此の絕對其の物を申すのであると云ふ風に解釋して、それから更に進んで高皇產靈神、神皇產靈神の二神に就いて述べて、益、天御中主神の御德を明にしやうと思ふのである。

# 第四章　產靈神

## 第一節　產靈神の時代の研究

天御中主神を絶對其のものに解釋することは、幾多の學者の執つて居る所であるから、その說き方に於いての外は、格別事新しい說ではないのである。が、高皇產靈神皇產靈二神に對しては、私が十餘年前から講じて居る私の解釋が從來見ない所の解釋――少くとも私が今まで神道を研究した上に於いて、他の學者の唱へた事を見ない所の說である。勿論今日では大分贊成者もあるやうであるが、要するに私が創めて考へた說であると信ずるのである。其の說はどう云ふのかと云ふと、此の高皇產靈神、神皇產靈神と云ふ神を以つて、天御中主神と同一の神に在して、二神は天御中主神の顯現にましますと云ふのである。勿論斯う云ふ說に就いては、鈴木重胤と云ふ學者が「此の二柱の神は天御中主尊の荒魂（あらみたま）に和魂（にぎみたま）に在し給へるものと推し測り奉らる」と云ふことを言つて居られる。即ち



荒魂和魂を以つて解釋されて居らるゝ。私の說の類似の說を求むれば、先づ此の說であらうと思ふ。けれども此の說とも亦私のは違ふのである。

元來此の高皇產靈神、神皇產靈神と云ふ神に就いては神道の學者が非常に其の解釋に困つて居る、昔から困つて居る。何故困るかと云ふと、高皇產靈神、神皇產靈神は、已に揭げたやうに、『古事記』の一番初めに「天地初發の時、高天原に成りませる神の名は天之御中主神、次に高御產巢日神、次に神產巢日神」と云ふ風に書いてある。さうして後幾多の神々を經て、伊弉諾尊、伊弉冊尊に至り、其の御子に天照大神がまし〳〵て、其の天照大神が高天原に在して、此の豐葦原中津國（とよあしはらのなかつくに）の經營に從事し遊ばした際に、高皇產靈神と云ふ神が居られて御働きになつて居る。其の當時の此の神の御活動を見ると、實に勳威赫々たるものであつて、其の傳にも「天照大御神高皇產靈神の命もちて」と云ふ風に傳へてある。又或る所では「高皇產靈神天照大御神の命もちて」と云ふ工合に傳へてある。詰り天照大神と殆んど肩を竝べらるゝ位に御威勢の强かつた神である。で當時八百萬神を天安河原に集めて會議をなされ、衆議に依つて重大事件を議決されて居る。其の時

の狀態を見ると、此の高皇產靈神は恰も今日の議長のやうな事を爲されて、色々の事を執り行はれて居る。而して古傳に依れば瓊々杵尊の外戚にましますのである。丁度後世藤原道長或は平清盛などが外戚に居つて、さうして政治の大權に參與して居た樣な工合に、高皇產靈神は其の當時の政治に非常なる勢力を有して御居でになつたのである。それは古傳にあり〳〵と分つて居る、而して其の當時の高皇產靈神は又の名高木神と云ふ事に傳はつて居る。そこで本居宣長、平田篤胤二翁の如きが、高皇產靈神が此の天地を鎔造せられたと云ふ事を說くに方つて、その說を聽く者共は、どうも神代の極く初めの時の高皇產靈神が、それから伊弉諾尊、伊弉冊尊まで幾多の神々を經て、天照大神の御代にかくも御活動せらるゝのは、甚だ以つて妙ではないかと云ふやうな質問を出すやうなものもあつたのである。すると、宣長、篤胤二翁は、是れは神代の事であるから、さう云ふことは少しも不思議ではない。斯う云ふ事を疑問とするのは、詰り支那流で、漢意漢習に依つて疑ふのであると言ふのである。斯う云ふやうに世間の疑問とするものを皆抑へつけて、さうして高皇產靈神、神皇產靈神が天地を鎔造されたのであると云ふ風に說かれるのである。

## 第二節　產靈神に關する學說

又平田篤胤は、古傳に此の高皇產靈神、神皇產靈神は二神であると傳はつて居るのを、宣長が是れは二神のやうであるが、實は一神ではないかと疑つて居る事を駁擊して、自らは高皇產靈神は男神に在はして、神皇產靈神は女神に在はす。而して高皇產靈神は產靈の外事を掌られ、神皇產靈神は產靈の內事を掌らるゝのである。斯う云ふやうに解釋して居る。さうして此の二柱の男女の大神が諸々の神達を產み給へるのは、唯、其の男女の產靈の互に崩し合ふ奇しき御德に依つて產み爲し給へるので、決して夫婦の道に依られるのではない。是れが產靈の大いなる御德である。此の二神の御德に依つて、諸々の神ばかりでない、有ゆる物體、更には天地をさへに造り出されたのである。斯う言ふて居る。而して、此の產靈神が天地を造られたと云ふことに就いては、外國の學問などを惡くしそこなつた學者ども、又其の學問がない者でも生意氣な連中は、自分が此の世

に生れて來たのは、詰り此の產靈神に依るのであると云ふことさへも知らないので、此の產靈神が天地萬物を產み造られたと云ふことを言ふと、日本の國ばかりの昔語りのやうに聞き流して居る連中も多い。けれども是れは此の國限りの說ではなくして、何處の國にも無論其の傳がある。支那では其の名を元始天尊と言ひ、印度では太梵天王と申す。其の旨が皇國の古傳に少しも違はない。であるから釋迦も達磨も猫も鼬も皆此の大神の產靈に成れる物なるに論はない。ゆめ〳〵支那や印度の末學に惑はされて、此の大神を疎かにしてはならない。斯う篤胤は說いて居る。さうして篤胤は尙、歩を進めて、天竺より遙か西の方にも澤山の國があつて、其の國々もそれ〴〵に天津神が天地を初め萬の物を御造りなされたと云ふ傳が各々あると云ふ風に言つて、さうして我が古傳の產靈神を以つて、此の天帝、梵天、造物主と同一であると解釋して來たのである。けれども高皇產靈神があの高木神として、天孫降臨の際に活動遊ばした所の神と同一の神であるとすると、どうもそこが妙に聞えて來る。

一體、高皇產靈神に就いては、古傳が隨分色々になつて居る。例へば『舊事紀』と云ふ本、此の本は一般に後世の僞物として信用されないと言ふけれども、併し其の內容は兎に角古い傳であるに相違ないと云ふことに、多くの學者によりて信せられて居るが、此の本などにも、高皇產靈神は天御中主神の男子であると云ふ風に傳へて、天御中主神には三人の男子があつたと傳へてある。又『古語拾遺』には、天御中主神には三男があつた。其の長男が高皇產靈神で、第三男が神皇產靈神であると云ふ傳もある。で高皇產靈神は天照大神と同時の神であつて、而して又天御中主神の長男で御居でになつたと云ふことになると、どうも古傳の解釋が非常に難かしい。どう解釋して宜いかさつぱり分らないやうになつて來る。斯う云ふ所に就いては、已に述べたやうに古傳にどうしても幾多の誤謬が這入つて居ると云ふことを認めなければならぬ。古傳はどうも數學的にはキチンと行つて居らぬ。

そこで私は斯う云ふ說を主張しやうとするのである。即ち此の古傳の一番初にある所の高皇產靈神と、それから後の高皇產靈神又の名は高木神と云ふ神とは全然別の神である。斯う見るのである。で、天照大神の時に御働きになつ

て御居でになる高皇產靈神と云ふのは、實際に人身を有して御居でになり、御子の神々も澤山御あり遊ばし、さうして當時の一大政治家で御居でになつた所の神である。所が其の神の勢力が非常に廣大であつたものだからして丁度天照大神の御德が廣大であつたからして、それを直に後世日の神として、太陽其の物であるかのやうに解釋するやうになつて來たのと同じやうに、此の高皇產靈神と云ふ神の御德が廣大であつたものであるから、其の神を以つて直に此の宇宙の根本の神の御名を捧げたのである。詰り天御中主神の御德を二つに分つて、其の一方の德に高皇產靈神の御名を捧げ、他の一方の德に高皇產靈神と相對せる神皇產靈神の御名に捧げたものと解釋するのである。で、此の高皇產靈神が古傳に二通りに出て居るけれども、是れは前後全く別の神であると言ふのである。さう云ふ譯で私は高皇產靈神、神皇產靈神は天御中主神と御一體に在す神であると云ふことを主張せんとするのである。

斯う云ふと基督敎などで云ふ所の三位一體と云ふ說と似て居るぢやないかと云ふやうな議論も起るかも知れぬ。けれども、基督敎の三位一體と云ふのは、神と神の子とそれから精靈と云ふものが同一であると云ふて、あぶなく多神敎たるを免れた說なので、私の此の主張とは大變に違ふのである。それではどう云ふ風に此の三神が一體であると云ふことを說くかと云ふに、その說は、ちよつと支那學の說に比較するとよく理解るやうである。

## 第三節　支那の學說との比較

支那では「易に太極あり、是れ兩儀を生ず」と云つて居る。即ち太極が分れて陰陽となると言ひ、又『老子』には「一、二を生じ、二、三を生じ、三、萬物を生ず」とも說いてある。即ち一と云ふものから陰陽と云ふやうなものが出來て、それから天地人が始つて來ると云ふ風に解してある。又『易』には「大なる哉乾元、萬物資つて始まる。大なる哉坤元、萬物資つて生ず」と云ふ言葉があるが、始まると言ひ、生ずと言ふ。是れは餘程そこに意味があるやうである。で乾及び坤、或は陰及び陽、之れに依つて萬物が出來て來る。斯う云ふやうに見られる。それで陰と云ふのは消極的で、陽と云ふのは積極的であつて、共に太極と云ふものの屬性と云ふ

べきである。支那の周茂叔と云ふ人は「太極動いて陽を生ず。動極つて靜になり、靜にして陰を生ず。靜極つて動に復す。一動一靜互に其の根を爲す」と言つて居る。詰り太極が動くと云ふと陽になり、動いて極端に達すると靜になり、陰が出來て來る。靜が極まると云ふと又動になつて來る。動靜、靜動と始終循環して居る。斯う云ふ具合に動靜が循環して、萬物が出來て來ると言ふのである。即ち本は一つの太極で、それが或は陰となり、或は陽となり、さうして萬物が茲に出來て來るのである。斯う解釋して居る。所が朱子と云ふ人は理氣の說と云ふものを立てた。理が太極であつて、氣が陰陽であるとし、理は形而上で、氣は形而下であるとしたのである。斯う言ふと茲で二元と云つて二つの根本になつて來る。即ち理と氣と云ふものを別々に見て居るのである。さうなると云ふと、理と氣と先後の論が起るのである。理が初めにあつたのか、氣が初めにあつたのかと云ふことになつて來る。斯う云ふ議論になつて來ると、どうも朱子の考が餘り面白くないのである。矢張り陰陽と云ふものを以つて太極の二の屬性であると云ふ工合に解釋するのが宜からうと思はれる。

## 第四節　產靈神の眞意義

之れを我が古傳に持つて來ると云ふと、天御中主神は所謂太極で、所謂絕對である。其の絕對の屬性が高皇產靈神と神皇產靈神と云ふ風に解釋せらるゝのである。けれども私は今少しく別の解釋を立てゝ居るのである。それは高皇產靈神と云ふ神の御働きは常に活動せられて御居でになる。所が神皇產靈神と云ふ神は、其の働かれる其の物である。例へば茲に風と云ふものがあるとすると、風と云ふものは動くものである。併し風其の物は何かと云ふと所謂空氣である。空氣の振動が即ち風になる。であるから空氣を神皇產靈神とすると、動く所が高皇產靈神である。さうしてその全體が天御中主神である、どうも動く所がなければ、空氣の存在はちよつと認められない。併し動かなくても空氣は存在して居るのである。譬と云ふものは、本當の意味を十分に現はすことは到底出來ないが、先づさう云ふ風に見れば宜い。又水に譬へて見ると、もつと適切である。海に浪が立つて居ると云ふが、其の浪になつて居るのは海の水で

ある。水を離れて浪だけを見やうと云ふことは出來ない。さう云ふ譯で浪と云ふものは、水と浪と兩方面から出來て居る。浪は常に活動して居るものである。そのものが高皇產靈神で、其の水其の物が神皇產靈神である。而して天御中主神と云ふのは、其の浪其の水そのものを云ふのである。そして浪から水を離すと云ふことも、水から浪を離すと云ふことも、共に出來ないのである。詰り同一體のものである。斯う見るのである。で、萬物が眼前に提出されて居るのは、此の高皇產靈神と神皇產靈神とに依るので、此の二神に依つて萬物が生々化々して行くのである。萬物の生々化々して行く所の神德を高皇產靈神と言ひ、又神皇產靈神と云ふのである。けれども元は天御中主神である。それであるから天御中主神と云ふものを一つ別個のものとして離して見ることは出來ないし、又高皇產靈神、神皇產靈神を一つ別個のものとして離して見ることは出來ない。天御中主神と云へば、同時に高皇產靈神、神皇產靈產神は中に包含されて來る。斯う云ふ譯になつて居るのである。

尙、是れに就いて西洋の說を少し考へて見ると、西洋でライプニッツと云ふ人が、希臘のデモクリトスと云ふ人の原子論即ち宇宙と云ふものは小さい原子から出來て居るのであると云ふ說に基いて、どく神秘的な單子の說と云ふものを唱へた。ライプニッツの說で見ると云ふと、此の單子と云ふものは極く神靈的のものであつて、永久に活動して居る。詰り無始無終の活動である。斯う云ふ風に見るのである。此の說で見ると云ふと、此の單子其の物を神皇產靈神と見て、さうして其の單子の無始無終の活動其ものを高皇產靈神と見る。斯う云ふやうに見れば、矢張りさう云ふ說とも似通つて來るのである。詰り私の主張は宣長篤胤二翁の說と同じやうに、萬物の出事て來るのは此の高皇產靈神、神皇產靈神の御德に依ると云ふのであるけれども、其の意義が違つて居るので宣長篤胤二翁などは、此の高皇產靈神、神皇產靈神が萬物を造られた、萬物を鎔造せられた、或は御產みになつたと言はれる。けれども古傳に依つて見るに、伊弉諾尊、伊弉冊尊が色々の神々を產まれたと云ふやうなことは書いてあるけれども、此の高皇產靈神、神皇產靈神が色々の神々を產まれ、又色々の物を造られたと云ふやうなことは、一つも現はれて居ない。であるから詰り斯う云ふやうな說は、二翁など

の一種の解釋と見て宜しい。二翁などの一家の言と見て宜しいのである。で宣長、篤胤二翁は、前に述べたやうに、此の高皇產靈神、神皇產靈神が漸次萬物を造られたと言ふ。其の證據は前に揚げた顯宗天皇『紀』の阿閉臣事代の受けた託宣である。けれども若し天地鎔造の證據になるやうな託宣ならば、阿閉臣事代と云ふやうな、あまり尊くもない官吏に御下しにならないで、もつと立派な方に其の託宣の下さるべき筈であらうと思ふ。又さう云ふ大事な託宣であるならば、何も任那の國に出かけて往く時などに御下しにならないで、朝廷に奉仕して居る間に御下しになつたら宜しからうと思ふ。

## 第五節　託宣

一體託宣と云ふものは、其の當時色々に利用されたものである。勿論其の託宣は信ずべき託宣も少からぬのであらうけれども、又信用すべからざるものも澤山ある。例へば行基が東大寺を奈良に建てる時に於いて、どうも日本にさう云ふやうな大佛を建てると云ふことは、神慮如何であらうと云ふので、聖武天皇も非常に御心配なされた。そこで行基が天平十三年自ら勅使となり伊勢大神宮に詣り、佛舍利一粒を捧げ、七日間參籠をした。すると其の滿願の日の夜を以つて、天照大神が扉を御開きになつて、さうして行基に對して託宣を御下しになつた。その託宣はこう云ふのである。「實相眞如の日輪は、生死の長夜を照却し、本有常住の月輪は、煩惱の迷雲を爍破す。我れ今遭ひ難き大願に逢ひ、渡りに船を得たるが如し。又得がたき寶珠を受く。暗に燈を得たるが如し。師其れ舍利を持して、飯高の郷に藏埋せよ」。と云ふ事を仰せになつたと云ふ傳であるが、どうも天照大神が行基を師と言つて先生と仰がるゝことも可笑しいし、又天照大神が佛語で託宣を御下しになつたと云ふことも甚だ可笑しいことである。それから又愈、東大寺の建立が出來て大佛が出來ると云ふと今度は宇佐八幡宮の八幡大神が天平勝寶元年十一月を以つて、東大寺へ參拜したいと云ふ託宣を御下しになつた、それで愈、朝廷から迎神使として特に參議石川年足、侍從藤原魚名を御任命になつて、さうして宇佐八幡大神を御迎へになり、天皇、太上天皇、太后も百官を率ゐて大神の御伴をして行幸せられ、僧五千を請し、佛に禮し、經を讀ま

しめらるゝと云ふやうな大騒になつたことがある。是れなども甚だ妙な託宣だと思はれる。考へて見るに奈良と云ふのは當時の東京である。首府である。其處へ大佛が出來たと云ふ大評判があるので、屹度宇佐八幡宮に奉仕して居る巫祝などが一度此の大佛に參拜し、奈良見物もしたいと云ふやうな譯で、それには何とか旨い方法はなからうかと云ふやうなことで、斯う云ふ者共が相談した結果ではなからうかと思はれる。其の他誰れでも知つて居る所の弓削道鏡に對する託宣、こんな託宣が非常に澤山ある。それであるから弘仁三年九月の官符に「怪異の事は、聖人語らず、妖言の罪は法制輕きにあらず、神宣は著るしく其のしるしあらはれたる事にあらずば國司言上すべからざる由定められ侍り、こは御こ神なぎなどのするわざなるによりて也」と『樵談治要』に一條兼良卿が記されて居るが、これを以つて見ても、如何に當時託宣と云ふものが濫用されて居つたかと云ふことが分る。

託宣と云ふものはさう云ふものだから、本居、平田二翁がさう云ふやうな託宣を唯一の證據として、高皇產靈神、神皇產靈神が天地萬物を造られたと云ふことを主張されてもそれには餘りに其の證據が薄弱であると思ふ。そんな譯で、本居、平田二翁のやうな工合に、高皇產靈神、神皇產靈神が天地萬物を造られたと云ふのでなくして、高皇產靈神、神皇產靈神の神德の發現が、即ち世界の萬物である。此の森羅萬象を斯う云ふ風に吾々は解釋するのである。元來古傳では、唯、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神が在したと云ふ傳が主なる點であつて、其の天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神と云ふものには、何等の御事業と云ふものが傳つて居らない。勿論それは高皇產靈神を今の天照大神の時の高皇產靈神と同一神であるとすれば、此の神には澤山な御事業が傳つて居るけれども、併し吾々の眼からすれば、古傳の解釋上どうしても別の神としなければならぬ、で之れを別の神とする以上は、古傳に於いて何等御事業が傳つて居らない。傳つて居らないとする以上、詰り高皇產靈神、神皇產靈神が天地を造り、又萬物を產まれたと云ふ解釋は本居、平田二翁の一家の言であるのである。それと同じやうに吾々は又吾々のやうに解釋することが出來るのである。唯、何れが最も能く神道の本旨を發揮するかと云ふことが問題である。神道の本旨に適へば其の說は取る

べき學説であらうと思ふ。

## 第六節　古傳の神話的解釋

で、古傳を朴素的に、極めて幼稚なものゝやうに解釋して行くと云ふと、それは本居宣長のやうな解釋も出來る。一體に宣長の解釋は、全體を通じて一種の神話的、今日謂ふ所の神話的の解釋をすると云ふことが、神道に於いて最も有益であるか、どうかと云ふことは、是れは大いに考ふべきであらうと思ふ。それに就いて私は何處までも神話的の解釋と云ふものは、神道に於いて取るべき解釋ではないと思ふ。勿論私は已に述べた通り宣長の學説に就いては、非常に尊敬を拂つて居る。宣長の學説に於いて啓發されたことも澤山ある。私は宣長は神道界の一大學者として大いに尊敬し、其の説に依つて幾多の教を受けたと云ふことを、私は公言して憚らないのである。けれども又其の説が徹頭徹尾皆善なるものとして、之れを墨守すると云ふことは學に忠なるものゝすべき所でないのであると思ふ。宣長の説と雖も篤胤の説と雖も、



宜しくない所は大いに改むべきことであらうと思ふ。又之れを改めるのが、即ち此れ等の先輩學者に對して忠實なる學者の態度であらうと思はれる。又此れ等二翁の言葉に依つて見ると、さうせよと云ふことが書いてある。「後世に於いて自分などの説に於いて宜しくないと云ふことを認めたならばよき新たなる説を唱へよ」と云ふことが書いてある。吾々がそれを唱へるのは、決して先輩に對して禮を缺く所以でなくして、大いに禮を厚うする所以であらうと思ふ。そこで此の宣長の説に依つて見ると、總べてを神話的に解釋しやうと云ふ傾向がある。其の例を擧げて見ると、例へば天照大神、月讀尊及び素盞嗚尊の事に就いて、第一に此の三神の御生れになつた事を、宣長は『古事記』の傳に依つて、伊弉諾尊が筑紫の阿波岐原に於いて禊を遊ばした時に、左の眼から天照大神が御生れになり、右の眼から月讀尊が御生れになり、鼻から素盞嗚尊が御生れになつたと云ふ説を取つて居られる。けれども是れはどうも不合理な説である。それから天照大神は太陽其の者である。天津日其のものであると云ふのが翁の解釋である。それに若し反對すると云ふと、いとも畏し我が皇室の御祖先に在はす

天照大御神が天津日に在はすことを辨へで、さう云ふことを議論するのは、是れ亦漢意漢習であると云ふ風に言はれる。けれども是れは非常に間違つて居る。そこで篤胤は太陽が天津日であると云ふ解釋はどうも宜しくないと云ふので、天津日の主宰の神である。斯う云ふ工合に改めた。所が焉んぞ知らん、其の篤胤の說は宣長の門人の服部中庸の說なので、中庸の『三大考』と云ふ本の中に書いてある。而して其の『三大考』は『古事記傳』の第十七卷の附錄になつて居る。宣長は其の『三大考』の末に跋を書いて、此の說は良い說である。此の說に依つて初めて天、地、泉の解釋もすつかり明白になつて來たと言つて居る。さうして其の『三大考』の說は、天照大神は天津日の主宰神であると云ふ說である。然るに宣長は天津日其のものであると云ふ。さうすると今の『三大考』の末に跋を書かれる以上は、宣長が『古事記傳』に於いて、或は『葛花』と云ふ本に於いて、或は『玉くしげ』と云ふ本に於いて、其の他色々の本に於いて天津日が即ち天照大神であると云ふてある說は、根本から崩れて來る。即ち宣長は此の場合に於いて、所謂論理的の自殺と云ふものをすることになる。之れを以つて見ても宣長の說が未だ此の點に於いては甚だ不十分であると云ふ證據になる。さう云ふ工合に宣長は先づ天照大神が伊弉諾尊の眼から御生れになつたと云ふ說を取り、而して日の神とか月の神とか云ふ言葉に依つて、直に天照大神を日其ものに取つて居る。それで若し古傳をさう云ふ具合に解釋しなければ、それより外に解釋の仕方がないとするならば已むを得ない。併し我々は『日本書紀』によりて、よりよく之れを解し得るのである。『日本書紀』に依つて見ると、伊弉諾尊、伊弉冊尊が相共に議して、天下に主たる所の者を產まうと云ふので、そこで天照大神、月讀尊及び素盞嗚尊を御產みになつたと云ふことが、その正傳に書いてある。其の說に依れば何も天照大神は眼からお產まれになつたと云ふ事を取らなくても宜いではないか。而して『古事記』よりは『日本書紀』の方が朝廷の正史とせられて居るのであるから古傳としては、二書の間に輕重がないにしても、『書紀』の方に依るのが寧ろ自然であらうと思ふ。さうして『日本書紀』に依つて伊弉諾尊、伊弉冊尊が同時に御居でになる時に、天照大神を產まれたと云ふ說を取れば、何も伊弉諾尊御一人丈け居ませる時、その眼から產れたと云ふやうな難かし

い解釋を取らなくても宜いのである。どうも宣長の說にはさう云ふ傾向がある。而して今の天津日と云ふのも、是れは天照大神が光華明彩に在はして、御德が非常に高大であるから、吾々は、大神を何と申上げてよいか、ちよつと申上げることが出來ない。そこで之れを天津日と申して恰も太陽の四海に照臨するやうに御德が高大であると云ふので、そこで日の神と言ひ、或は天照大神と言ひ、天照大御神と言ふのである。斯う言へば少つとも難かしいことはない。支那に於いても孔子の門人が孔子を見て、其の德の極めて高大であるのを贊して、「夫子は日月なり」と云ふことを言つて居る。即ち孔子が日月そのものと云ふのではなくて、日月に譬へてかう云つたのである。斯う云ふ風に解釋すれば、少しも其の點は困難でない。それを日の神、月の神とあるからと云つて、直にそれを引き付け、さうして太陽が我が萬世一系の皇統の一番初めの御先祖の神である。斯う云ふ風に說いて、それに對して彼れ是れ言ふのは皇室に對して失禮であると云ふ風に言ふのは、吾々は宣長の爲に全く取らない說である。

## 第七節　神道の進歩性

さう云ふ工合で宣長の說でも、篤胤の說でも、徹頭徹尾之れを墨守すると云ふことは、神道の趣意に反する。神道は何處までも進歩的であつて、さう云ふ保守的のものでない。基督敎などはバイブルと云ふものがあつて、此のバイブルの中から一歩も外へ出ることが出來ないと云ふ。後世になるとバイブルより更に進んで細かい規定を設け、個條を作り之れに異說を唱ふれば、直に異敎徒として、破門されてしまふ。或は佛敎は、其の各宗派に於いて、その祖師の說ける敎義から出ることは出來ない。若し出れば異安心、異端として破門されてしまふ。こんな工合に、歷史的宗敎は、一般に墨守的である。神道はこんなものとは違ふ。神道は極めて進歩的のものである。さう云ふ譯であるから宣長、篤胤二翁の說に於いても、どうも一々それを信ずる譯には行かない。隨つて我々は宣長、篤胤二翁がさう云ふやうな說を立てたと同樣に、我々は今斯う云ふやうな說を立てゝ行くのである。どうかすると世間に、神道を以つて極く朴素的のものにして、

幼稚な意味で解釋しても、それで宜いではないかと言ふ人がある。神道は日本のものだから、昔のものだから、どうせ今日の考と一致する筈はない。だからそれは、それで、それとして置いて差支ないではないかと云ふやうなことを言ふ人がある。併し古傳の最初の邊は、單に神名のみ傳はつて居るのであつて、その神名の中に無限の深長な意味が、包含せられて居る。その意味はその時代〳〵の最も進歩した知識で僅に解釋し得るのである。是れ神道の進歩的の一の特色である。又一部の人々の信ずるやうに、此の天照大神の當時の社會と云ふものは、そんなに野蠻未開のものではない。どうも世間の人は神代と言へば極めて野蠻未開の時代のやうに思ふ人があつて困る。丁度都會のものが、地方を田舍〳〵と呼び、都會に比して甚しく未開の如くに思ふけれど、事實は想像と大いに異り、地方殊にその中心地の文明は、さまで都會に劣るものでない。是れと同樣に古代の文明も、色々の事實に就いて考へて見ると云ふと、それは意想外に開けて居る。勿論、物質的方面に於いては、今日と餘程異つて居るけれど、而かもそれとても、大正の現代と維新前との差の方が、維新前と古代との差よりも大ではなからうかと思はれる。殊に精神的文明となるとその差と云ふものは、甚だ少くなつて來る。又單に時代から考へて見ても、我が國の神代と云ふものは、希臘に比較して見ても、もう希臘の文明の餘程發達した時期に相當して居るし、支那に比較して見ても、支那の周の時代に當つて居るのであるから、餘程支那の文明の開けた時代である。其の時代に日本のみが假令ひ交通が十分に行かないと言つても、さう〳〵野蠻未開の狀態に居る筈はない。そんな時代に、尙、且つ野蠻未開の狀態に居るやうな劣等な人種ならば、矢張り今日と雖も、南洋の土人見たやうな狀態に居らなければならぬ。亞米利加印度人や、アイヌ種族のやうな狀態に殘らねばならぬ。所が今日は支那以上に進んで居るし、又世界の多くの强國と肩を竝べて行く位に、文明の域に達して居るのである。是れは中々五百年や千年でもつて斯う云ふ文明ができて來るものではない。人は維新以來長足の進歩を爲したと云ふ。それは慥に長足の進歩をしたのである。慥に世界の一つの奇跡と云ふべき長足の進歩をしたのである。けれども其の維新以來の長足の進歩と云ふものは素養がなくて出來るものではない。其の素養があれば

こそ此の進歩と云ふものが出來て居る。決して怪むに足りない。日本の歴史を十分調べて見ると、此の進歩は寧ろ當然である。であるから神代と云ふ時代が、そんなに野蠻未開の時代ではなかつたのである。隨つて其の當時の神々の作られた所の所謂古傳と云ふものには、勿論極く朴素的の思想も這入つては居らうけれども、又高尚な思想も這入つて居るものと吾々は推察するのである。隨つて此の高皇產靈神、神皇產靈神をさう云ふ風に解釋し奉つて、當時御名前だけしか傳はつて居ないのであるからして、當時の古傳の眞意が何れにあつたかと云ふことは、正確に吾々が斷定することは難かしいけれども、併し大體斯う云ふ風な思想であつたものであらうと思ふのである。

要するに產靈神は、天御中主神の發現にましますので、森々羅列の萬象盡くその御德の發現である。殊に人類は、二神の御德により自發的にその神德を發揮するの能力を有し居るが故に、他の生物に比して優秀なる地位を得て、所謂萬物の靈長たる事を得るのである。而して人類中にありて、我が國民は地理的、歴史的關係の爲に、此の神德を惟神的に能く發揮し得來つたのである。我々は益、之れが發展を計り、國民をして盡く神たらしめなくてはならぬ。敎育勅語に「咸その德を一にせんことを庶幾ふ」と宣ひたるも、亦かゝる聖旨と思はれる。是に至つて上下皆神にして、神國神道の名實、相備はり、世界の人民、何等の威嚇をも加へないで、赤子の慈母を慕ふやうに、何等の壓力をも與へないで、青草の春風に靡くやうに、我が陛下の大恩澤を慕ひ來り、我が皇室の大稜威に靡き、國威の伸張、國運の發展理想的の境に達するのである。

# 第五章　元靈神

## 第一節　葦牙神

先づ古傳の初めに傳へてある所の三神は、右のやうに解釋し奉るのである。さて此の天地の最初に當り、古傳は狀貌葦牙に類する所の一つのものゝ成れるを傳ふ。此のものによりて成りませる神は、即ち可美葦牙彦舅神であると云ふ。此の神をどう云ふ風に解釋し奉るかと云ふのが、茲に先づ提起せらるゝ所の問題である。此の可美葦牙彦舅神と云ふ神は、宣長などの説に依つて見ると云ふと、此の天地が初めの時に葦牙のやうになつて出來たと云ふ。で其の葦牙の如きものを可美葦牙彦舅神と申したのであると云ふ解釋である。即ち高皇產靈神、神皇產靈神が可美葦牙彦舅神と云ふやうな神を御產みになつて、それから天地が出來て來たのであると云ふ意味に取つて居る。けれども私は前に申したやうに、高皇產靈神、神皇產靈神に依つて此の宇宙が出來て居るのであるが、元來



宇宙と云ふものは、一種の星雲的のものであると見らるゝのである。抑も星雲説と云ふのは、獨逸のカントと佛蘭西のラプラースと云ふ兩人が別々に考へ出した所の説である。それでカント、ラプラースの説と云ふ風になつて傳つて居るのである。此の説を參考し、つら〳〵宇宙の本質を考ふるに、宇宙は全く星雲的のものであつて、それが始終運動して居る。さうして其の中に或る太陽系と云ふ樣なものが出來てくる。さうすると他の太陽系と云ふやうなものは既に出來てしまつて居る。或は又既に滅亡しつゝあるのもある。詰り宇宙は無限の太陽系であつて、それが常に生滅起沒して居るのであると云ふやうに説明せらるゝのである。

斯う云ふ風に天體と云ふものは生滅起沒して居るのである。即ち活動して居るのである。高皇產靈神の御德に依つて、常に宇宙の物は總べてが活動して居る。人間が生れると云ふのは、一つそこに出來てくるやうで、そして死ぬると云ふことは、其のあつたものが滅したやうに見えるけれども、一方から見れば、又起つたのである。沒したと言へばそれは無くなつたやうである。けれども、そ

れが又生れたと云ふことになる。さう云ふ工合に生れたり死んだりして居るのである。是れは一個人に就いて見るのであるけれども、それを大きくして民族全體に就いて見ると云ふと、其の民族全體が亦生滅起沒して居るのである。あらゆる事物が皆生滅起沒して居るのである。机なら机、斯う云ふやうなものは何時迄も存在して居るやうに見えるけれども、是れも矢張り生滅起沒をやつて居る。こんな工合に出來て居る机は、永久に存在するやうに見えるけれども、是れが何時の間にか腐つたり、壞れたりして遂に沒してしまふ。沒したかと思へばそれが又他に現はれて來るのである。總べて全然斯う云ふものがなくなつてしまふと云ふことはない。即ち天御中主神の御德と云ふものは、增すこともなければ減ずることもないと云ふ譯であるから、全然無くなると云ふことはない。即ち全宇宙と云ふものが、東西南北も、上下左右も、何處までも限りがない。無限である。無限の活動で無限に生滅起沒して居るのである。そこが即ち天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の御德である。即ち其の本性である。斯う見るのである。

右のやうな譯で、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の御德に依つて、茲に葦牙のやうなものが出來て來たのである。其の葦牙のやうなものに對して可美葦牙彥舅神と云ふ御名を奉つたのである。其の葦牙の出來たのは、即ち吾々の住んで居る所謂世界の初めて其處に出來てきた所のものである。段々それが發展して今日我々の所謂太陽系となるのである。であるから太陽系の最初に出來た所の神を可美葦牙彥舅神と申したのである。斯う解釋するのである。

## 第二節　天之常立神と高天原

已に太陽系と云はるゝ此の世界が成ると云ふと、當然我々の住んでる此の國土と、此の國土以外の世界とを區別することが出來る。そこで一元的の可美葦牙彥舅神に次いで、天之常立神、國之常立神(國之常立尊は、又「之」を省き國常立尊とも云ふ)の出現を見ることゝなつた。此の場合に天(あめ)は國と對立する關係になつて居る。從つて我々は茲に天(あめ)の意義を闡明しなくてはならぬ。

我々の已に述べた通り、天御中主神の天(あめ)の意味にては、此の國土も、世界も、何も

かも包含して居るけれども、國に對しての天は制限的である。

本居宣長は、天は即ち高天原であると解釋し、進んで高天原を解し「高とは是れも天を云ふ稱にて、たゝ高き意に用ひたのとは、いさゝか違つて居る、日の枕詞に高光と云ふも、天照と同じ意、高御座も天の御座と云ふので、虛空を高と云つたのである。原とは廣く平らなる處を云ふ。海原、野原、河原、葦原などの樣である。そこで天を天原とは云ふのである。それに高と云ふ言葉を添へて、高天原とは、此の國土より云ふ事である」と說き、更に進んで「天は虛空の上にあつて、天神だちのまします御國である」と云ひ、尙「天は即ち高天原なれば、實形ある事云ふも更なり、仰ぎ見て見えざるは、たゝ遠き故に眼の及ばないからである」と說いて居る。

一意專心、古傳をありのまゝに解釋せんと努めたる宣長の說として、應さにしかあるべきも、而かも爲に宣長は、論理的自殺に陷つたのである。即ち古傳のまゝに解せんとすれば、古傳の劈頭「天地初發の時高天原に成りませる神」とある、高天原は解せない。高天原は宣長は天と云ふ。天は地と共に葦牙の樣なものから出來たと云ふ。そこで天のない時に天の存在を說かなくてはならぬ。宣長の窮した所以である。從つて此の點に於いて、宣長學を崇敬せる飯田武卿、岡吉胤と云ふ樣な先生でさへ「叶はず」などゝ云つて、宣長に從はなかつたのである。その位だから、平田篤胤は尙更ら從はない。即ち篤胤は先づ宣長の說を排斥し、而して自らの說を立てたのである。「此の說は信がたい」とは篤胤の宣長の說に對する言葉である。そして高天原は「大虛の上方謂ゆる北極の上空、紫微垣の內」を云つたのであらう」と云ひ、『緯書』たる『春秋元命包』に「中宮天極星、その一明なる者太一の常居云々、故に北辰となす、亦紫微宮となす」などの語に基いて、高天原を北極としたのである。かくて宣長と同じく天地鎔造說を主張せる篤胤は、自家撞着を免れんとしたのである。而して後に至つて篤胤は、高天原を太陽そのものとして居る。即ち天つ日やがて所謂高天原にて天照大御神こをしろしめし、皇產靈大神また他の「天神だちも、往に集ひ給ふ御國である」と云ふのである。太陽と紫微垣何等の聯絡もないのである。そして經驗的事實から見ても、あまりに突飛な說である。

そこで鈴木重胤は「故大人等の說等は、甚委しからず」と云ひ、自らは「高天原はし

も、現身の眼して見るときは、眇茫にして、空しきものなれども、隱身の神等のかんづまり、うしはき坐す神域で天地萬物の出自である」と『神代眞言』に說いて居る。橘守部も亦「高天原と云ふからに、必ずしも蒼空の上のいとしも高い處と思ふは拘泥のである」と斷じ、そして面白い見解を述べて居る。即ち「天は現し世の人の目に見えぬ隈を云ひて、黃泉と界して居る。要するに天も黃泉も幽冥の中のひとつづゝの名で、此の世の間の外に出でない。近くいはゞ上下左右身體をつゝみて、只手に障らぬのみである。遠くいはゞ所謂六合の間に充ちて、只目にふれぬばかりである。しか目の及ばぬ間に天、黃泉、幽の別あつて、神に就いては、天と云ひ鬼については、黃泉と云ひ、此の二つを相攝て幽と云ふのである」。「天と云ふも、高天原と云ふも、つまり此の國の外ならぬことを知るべきである」と論結して居るのである。

伊勢貞丈は例の『神道獨語』の中に、貞丈一流の說を立て「我が君のおはします都を、天になすらへて、高天原と云ふのである」と云つて居る。谷重遠はもつと痛烈に、「高天原は皇居である。高天原に神づまりますとは、天子禁闕に坐するのである。紛々たる多說皆非である」と主張したのである。

高天原については、此の外に或は印度だとか、南洋だとか、朝鮮だとか種々の說があるが、併し著者の見る所では、勿論古傳が高天原と天とを同義につかつて居ることは事實である。唯、その天の說である。すべて言葉と云ふものは、空間的には、同じ事物でも、國々にて言ひ方が違ふのである。又時間的には、同じ名辭でも、時代によつて內容が異るものである。從つて現代の意味を以つて、古代の言葉を解すると往々に失敗するのである。そこで天について、著者は、先づ第一に天御中主神の處では、之れを宇宙と解すべきものであるとしたのである。茲に天之常立尊と國之常立尊と並立さるゝ場合には、天は、此の國土、今日で云ふ地球以外の世界を云つたものである。而して此の以後に頻出する所の天又は高天原は、神々の常にまします處を云ふのであると解釋するのである。從つて德川時代の學者が、我々の胸中を高天原であると解したのも、不都合はない。我々が、產靈神より稟受せる神靈の宿る所と見るからである。要するに全般を通じて、天又は高天原は神明の神留ります處と解釋すべきであらうと思はれる。

新井白石のやうに徹頭徹尾之れを純歴史的に解釋しやうとすれば、どうしても牽强附會に陷るを免れない。

そこで天之常立神は、此の國土以外の世界の元靈とあるべき神にましますのである。我が神道は、天御中主神の大道として、天地の公道として、宇宙全般に行はるゝ所のものであるけれども、此の國土以外の世界は、直接の關係が少いから、天之常立神の系統に關する傳說は、一向ないのである。」

## 第三節　國常立神

處が、此の次に出でられた、此の國土の元靈たる國常立神については、古傳は大分反復して傳へてある。

中古には、一般に『日本書紀』が行はれたものであるから、『日本書紀』の卷頭に傳へらるゝ國常立神は、中古の學者の研究の第一の對象となり、多くは之れを天御中主神と同一に見て、實在そのものに解釋せんとしたのである。それで卜部兼直と云ふ人の作つたと云ふ『神道大意』と云ふ本では、「國常立尊は無形の形、無名の名、之れを虛無大元尊と名く」と云ふ風に云つて、此の虛無大元より一大千界が成り、森々羅列、草木瓦石、禽獸魚鼈、悉く出來てきたのである。斯う云ふ工合に解釋して居る。で、之れを吉川惟足と云ふ神道家が解釋して、「國とは世界の本體である。常とは萬古不易の稱である。立とは不易の理を立てゝ萬物を建立する仕方である。尊とは尊み重んずるの心である。例へば御事と云ふやうな譯である。此の國常立尊と申すのは、普通の神ではない。天地に先立つて、天地を定め、陰陽に起つて陰陽になる、全體を假りに名けて神と申したのである。其の神の御名を表はさば國常立尊と申すのである」。斯う云ふ風に說明して居るのである。詰り此の說明は儒敎や佛敎等に依つて出來たものである。そして之れを天御中主神と同一に見やうとするのであるのであるが、併し私は此の神は要するに此の國土の主神に在して、此の國土を維持し發展せらるゝ所の元靈に對してかゝる御名を申上げたものと認めねばならぬと主張するのである。

# 第六章　七代神

## 第一節　七代神の序次

今述べた所の國常立神は、此の國土の元靈にまし〳〵て以後六代相續いて出でられたる神々と共に神世七代とせらる。神世とは神代と書けるも同一にて、神代は通俗には神武天皇以前を云ふも、普通は大己貴命が幽世顯世を分ちしにより、その以前を神代とし、以後を人代とするのである。此處は更に溯りて諸冊二神以前を神代としたのである。

七代神の第二は豐雲野神である。前にもちよつと述べて置いたが『日本書紀』に依ると云ふと、此の國常立神と豐雲野神との間に國狹槌神と云ふのがある。所が篤胤は、『古事記』に「大山津見神と野槌神とが山野に因つて持ち別けて生みませる神の御名は天之狹土神、次に國之狹土神」と云ふことが傳へてある。それで『日本書紀』に傳へて居る國狹槌尊と『古事紀』に傳へてある國之狹土神とか



同一神である。斯う云ふ說を主張して居る。兎に角此の國狹槌尊と云ふのには、古傳にどうしても誤謬があるやうである。著者は此の篤胤の說に依らないで、寧ろ是れは國常立尊の一の御名であるとするのである。一體古代の神々には「又の御名は何々」と言つて、一つの神の御名が幾つもあるのが澤山ある。さう云ふ風に著者は考へて居つたので、篤胤の說に贊成しなかつたのである。處が後年鈴木重胤の說を見ると云ふと、矢張りさう云ふ風になつて居るのである。で、是れは矢張り著者の考の方が益、良いやうに思つた。要するに國常立神は國之常立尊とも申し、國狹槌尊とも申し國狹立尊とも申すものと思はれる。『舊事紀』の『神代系紀』に依ると、「國常立尊は亦は國狹立尊と申し亦は國狹槌尊と申す」と云ふことが書いてある。『舊事紀』は必らずしも正確なる古典と云ふ譯には行かないが、併し斯う云ふ本に斯う云ふことを書いてある所を見ると、矢張りこんなやうな古傳も昔に在つたやうに思はれる。どうもさう解釋した方が正しいやうに思はれるのである。それで此の豐雲野神の時に至つては、段々此の國土が發達して來たものと見える。此の豐雲野神に對する宣長の解釋を見る

と云ふと、久毛は久牟、久美、久比許理などと通つて物の集まり凝る意で、さうして物の始り萠す意を兼ねて居る。此の二つの意又自から通へりとして居る。詰り豐雲野神は物の凝り集まるのと、萠すのと、二つの意を兼ねて居るのである。さうして見ると豐雲野と云ふのには甚だ面白い意味がある。クモと云ふのは今申した星雲的のものが凝り集まる――凝固して來る。さうしてそこへ持つて行つて萠す意がある。出來始まる意味を持つて居る。であるからクモとは星雲的のやうな物が群り集つて、さうして國土となるべき初め萠しなる由を以つて言ふたので、野と云ふのは其の物を指して言ふのである。詰り國土が段々と凝固して固つて來て、さうして此の物がこう云ふ風な工合に御出來になつた所のその時代の元靈を、豐雲野神と斯う申上げたのである。宣長の解釋によつて、かう云ふ說が成立つて來るのである。此の點に於いて正にかうであらうと思はれる。

それから第三に御出になつた神は宇比地邇神、須比智邇神の二神である。此の神の御出になつた時に方つては、此の國土は益、發展して來たものと思はれる。

それで宇は浮の意である。須は沈の意である。比地は泥であると云ふのが眞淵の說であるが、誠にさうであらうと思ふ。で此の混純たる所のものが段々と進化して來て、さうして重い所の物は沈み輕い所の物は浮ぶ。さうして其の沈んだ比智即ち泥土は凝固まつて、段々國土となつて來たのである。斯う云ふ時代の神を宇比地邇神、須比智邇神と申したのである。

それから今度は四代目、角杙神、活杙神が出られた。此の二神の御名は總べて物の僅に成り初めて、例へば尾だの頭だの手だの足だのと云ふもゝ分ちが未だ出來ない所のものを都怒と云ふのである。久比と云ふのは、物の初めて萠し生る意味である。であるから詰り都怒具比と云ふのは、神の御形の生り初め給へる義に申上げたので、活杙と申すのは其の生り初めた御形が活き動き初めらるゝ形に申上げたのである。未だ形は何とも分らないけれども、御動なさつて居る場合に申す所の御名であるとは、宣長の解釋であるが、篤胤も亦、「角具比、活具比とは、かの初土砂土の稍固まるべき芽を含みたるほどに成り坐る義を以つて、其時の趣と成り坐る神の御身の成れる狀とを兼て負せ奉れる御名なるべし」と述

べて居る。詰り一言で言へば角杙、活杙と申す神は先きに述べた宇比地、須比智が段々固つて來て、一つの神と成りませる御體の狀態に就いて申上げた名前である。斯う解釋するのである。

で、段々と斯う云ふ工合にして國土が發達して其の主神も發展して御居でになる。さうすると云ふと、茲に第五代目の意富斗能地神、大斗乃辨神の二神が御出になつた。此の意當斗能地、大斗乃辨と申す、オホと云ふことは稱へる言葉である。美稱である。そして此の二柱神の御名は、彼の國となるべき所のものが段々疑り成つて來て國所の成れる所に、それに男女の尊稱を附けたのに過ぎないのである。斯う云ふ工合にして國土が段々と發展して來、又國土を經營統御遊ばす所の神も大いに發展して來られた。此の時に方つて御出になつた所の神が第六代の神である。

第六代の神は淤母陀琉神、阿夜訶志古泥神と申す二柱の神である。之れに對して宣長の考證によりて解釋を下せば、かう云ふ工合である。淤母陀琉と申すのは『書紀』に於いては面足と記されて居るのであるが、其の意味は面と云ふのは即ち御顏である。御顏が段々と足りて來て不足な所がないやうに備はつて御出でになる。御顏の備はれるを擧げて其の他の手足なども皆十分に備はつて來られたことを示す御名前である。阿夜訶志古泥と申すのは、游母陀琉神の御面の十分に備はつて來られるのを仰ぎ奉ると云ふと、畏み敬ふ所の意が起つて來る。其の畏み敬ふ所の意を以つて、阿夜訶志古泥神と申上げたのである。

豐雲野神以下七柱の神は、皆此の國土の發展に隨つて其の主神の發展をなさる其の度々に出でられた神に、當時の狀を以つて御名を奉つたものである。國土を申すと斯の如く凝結して來て、御神を申せば斯の如く具體的になつて來られた。此の時代を受けて、更に御出になつた所の神は、即ち七代神の最後の神である所の伊弉諾、伊弉冊の二神である。此の二神はもう全く人身を有して御居でになつた所の神で、即ち人としての御神であるのである。

で、此の第七代の伊弉諾尊、伊弉冊尊に至つて、此の國土も、もう十分に完成して居る。けれども尙、修理固成を要するのは、勿論である、二神の經營を俟つのは云ふまでもない。そこで伊弉諾、伊弉冊の二神は天津神の命に從つて、此の國土

を修理固成せられると云ふことになるのである。

## 第二節　七代神に對する學說

で、七代の神に就いては、大體以上述べたやうな次第である。が、此の神々に對する神道學者の說は、古來種々になつて居るのである。北畠親房は國常立尊は即ち天御中主神であつて、さうして五行の德を有して御居でになる神である。斯う申して、國常立尊と伊弉諾、伊弉冊二尊との間の五代の神を木火土金水の五行に配當したのである。さうして云はれるのに、「此の諸の神は實には國常立尊の一身に在はすのである。此の五代の神と云ふのは、國常立尊の一身である。五行の德、各々神と表はれ給ふ。之れを六代とも數へらる。二世三世の次第を立つべきでない」。斯ふ云ふ風に解釋をされて居る。其の解釋に隨ふと云ふと、詰り國常立尊から直に伊弉諾尊、伊弉冊尊に至るのである。

それから山崎闇齋派の神道家に玉木葦齋と云ふ人がある。此の人は「古傳に七代一代、一代七代と云ふことがある。此の七代の神は、もと國常立尊の大氣元靈より化生し給ひ、國土成り定まり、諸冊二尊氣化し給へば、上へ說きのぼせば國常立尊の御一代に約まり、下へ說き下せば諸冊二尊に約まるのである」。斯ふ云ふ工合に解釋して居る。即ち此の玉木葦齋の說に依つて見ると、陰陽五行の精髓が妙合して、さうして茲に諸冊二尊を化生し給へるものであるから、七代と云ふは、此の諸冊二尊の御出になる道筋を、神格化したのに過ぎないのである。であるから七代は一代であると云ふのであると云ふ風に解釋して居る。で、親房、葦齋などと申す學者の如きは、陰陽五行に附會して、さうして之れを二代、若くは一代に約めてしまはふと、企てたのである。

處が、伊勢の神主である所の度會延佳と云ふ人は、是れと少しく趣を異にして、「天地人の始まる、其の形は違つて居るけれども、其の理は違ふことはない」。斯う云ふ說からして、詰り天地の出來るのを、人の出來るのと同じやうに解釋して行かうと云ふのである。天地の成ると、人の出來るのとは、形は違ふけれども、道理に違はないと云ふので、人の出來る道理を以つて、天地の出來ることを解釋して行かうと云ふである。そこで國常立尊から阿夜訶志古泥尊まで九つの神を、人

身の九ヶ月の懷胎に象つて、十ヶ月目には男か女か體が現はれるから、若し男ならば伊弉諾尊であるし、女ならば伊弉冊尊であると云ふのである。一體國常立尊から、阿夜訶志古泥尊までは、未だ形を現はされない所の神である。即ち懷胎中の神である。さうして伊弉諾、伊弉冊二尊は、男女の形體の現はれ給へる所、明かに出產せられたものと認むべきである。斯う云ふ風に解釋して居る。

平田篤胤も亦、此の度會延佳と同じやうな考を以つて伊弉諾、伊弉冊二尊の御身の、段々と成り整ひませる趣より、此の二神前の四代の神々の御名は出來たのであると云つて居る。

然るに篤胤の門人に下總國の高岡康則と云ふ人があつたが、此人は西洋の創造說を參酌して、さうして是れ等の神々に就いて、「康則長み〳〵も按ふるに、國土の初めと神々の初めとの形に當て負せ奉るべきものではない」と云つて居る。著者は、國土の初めと神々の初めとの形に當てゝ、仰せ奉つた御名であると云ふのであるけれども、康則はさうではないと云ふ。是れは、直に產靈の大神の伊弉諾、伊弉冊二柱の神を作り出で給はんとして、彼の國土となるべきものの初め、詰り初泥、砂泥爲して居る其の泥の極く精しきものを取つて、伊弉諾尊と、伊弉冊尊との御形像を造り初め給へるを云ふのである。即ち產靈神が此の伊弉諾尊、伊弉冊尊を御造りになり、その御造になるによりて神體の出來るまに〳〵その御名を申上たのが即ち七代の神の御名である。」斯う云ふ工合に言つて居るのである。そこで篤胤は、此の高岡康則の說を以つて、是れはどうも委しい考であつて、如何にもさう云ふ工合に聞える。此の說には從ふべきであると言つて、康則の說を是認して居る。是れはとりもなほさず西洋の神がアダム、イブを造つて、さうしてそれに息を吹込んだと云ふやうな說があるのでさう云ふ說に依つて立てたものと思はれる。

併ながら吾々が此の七代神に就いて考へて見ると云ふと、決して此の古傳の七代神は、陰陽五行に配して解釋し奉るべきものでもない。又人間の身體に比して、解釋し奉るべきものでもないのである。又西洋のアダム、イブの說に附會して、解釋し奉るべきものでもない。此の七代神は、矢張り古傳に在るやうに、是れより前の神々と同じやうに、世界の最初――即ち今日で謂ふ地球の大初から

して、伊弉諾、伊弉冊二尊と云ふ人身を有して御居でになる神が、古代に御出でになつたのであるが、其の永い〳〵間の各時期に――當時古傳が思想して居つた所の各場合に、斯の如き神を立て申上げたのである。　さうして斯の如き神が段々と御出になつて、此の國土の最初の國常立尊から、ズーッと伊弉諾、伊弉冊二尊まで繼續して參つたのである、詰り、伊弉諾、伊弉冊尊に至に間の系圖なんである。　其の系圖は、是れだけの神々を經て、さうして伊弉諾、伊弉冊二尊に至つたのである。　即ち伊弉諾、伊弉冊尊が、此の國土の主神として御出になつたのである。此の國土の主神として御出になつたのには、國常立尊からして、斯の如き代々を經て、此の二尊に至つたのであると云ふことを、神道に於いて傳へて居るのである。　斯う解釋し奉るのである。

## 第三節　諾冊神

愈、七代を經て、七代目に伊弉諾、伊弉冊二尊が御出になつたのである。　伊弉諾、伊弉冊二尊は、天津神の詔を受けて、此の國土を修理固成なさると云ふことになつて居ることは、已に述べた所である。　が、それが又問題で、先づ其の天津神と云ふのはどう云ふ神であるかと云ふことが最初に起つて來る問題である。　それに對して、それは伊弉諾、伊弉冊二尊より前に御出になつた所の神である。　斯う云ふのであるけれども、今述べて來たやうに、此れ等の神々は理想の神々であるとすると、伊弉諾、伊弉冊二尊に、どう云ふ風にして此の國土を修理固成せしめられるやうな御勅命を下さつたかと云ふことが疑問である。　さうして天瓊矛を御授けになつたと言ふけれども、是れは矢張り伊弉諾、伊弉冊二尊が神祕的の詔を受けて、矛をも御授かりになつたものと解釋する外はないと思ふのである。

此の伊弉諾、伊弉冊二尊が、天瓊矛を持つて此の國に御出でになつて、さうして天浮橋に立つて、徐ろに其の瓊矛を以つて御探りになつたと云ふことが傳はつて居る。　其の天浮橋と云ふことに就いても、亦色々の說がある。『釋紀』の私記によると、天浮橋と云ふのは天地開闢の當時、洲島が未だ成らない、浮脂の根係る所がないやうな工合である。　それであるから浮橋の上に立つと申したのである。」

斯う云ふ風に極めて模糊たる解釋を與へて居るのである。　所が平田篤胤は是

れは「浮橋と言つても、今の橋のやうに、此方から彼方の岸に懸けるやうな橋の意味で、天と地との中間に懸つて居る橋と云ふやうな意味ではない。又天と地とを連續して居る帶のやうなものでもない。そんなに考へる人もあるけれど、唯、神の御量を以つて造り出で給ひて、事とある節は、それに乘りて虛空を飛行されたもので、今日のもので云へば、船のやうなものである。」と解釋して居り、さうして、之れを浮漂はし乘りて往來するものであるから浮橋と云つたのであると解釋して居る。之れに反して近代の學者敷田年治は又「空に浮て架れる橋である。こんな橋のあつたことは、『丹後風土記』、『播磨風土記』などに見えて居る」と云つて居る。が、だうも船の如き物であらうと思はれる。橋と言つても、決して一方から一方に懸けてある橋の意味ではないと思はれる。

其の天浮橋の上に立つて、矛を以つて御探りになると、其の滴りが滴つて固まつて一つの島となつた。それを自凝島と曰ふと云ふ風に古傳に傳はつて居る。自凝島と云ふのは、詰り自ら凝り固つた所の島と云ふ『釋紀』にある通りの意味であるから、別に其れを二神が御產みになつたと云ふ譯ではない。」チャンと自然に其處に島が出來たのである――「即ち靄か霧などのたてこめた中より、其處に島のありたるを御發見なさつたのを、さう傳へたのであらうと思はれる。そこで二神は此の自凝島に御下りになつて愈、此の國の修理固成の業を御始めになつたのである。そこで古傳に依ると云ふと、諾冊二尊は先づ第一に、淡道之穗之狹別島を產まれ、それから伊豫之二名島、それから隱伎之三子島、それから筑紫島、伊伎島、津島、佐渡島、大倭豐秋津島と云ふやうな大八島、並に其の他の小島を澤山御生みになつたと云ふことになつて居る。

## 第三節　國土の主神

此の島々を生れたと云ふのが後世神道學者の非常に迷ふて居る所である。本居平田二翁の如きは、徹頭徹尾此の島それ自らを御生みになつたものとして居るのである。が著者は決して是れは島を御產みになつたものではないと見るのである。此の御生みになつたと云ふことも、必ずしも是れは後世人が子供を生むやうな工合に、二神が御生みになつた譯ではないと思はれる。何となれ

ば、斯う云ふ工合に都合よく一々御生みになると云ふことも、甚だ如何かと思はれる。勿論神の事は神祕的であると言へば、それまでであるけれども、併し十分研究の眼を以つて見ると云ふと、御生みになつたと云ふことも、必ずしも後世の通りの譯ではないと思ふ。此の島々と云ふのは、私は是れは島々の主宰の神々であるとするのである。伊弉諾、伊弉冊二尊が天津神の詔を受けて、此の國を修理經營されるのに就いては、當時多くの島々を、悉く一々自ら修理經營されると云ふことは、到底出來ないので、そこで各島々の主宰の神を先づ御定めになつたものと解せられる。其の主宰の神であると云ふのに就いては、其の理由として、第一に伊豫之二名島と云ふのは篤胤が、彌二並島と云ふ意味であると解釋して居るが、さう云ふ風に二つに並んだ島である。現に四國はさう云ふ風になつて居る。其の形に依つて、其の主宰神の御名を奉つたものと思はれる。それから伊豫之二名島にしても、隱伎之三子島にしても、之れに皆又の御名と云ふのがある。其の又の御名と云ふのを見ると、其の御名は比古と言つたり、比賣と言つたりするのがある。それから又別と云ふのもある。例へば大倭豐秋津島、又の御名は天御虛空豐秋津根別と云ふ。（別と云ふのは宣長の解釋に依つて見ると、吾君兄と云ふ意味であつて、國造や稻置などの類を云ひ、國々處々に居つて、其の地方を治める人を謂つたものである。即ち地方の長官を別と云ふ。さうして見ると、四國の長官を何々の別と謂ひ、或は九州の長官を何々の別と謂ふのである。斯う云ふ工合に別と云ふ名前があるのを見ても、大倭豐秋津島を天御虛空豐秋津根別と謂ふ、乃ち天御虛空豐豐秋津根別と云ふ長官が、此の島を支配されたものと、斯う見れば宜いのである。且又別と云ふのは、代々の皇子の御名に澤山ある。孝靈天皇の皇子に日子刺肩別と申すがあり。開化天皇の皇子に建豐波豆羅和氣と申すがあり。垂仁天皇の皇子には、別の附く御方が二十三人ある。景行天皇の皇子には、別の附く御方が六人ある。之れによりて見ると伊弉諾、伊弉冊尊の御定めになつた地方の長官に比古、比賣、和氣と申上る神々のあるのは、怪むに足らない。かう云ふ次第で矢張り主宰神を申上げた者と思はれるのである。それからさうすると、又、神の御名に島とか國とか言ふのは、甚だどうも可笑しい、神の御名に隱岐島（又の名天之忍許呂別）とか、筑紫國（又の名白日別）とか言ふ

のは可笑しいと云ふやうに聞えるけれども、併し後世でも丹波守とか、丹後守とか云ふのを見れば、強ち可笑しいこともない。著者の祖先には、田中淡路、田中丹波と云ふのがある。その他一般に松平伊豫、淺野藝州、斯う云ふ工合に國の名が名前となつて居る者は澤山ある。又古傳に見ても、『古語拾遺』に「生島は是れ大八洲の御靈、今の生島の巫の齋き奉る所なり」と云ひ、『舊事紀』に依つて見ても、此の『古語拾遺』の通りの傳がある。『神名式』にも「神祇官の西院に坐す生島の巫の祭る神二座」とある。

そして貞觀元年の正月、生島神、足島神に並に從四位上を授け奉られ、尋いで其の二月に、正四位下を授けられたと云ふことがある。之れによつて見ても、神の御名を、島だの國だのと申しても、不思議はないと云ふことがわかる。であるから此の島々をお生みになつたと云ふのは詰り此れ等を御經營なさるに就いて先づ以つて其の主宰神を御定めになつたことを申したのであるとするのである。

さう云ふ工合にして、此の伊弉諾、伊弉冊二神は國土の各地方に主宰神を御定めになり、それから河海山川にもそれ〴〵主宰神を御定めになり、さうして着々と國土經營の業を進め給つたのであるけれども、併し此の國土を十分に完全に經營遊ばす事は、到底此の二神の永く現世に御止りになつて、なさる譯には參らないのである。そこで以つて二神は二神についで此の天下の主神たるべき神を定めやう、二神の跡を繼いで、天下を統御する神を定めやうと云ふ事を御協議遊ばして、さうして茲に三貴子と云ふものを御生みになつたのである。即ち此の三貴子が御出來になつてからと云ふものは、此の伊弉諾、伊弉冊二尊の時代は去つて、今度は三貴子の御活動の時代に這入つて行くのである。

# 第七章　三貴子

## 第一節　三貴子降誕の問題

三貴子に就いては、古傳が實に樣々になつて居るのである。が、要するに三貴子が御出來になると云ふと、伊弉諾、伊弉冊二尊は、此の國土經營のことは一切三貴子に御託しになつて、伊弉冊尊は黃泉國に御歸りになり、伊弉諾尊は日之少宮に御退きになつたのである。抑も三貴子と申すのは天照大神と月讀命及び素盞嗚尊の三神を申すのであるが『古事記』に依ると、伊弉諾尊が筑紫の阿波岐原で、禊をされた時に、眼を御洗ひになつた。左の眼を御洗ひになつた時に、天照大神を御生みになり、右の眼を御洗ひになつた時に、月讀命を御生みになり、鼻を御洗ひになつた時に、素盞嗚尊を御生みになつた、斯う云ふことになつて居るのである。併しながら、此の事に就いて前に一言したやうな工合に、吾々はどうも神道の立脚地より、此の古傳を採るのは、甚だ如何であらうかと思ふのである。

此の禊の時に成つた神と云ふのに就いて、『神道五部書』と云ふ本がある。是れは伊勢の外宮に傳つたと云ふのであるが、何れにしろ、是れは後世の僞書と云ふことになつて居る。此の『五部書』の中に『御鎭坐次第記』と言ふのがある。其の中に斯う云ふ文句がある。「伊弉諾尊左の眼を洗ひ給ふ。因つて以つて生れ給ふ。神の御名は天照荒魂と申す。亦の名は瀨識津比咩の神なり」と云ふ傳があるが、尙ほ其の次に、又「伊弉諾尊が右の眼を洗ひ給ひて、因つて以つて生れ給ふ神の御名は、氣吹戸主神、即ち大神の分神に坐す。故亦の名は、大神の荒魂と申す。」斯う云ふことがある。此の本は信用が出來ないのであるけれども、或る古傳に斯う云ふやうな傳へがあつたのが、『古事記』の中に這入つて、その三貴子の傳が出來たのではないかと思はれる。それで平田篤胤は『五部書』は、僞書と云ふも、一概に排斥すべきものでない。殊に『御鎭座傳記』に傳ふるが如きは、よく實の旨に符ひて決めて、後人の言ひ出づまじき說にて、『御紀』『古事記』の謬をさへ正し明むべき最も妙なる傳であるとなして、次のやうに言つて居る。『御紀』『古事記』に御鼻を洗ひ給ふ時に、速須佐之男尊の生りませる傳は、速佐須良比賣

神の生りませる傳を誤れるにて『御鎮坐傳記』に此の傳の殘れるはいとも〳〵歎ばしく、此上なき賜物になむありける」と。鼻を洗はれたときに素盞嗚尊が生れられたと傳へてあるが、それは速佐須良比賣神であると云ふのである。して見ると、伊弉諾尊が左の眼を御洗ひになつた時に御出來になつた神の御名は瀨織津比賣神で、右の眼を御洗ひになつた時に御出來になつた神の御名は氣吹戸主神、鼻を御洗ひになつた時に御出來になつた神が速佐須良比賣神であると云ふことになる。さうすると、決して三貴子が此の時に御出來になつたと云ふことにはならない。是れは徹頭徹尾『御鎮坐傳記』を證據として言ふ譯には行きませぬが、併しどうも此の三貴子と申す神々が、伊弉諾、伊弉冊二尊のお揃ひに御居でになる時代に御降誕にならないで、伊弉諾尊御一神の時に御降誕になつたと云ふ古傳は、どつちから見ても、正しい古傳とは考へられないのである。

さう云ふ譯で著者は、『日本書紀』の初めに傳へてある所の伊弉諾、伊弉冊の二尊で、此の三貴子を御生みになつた。即ち天照大神、月讀尊、素盞嗚尊を御生みになつたものと主張するのである。何も『日本書紀の正傳』に斯う傳へてあるものを、それを强つて斥けて伊弉諾尊御一神で御生みになつたと云ふ說を採らなければならぬとふ理由は、少しも無いのである。

## 第二節　三貴子と二貴子

『日本書紀』の一書には、伊弉諾尊敕して、「月讀尊は滄海原の潮の八百重を治せ」と宣はつたと傳へ、又一書には「素盞嗚尊は滄海之原を御せ」と敕せられた傳へ、『古事記』も亦建速須佐之男命にのりたまはく「汝命は海原を知らせと事依たまひき」と傳へて皆同一の所を知らせと傳へて居る樣である。又保食神即ち大氣津比賣を殺し給ひし神を『書紀』は月夜見尊とし『古事記』は、須佐之男命として居る。その他、月夜見の夜見は黃泉にて、黃泉は須佐之男命の趣き給ひし所と傳へて居るのである。こんなことから、本居宣長は、此の二神は一神ならずやと疑つたのである。その門人服部中庸は、師宣長の說より一歩を進め「須佐之男命と申すは、月讀命の一名なるがまぎれて別神の如く云つたから、彼れと此れと二つになつた。が元來一神である」と、その著『三大考』に說いて居る。平田篤胤は、更

に語勢を強めて之れを一神として居る。蓋し篤胤は、『書紀』に「日月既生」などゝあるを以つて、日神、月神とし、天照大神を以つて太陽の主宰神とし、素盞嗚尊を以つて月球の主宰神と主張したものだから、當然の結論として二貴神説に逢着したのである。

勿論、三貴子の此の邊の傳には、多少の誤謬の入つて居るは、何人も認めざるを得ないが、月讀尊を抹殺せんとする説には、著者は左袒しない。著者は月讀尊には、他の二貴子と同じ樣に、澤山の傳説があつたのであらうが、『記』『紀』の出來た時には、已に古傳から遺脱されたもの、ではないかと思ふのである。即ち三貴子の説を主張するのである。

そこで伊弉諾尊の御命によつて、天照大神は當時の宗主國たる高天原を統御遊ばし、月讀尊は天照大神の補佐として高天原にまし〳〵、さうして素盞嗚尊は天下を統御なさることになつたものと傳はつて居る。伊弉諾尊がこゝに天の下と仰せになつたのは、即ち我が豐葦原中津國を申されたのである。それであるから當然伊弉諾尊の御神意に隨つて見ると、素盞嗚尊が伊弉諾尊の後を承けて豐葦原中津國の主宰神であつて、其の御子である大國主神が之れを統御され、隨つて大國主神の御子孫がズーッと我が豐葦原中津國の君主になつて居られなければならぬやうになつて來る。所が此の時に素盞嗚尊は、天下を統御することを御聽入れにならなかつた。それで素盞嗚尊は伊弉諾尊から此の國を追放されてしまはれたのである。そこで當然此の國は天照大神の統御遊ばすことになつたのである。

右の次第で此の國に取つて、又神道に取つて、最も大事な神は即ち天照大神と云ふことになつて來るのである。此の天照大神は、此の我が國家の淵源であるし、又神道の淵源である。

## 第三節　天照大神と太陽崇拜

三貴子の中で第一番目は即ち天照大神である。天照大神は日の神とも申し、又大日靈貴尊、天照大日靈尊とも申すのである。で、此の神は昔から女神であると云ふことになつて居るが、日出の帆足と云ふ人は、此の神は男の神であると言

つて居る。其の說に「聖德太子が天照皇を以つて婦人としたのである。それは窩霏爾墨の御名に依つたのである。墨の字の和訓女と通ずるからである。是れは一の權宜の言葉であつて、唯、其の私を濟されたるに過ぎないのである、所が『古事記』や『日本紀』などが皆其の謬を傳へて少しも正さない。從つて此の『古事記』『日本紀』は古傳の典據とせらるゝ所であるけれども、未だ其の道を徵するに足りないのである」と言つて、天照皇を男の神であると言ふのであるが、併し此の說が一種奇體な說であつて、何れの說に見ても、又何れの古傳に徵しても、天照大神は女の神であると云ふことは爭はれないのである。

それで天照大神は今申したやうな色々の御名があつて、皆是れが太陽に關係して居るものであるから、前にも述べて置いた樣に、本居宣長を初めとして幾多の學者が天照大神は即ち太陽であると云ふ考を抱いて居る者が尠くない。併し天照大神は決して太陽ではない。平田篤胤は、天照大神が太陽であると云ふ說が不合理であると云ふので、太陽の主宰神が天照大神であると主張して居るけれども、併し是れも當らない。一體宇宙の萬物が悉く精神を具へ、生命を有つて居つて、人間と同じやうに活動をし、又人間以上の能力を有して居ると云ふ考は、昔の人に一般に在つたものである。であるから希臘人などは星を人間と同樣に見て、生きて居るものとして居る。斯う云ふ考は今日でも、尙、未開の民族には見ることが出來るのである。斯う云ふ風に星にしても、又其の他の動物にしても、植物にしても、或は又風とか雨とか地震とか云ふやうなものにしても、皆之れを生きたものと見る。其の中で最も烈しい所のもの、又最も人類に影響のあるもの、又最も人類の注意を惹く所のものは太陽である。太陽は、旱天幾日も經續すると云ふやうな事があると、草木も枯らしてしまふし、獸畜も燒殺してしまふやうな勢を有つて居る。又春などに於いて暖かな日光は、我々の健康に非常に効果を及ぼして來るし、又その力に依つて五穀も實るし、萬物も發育して來るのであるから、斯う云ふ偉大な勢力を有する太陽と云ふものを見て、之れを神として崇拜するやうになつて來るのは、どうも自然に起る所であらうと思はれる。佛蘭西のルッソーが「地球は人類の小さい島である、我れ等の日々に最も强く目擊する所のものは太陽である。此の太陽は、我々が眼を外に向くれば自然に先

づ之れに觸るゝ所の目的物となるのである。であるから總べての野蠻人の哲學と云ふものは、地球の空想的の區分と太陽の神性とを說くに外ならないのである」と云ふことを言つて居る。斯う云ふ風に太陽と云ふものは、總べての人の注意を惹き、又其の崇拜物となる事が出來るのである。我が國に於いても、昔、青人草と云つて、澤山の人民が居つたのであるから、其の人民の間に太陽崇拜と云ふ事が行はれたことは事實であらうと思ふ。其の時に方つて天照大神が御出になつたのである。其の德廣大無限にして、他に比較すべき所のものもない。そこで從來太陽崇拜をして居つた所の下層人民は直に此の天照大神を太陽と同一に見る樣になつたものと思はれる。そこで古傳の或る部分に於いては、天照大神は恰も太陽であるかのやうに傳へられて居るのは、少しも怪むに足りないのである。

## 第四節　國民的精神と天照大神

所で熟々今日我が國民に就いて研究して見ると云ふと、第一章に於いても已に述べた通り、我が國民が昔から我が國の歷史的、地理的の關係からして、得來つた所の國民的精神と云ふものがある。其の國民的精神を分解して見ると云ふと秩序的、統一的思想に富んで居るのである。快活的、現世的感情に富んで居るのである。發展的、膨脹的性格に富んで居るのである。秩序的、統一的思想と云ふのは、我々が此の世に處して行く上に於いて總べて秩序を重んじ、統一を尊ぶ所の精神である。何れの國民と雖も秩序や統一は尊ぶのであるが、我が國民は特別に此の點に重きを置いて居るのである。例へば支那に就いて見ても、支那國民は矢張り秩序を重んじ、統一を尊んで居る。けれども我が國の樣な工合に尊ばないのであるから、隨つて秩序の根本である所のものが成立つて居らない。我が國に於いては一軒の家には家長と云ふものがあつて、さうして其の家を引締めて行くのである。けれども外の國に於いては、我が國の家と云ふやうなものを餘り見ることが出來ない。我が國の家は家長が治めて行くのであつて、又其の家長を相續することを家督の相續と言ふ。此の家督相續と云ふことが又我が國に於いては極めて大事なことになつて居る。けれども外國ではさう云

ふことが餘り大事なことにならぬ。別して西洋などになつて來ては、家督の相續と云ふものは今日見ることが出來ない　全く無いのである。家と云ふものは所謂男女同權であつて、夫婦と云ふものが對立して居るのである。子供があつても、それが成年以上になれば、矢張り又親と對立するやうになつて來る。處が、我が國では、同一血族のものが、同一家長の下に溫かい團結をなして居るのである。だから我が國に於いては、家を尊ぶのである。其の家の觀念が大きくなれば又國家になる。隨つて國家の主權者、即ち天皇陛下と云ふものは、一軒の家で言へば家長と同じやうに、國民の中心になつて、國民の崇敬の對象となられて居る。支那などに於いても忠だの孝だのと言ふけれども、併し君に對して簒奪弑逆と云ふやうなことを行ふのである。秩序の根本と云ふものを失つて居るからさう云ふことになつて來る。西洋に於いてもさう云ふ工合に、秩序統一と云ふやうなことは重んじて居るけれども、併しそれが徹底して居らない。さう云ふと或は斯う云ふ者があるかも知れない。今日我が議會に於いて、政府と議會とが非常に爭論するのはどう云ふ譯か、それでも秩序統一を重んじて居るかと云ふ質問が起るかも知れぬ。併し是れは昔の政府に於いても、內大臣だの、左大臣だの右大臣だの太政大臣だのと云ふものがあつて、政治を行つて居つたので、其の左大臣や右大臣と云ふ人には、權力の衝突などは始終あつた。今日は立法、司法、行政と云ふ工合に分れて居つて、さうして行政部、立法部、司法部と云ふ工合になつて居る。其の立法部と行政部と衝突したり、爭論したりするのは、等しく皆國政を十分に行ひ、秩序統一を十分にしやうと云ふ努力に過ぎない。天皇陛下に對しては等しく忠實に働いて居るのである。であるから一旦敵國外患の生じた場合に於いては、直に議會に於いても全會一致、國內に於いても擧國一致と云ふことになつて來るのである。又御大禮とか御大喪に關する時には、如何に爭論して居つても、直に一致してしまふ。是れが即ち我が國民が秩序統一と云ふ精神を今日に於いても十分に發揮して居る證左である。要するに我が國では秩序統一の根本に、神聖なる天皇陛下を頂いて居るのである。西洋などで神を以つて主とし、上とし、皇帝も人民も均しく神の支配を受くべきものである。即ち神に對しては同輩である。此の世の父よりは、天の父を大事とし、此の

世の主よりは、天の主を大事にすると云ふ考では、とても我が國のやうな秩序統一は出來ない。又支那や米國のやうに國民がてんでに民を主とし、民を根本としては、とても徹底的の統一は出來ないのである。勿論、我が國でも歴代の陛下は民を愛せられ、民の心を以つて心とせられて居るけれども、外國の樣に、人民自身が民主主義を主張してはだめである。人民は多いのである。多い人民が主では、どんな方法を取つても到底理想的の統一は出來こない。

それから又快活的、現世的感情と云ふのは、印度國民などは、どうも厭世的の國民である。快活的でない。山の中へ引込んで生活すると云ふ風の者が多い。いつぞや來朝したタゴールなどは、最も新らしい實例である。汽車だの、電車だの、その他所謂文明なるものを詛ひ、市街の熱鬧を厭ふなどは、我が國民が御祭などを愛し、緣日に詣るを好むのとは、同日に論ぜられない。又西洋でも希臘國民などは隨分現世的であつたが、中世には澤山の厭世的國民が出て、財產を敎會に寄附して隱遁するの風が大いに行はれた。現今でも佛蘭西國民などには、かゝる生活をなすものが多い。尤も我々日本國民に就いて見ると隨分厭世觀を抱いて居る者もないことはない。けれどもそれは佛敎の影響を受けたり、又は其の個人の境遇等がさう云ふ事をし出來したものであつて、大多數から見ると云ふと快活的である。厭世的の憂鬱的の生活をすると云ふことは、日本國民は餘りしない。厭世的傾向に富む佛敎でも、日本化すると日蓮一派のやうに大いに快活的になる。念佛宗などは、餘程厭世的傾向を持つて居ると見なくてはならないけれども、肉を食ひ、妻を帶する所など、とても印度佛敎として見られないやうな現象である。之れも日本化せられた結果と見てよい。それから又現世的である。未來の天國未來の極樂と云ふことは餘り念頭に置かない。勿論年を取つた者や、身體の弱い者や、何か動機を持つて居るものゝ中には、隨分さう云ふ考を有つて居る者もある。兎に角精神なり身體なりが病的の者は、天帝や、阿彌陀如來などにひどく依賴し、未來の幸福の保證を得やうとする觀念の非常に强い者もあるけれども、健全なる日本國民に於いてはさう云ふ者は少い。たとひ佛敎徒となつて、佛に禮し、寺院に布施するものと雖も、又たとひ基督敎徒となつて、神の福音を喜び、敎會に參禮するものと雖も、日本國民として健全なる以上、現

世的たるを失はない。要するに日本國民の大多數は皆現世的で、現世に於いて活潑に活動するのが日本國民の特色である。

それから又日本國民は、どこ迄も發展し、どこ迄も膨脹して行くと云ふ性格を具へて居る。之れを歴史に見れば、最も彰明較著である。國運の日に發展し、膨脹して止まないのも全く此の性格の爲である。勿論外國人でも、さう云ふやうな性格を有つては居る。殊に昔の羅馬人、今の獨逸人などは、かゝる性格を著しく有して居る。だから能く人が世界を統一するものは、日本人か、獨逸人であると云ふのである。けれども羅馬人にしても、獨逸人にしても、秩序的、統一的思想が如何にも乏しい。羅馬は王政を行ひて遂に國王を放逐し、共和政を行ひて國內爭鬪絶ゆるなく、日本國民の樣に、他の秩序的、統一的思想、快活的、現世的感情を有して、而して此の發展的、膨脹的性格を有つて居る國民は、殆んど見る事が出來ない。我が國民は斯う云ふ思想感情を有つて居つて、而して發展的、膨脹的である。是れは我が國家の發展し膨脹し來つた徑路に見ても分る。昔は我が國の勢力と云ふものは、近畿から東海、中國、九州方面にしか及んで居なかつたのだが、だん〳〵と遠隔の地に及んで、遂に北海道、樺太、西は朝鮮、南滿、南は琉球、臺灣、南洋の遠きまでも及ぶと云ふ樣に、漸次發展膨脹して來て居る。又思想の上から見ても彼の新年の祝の儀式などに於いては、是れが十分に發現されて居る。其の他日本人の爲すこと、することが、常に發展的、膨脹的である。其の性格の流露である。詰り是れが日本國民の國民的精神である。で我が國の神々と云ふのは、此の國民的精神の精を體し、華を集めて居らるゝ所の御方である。であるから我が國の神々は八百萬と云ふ工合に實に澤山在はすけれども、それは決して希臘の多くの神のやうに、雜然不統一に在はすのではない。皆嚴然たる系統の地位を有して御居でになる。又印度の十六羅漢とか五百羅漢とか、其の他澤山の佛菩薩のやうに、厭世的、保守的のものでなくして、實に快活的、發展的に在はすのである。で我が國の神々はさう云ふ工合に、我が國民的精神の精を體し、華を集めて居られるのであるが、其の中に就いて殊に偉大なる神は即ち天照大神であるのである。

## 第五節　神道の根本

天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の御德は宏大無限、言葉を以つて之れを現はすべきものが無い位である。のみならず、人身を有して御居でにならぬから、我々はそれを仰ぎ奉り、以つて其の御敎を十分に受くることが出來ないのである。然るに天照大神は人身を有つて御居でになつて、而して天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の宏大無限なる德を人格化して具有せらる。即ち我が秩序的、統一的思想、現世的、快活的感情、發展的、膨脹的、性格の精華の更に精華なるものを有せらる。勿論天照大神に就いて古傳は種々あるけれども、其の古傳は當時の極めて未熟なる文學を以つて傳へられて居るのであるから、天照大神の偉大なる御德を古傳によつて十分に窺ふことは出來ない。併し其の傳つて居る所の物を見ても、略ぼ其の一斑を窺ふことが出來る。即ち『書紀』に「光華明彩、六合の內に照徹す」と云ふ風に傳へてある。之れを以つて見ても如何に大神の玉體が麗はしく、美くしく、其の御德の偉大に在はしましたかと云ふことが想像されるのである。而して更に大神は皇孫瓊々杵尊を此の國に御降しになる時に方つて「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆、當與天壤無窮者矣」と云ふ神勅を御下しになつて居る。此の神勅に依つて見ても、此の瑞穗國は吾が子孫の王たるべきの地であると斷定され、さうして寶祚の隆なること當に天壤と窮り無かるべしと仰せられて居る。之れを支那などで言つて見ると堯帝が位を舜に傳ふる時に方つて「咨、爾舜、天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮、天祿永終」と言つた。堯は之れを以つて舜に傳へ、舜は之れを以つて禹に傳へたと云ふことで在るが「四海困窮」とある。「天祿永く終へん」とある。然るに我が國のは「寶祚の隆」とある「天壤と窮り無かるべし」とある。實に此の時代に於いて、天照大神の御雄圖の如何に遠大であつて、他に比較すべきものが無いと云ふことが分る。而してこゝが神道の根本である。

## 第六節　三種の神器

で、此の神勅と同時に、三種の神器と云ふものを御傳へになつた。此の三種の

神器と云ふものが、此の神勅と相共に、天照大神の後世に垂れられた所の範を示されて居るのである。一體我が國民は、天照大神の神勅に從つて、遠大なる思想を以つて秩序統一を保ち、快活的、現世的であつて、而して何處までも發展し膨脹し、天地と共に窮る所がないやうにあるべきである。さうするのに必要であるが爲に、此の三種の神器と云ふものが傳へられて居るのである。從つて三種の神器は、我が國に於いて最も重要なものとなつて居る。此の三種の神器に就いては、先づ其の順序が、大分昔から問題に成つて居る。天孫降臨の時の傳には「八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍」といふ具合に、『日本書紀』にも『古事記』にも傳はつて居るが、『古語拾遺』には、鏡劍といふ順序に成つて居るし、『書紀』の繼體天皇の所には矢張り鏡劍といふ順序に記されて居り、『神祇令』にも、鏡劍といふ風に記されて居る。斯ういふ樣な具合で、鏡が一番上であるといふ說もあるのであるが、併し此れは如何かと思はれる。元來、この三種の神器は、何れが重いといふ樣な區別の附けらるべき理由の物では無いと思はれる。唯、今擧げた鏡劍といふ傳のあるのは、璽は、陛下の御身邊に常にお置きになり、卽位の御大禮の場合などにも、璽は已に新しき　陛下の御側にお置きになつてあつたもので、忌部などが奉る場合には、鏡と劍とを特に捧げたものである。其れで、此の中から璽を省いて、鏡と劍とを並べて書く樣な工合に成つたものと思はれる。尤も鏡に對しては、特に天照大神が別の神敕に、「此の鏡は我が御魂となして、吾が前に拜くが如くいつきまつれ。」と仰せになつて居る意味よりすれば、鏡が最も重い樣に思はれるが、三種の神器として大神の御授けになつた場合には、決して優劣をつけて御授けに成つたのでは無いと思はれる。又、『古語拾遺』などには、二種の神寶と書いて有つたり、『大殿祭の祝詞』にも、「天津璽乃劍鏡」などといふ言葉があるし、其の他上に擧げた二三の例にも鏡劍といふことが書いて有るものであるから、人によると、三種の神器は二種の神器であるなどと考へるが、之れは大變な間違ひであつて前にも言つた樣に曲玉は、常に　陛下の御側にお置きになる事になつて居るのであるから、右のやうな紀事には二種のみを書したものである。神器の三種であることは、『日本書紀』にも、『古事記』にも、嚴として記されて有るのであるから、此の間に、一點の疑義を挿むべき餘地が無いのである。

次に天照大神が、三種の神器を瓊々杵命に御授けに成つたのについて、北畠親房卿は『神皇正統紀』に「三種の神器世に傳ふこと、日、月、星の天にあるに同じ。鏡は日の體なり。玉は月の精なり。劍は星の氣なり。ふかきならひあるべきにや云云。鏡は一物をたくはへず。私の心なくして萬象を照すに是非善惡のすがたあらはれずといふ事なし。其の委に從ひて感應するを德とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を德とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす。智惠の本源なり。此の三德を翕受けずしては、天下の治まらんこと、まことに難かるべし。」と云ひ、三種の神器を大いに尊重し、尙「此の國は三種の正體をもつて眼目とし福田とす」と云つて三種の神器を、我が國民の行ふべき大道の根柢となして居る。之れに次いで一條兼良卿も三種の神器を大いに尊重し、その著、『日本書紀纂疏』に「三種の神器は神書の肝心、王法の樞機なり」と云ひ、尙「鏡の妍媸を照すは知の用なり、玉の溫潤を含むは則ち仁の德なり、劍のよく剛利なるは勇の義なり」と云ひ、以つて三種の神器は、知仁勇の根本義を示すものとし、而して、鏡は實に三器を代表する物として居る。其の說に、「三器の物たる優劣なしと雖、その出生の次第を原ねれば鏡は第二時にあり、又、眞坂木の中枝に懸くるは、神明中道を以つて宗とする故なり」と云ひ、鏡を擧げる時は劍璽も自ら其の中にあるものとして居る。斯ういふ風に中古の學者は、三種の神器に、正直、慈悲、智惠とか、知仁勇とかいふ意味の有るものとして說いたものであるからして、德川時代になつても多くの學者が、種々の方面からさういふ風に說いて居る。例へば山鹿素行の如きは『中朝事實』に於いて盛に三種の神器の敎訓を說いて、「玉は以つて溫仁の德を表はすべく、鏡は以つて致格の知を表はすべく、劍は以つて決斷の勇を表はすべきである。其の象るところ其の形はすところ、皆、天神の至誠である。此の時未だ三德の名はなかつたが、おのづから其の名の義は存し、又その神器も備はつて居る。唯、神器の備はつて居るばかりでなく、この神器の成功があるのである。最も畏るべきの甚しきである。竊に考ふるに、三器は、天神の功器、三德の全備である。聖主之れを用ひて、內は其の睿心に鑒み外は其の治敎を制するのは、乃ち神代の遺敕である」と述べて居る。神道の學者は殊に盛に斯ういふ說を主張して居る。例へば、度會延佳といふ人は其の著『陽復記』に「此の三種の神寶

は、智仁勇の三德をあらはしたると、古き傳へあるにぞ、孔子の道は我が國の神道にひとしき道と思はるゝ」と說いて居るし、吉川惟足も、『神代之卷惟足抄』に「事を言へば、三種の神寶、理を言へば天子の御心なり。三種の神寶は、收まりて胸中にあり。胸中は三種の神寶にあらはる。』といひ、三種は儒道の知仁勇に當るなりとし、更に進んで「三種は鼎の三足の如し。寔に神道の肝心、王法の樞機、代々の御守として國土普き光なり。」と說いて居る。玉木葦齋も、『藻鹽草』に「三種の寶物は、固より傳國の御璽、德の則、道の具にして神々相承け、皇々相傳へて、心術の要、修身の方より、蒼生を養ひ、天下を馭め給ふ道を物に表して示し給ふ。神國の大本、神道の祕要。凡そ天地の理、人倫の道、この三種の外に出づる事なく、實に日月と俱に懸り、天壤と朽ちざる萬代不易の道の器にて在坐す。」と說いて居る。果して三種の神器が、此れ等の學者の云つて居るやうに、知仁勇の三達德の敎などを含んで居るか如何かといふ事は、勿論問題である。知仁勇の敎などは、天照大神の頃には、我が國には素より無かつたのであるから、こゝに持つて來るのは、附會の謗は到底免れまい。併し斯う考へるのも全然根據の無い事とは言へない。

『日本書紀』の景行天皇の時に、天皇が熊襲征伐の爲に、周防にお出でに成つた時、その地方の頭の神夏磯媛が磯津山の賢木を拔き取つて、上の枝には八握の劍をかけ中の枝には八咫の鏡をかけ、下の枝には八坂瓊をかけて白旗を船の舳に立てゝ參向したといふ事があるし、仲哀天皇の熊襲征伐の時には、岡の縣主の祖、熊鰐が、天皇の御出でになるのを聞いて、五百枝の賢木を拔き取つて、九尋の船の舳に立てゝ、上の枝には白銅の鏡をかけ、中の枝には十握の劍をかけ、下の枝には八坂瓊をかけ、周防に參迎へたといふ事がある。なほ其の時には筑紫の伊覩縣主の祖、五十迹手も亦、天皇の出でますを聞いて五百枝の賢木を拔きとつて之れを船に立て、上の枝には八坂瓊を取りかけ、中の枝には白銅の鏡をかけ、下の枝には十握の劍をかけ長門の引島に迎へて、之れを獻つたのである。其の時五十迹手の言葉に「臣敢えて此の物を獻る所以のものは、天皇、八坂瓊の曲れるが如くに、たえに天の下しろしめせ、又、白銅の鏡の如くに、明かに山川海原を見そなはせ、此の十握の劍をとりひさげて天の下を平けたまへ」と申上げた。すると、天皇は大いに之れを御賞美なさつたといふ事である。此の言葉は、其の外に、餘り信用は

出來ないとしてあるが『神皇實錄』『天口事書』といふ風な本にも載つて居るので、如何も五十迹手が考へた言葉でも無いやうに思はれる。多分、斯ういふ言葉が、古くから有つたものでは無いかと思はれるのである。とにかくかゝる思想がふるくから存在したものと思はれる。さうして見ると、天照大神の御心の中に、或は之れに類した御考が有つたので無いかと思ふのも、無理な推察ではないと思ふ。賴山陽は、天照大神の御德の偉大なることは、窺測することは容易に出來ないけれども、之れを神器に就いて見れば、何とか言へる樣に思はれる。天壤無窮の神勅の後世に赫々たる事實と成つて表はれて居るのを以つて見ても、其の始に、天照大神が神器に託して其の德を表はされたのでは無いかといふことが想像せられるといふ風に言つて居るが甚だ穩健な考のやうに思はれる。久保季茲（すえこれ）といふ人は『三種神寶論』といふ書に「もとより大御神の御心にさる小賢しき理窟を以つて授け給へるには非ざれども、自然に其の理にかなふめり。」と言つて居るが、當時支那では、頻りに知仁勇などの說が唱へられ、西洋では眞善美といふやうな考が已に有つたのであるからして、さうして見ると、世界無比の我



が國體の淵源をたてられ、雄大な神勅を下し給はつた　天照大神の御心に、自ら斯かる御考が出來たのでは無いかと思はれる。當時、貴い器物は他にまだ澤山あつたに相違ないが、其の澤山な器物の中から特別に此の三種を御選び出されたといふのには、餘程深い意味が無くてはならない。儒者の說くやうな意味は別として置いても、此の三種を最も貴重な器物として御授けに成つて、其れが、我が國の神器として萬世に傳へられて居るといふのは、實に有難いことである。

印度では、轉輪王の世に、七寶が具足して居たといふ事である。福力の感ずる所で有つたのであらうけれども、我が國の神器の樣に、傳へられた所のものでは無い。又、支那では、九鼎を以つて寶として夏殷周皆相傳へて居つたけれども、其の鼎は夏の禹王の鑄造した所といふのであつて、後世には傳らない。秦より以來傳國の璽といふのがあつて始皇の製する所で、李斯の書いたのであるといふし、又漢では斬蛇劒を傳國の寶としたといふが、之れ又、我が國の神器に比較せば、同日に論ぜらるべきものでない。獨逸などでも十種の神寶といふ樣な物が有るといふ事であるけれども、勿論、我が國の神寶とは到底比較には成らないので

ある。獨り我が國にのみ斯かる神器が傳はつて、其の光天日と相ひとしいのは、實に、我々國民の光榮としなくてはならない。

而してたとひ天照大神の三種の神器を以つて政治の要諦を示されたものとするのは、別問題としても、とにかく右の如く神聖貴重なる三種の神器が、天壤と無窮に傳へらるゝに對して、吾人は深遠なる意味を懷き得るのである。所謂、生存競爭なるものは、動かすべからざる現象であるから、今日我々が世界の競爭場裡に、優勝な地位を占めんが爲には、先づ我が國家社會の一員として、十分に種々の方面の知識を發達しなくてはならない。けれどもその知識は單に競爭に上手になつて、競爭し得た結果は、唯、その競爭を繼續し得るに過ぎないと云ふ風な、物質的の知識ばかりではいかない。之れと同時に所謂理性的の眞智を啓發しなくてはならない。神鏡の嚴として存するのは、正しく此の意味を包含するものと信ぜらる。眞智は貴重であるけれども、此の方面にのみ偏するときは、溫かき惻隱の心は乏しきに陷るの虞がある。是に於いて情操の發展が極めて必要となつて來る。寶器に神璽の備はつて居るのは、果して偶然ではないのである。

眞智と云ひ、情操と云ふも、要するに、靜止的であつて、天壤無窮の國運を發展せんとする、大々的活動を誘起する所の活力とはならない。是に於いてか、更に鞏固な意志がなくてはならないことゝなる。意志は、心的活力で、强健勇武の身體を俟つて、初めて鞏固な意志となるのである。若し鞏固な意志を器物で示さんとすれば、利劍よりもよく示さるゝものがあらうか。我々は神器の中に寶劍の存することの益〻至れり盡せりと云ふ感なきを得ないのである。

要するに我々は、三種の神器によりて知を磨くも皮相の知に止まらず、進んで眞智を磨くに、神鏡を理想とし、溫乎たる情操を陶冶するには、神璽を理想とし、盤根錯節に遇つても、聊か凝滯する所なきは、神劍を理想とし、遣次顚沛、修養是れ努め、以つて自己の人格を高上せしめ、天壤無窮の國運發展てふ我が國民的大理想の實現に從事すべきを示されて居るものと解し得るのである。

## 第七節　天照大神の至德

斯う云ふ譯で、天照大神の御德は、先づ天壤無窮の神勅、三種の神器の授與と云

ふ風な古傳に依つて窺ふことが出來る。で、天照大神には、釋迦年尼のやうに六年の間山に入つて苦行をして、さうして五千餘卷の經文を說いたと云ふやうな事蹟はつゆ程もないのである。又耶蘇基督のやうに、彼方此方に浮浪的の生活をして、さうして悲慘な末路を爲したやうな事蹟は無いのである。又孔子のやうに、或は政治家となり、或は敎師となつて、門人を集めて敎を垂れたと云ふ事實もない。又ソクラテースのやうに、人家の軒下に立つて一世の墮落せる風俗を革めんが爲に、遂に其の犧牲となつて、毒を仰いで死なねばならぬと云ふやうな事蹟もないのである。しかも天照大神は我が國民に取つて、此れ等他國に現はれた偉大なる人物よりも更に更に偉大である。何故に斯く天照大神が偉大であるか。一體人間は其の道に志ある者は、其の道の達人を以つて、非常に偉い者と見るのである。是れは古今東西を通じて見得らるゝ所の現象である。之れを例を擧げて見ると、碁打ちは碁の六段とか七段とか云ふ人は實に偉い人だと思ふ。擊劍をする者はその二級にもなつて居る人は非凡な豪い人だと思ふ、相撲取は大關、横綱と云ふ人は、非常に偉いと思つて居る。音樂をやる者は音樂の大家を見て非常な偉い者と思ふ、斯う云ふ風に、各、其の道の達人を以つて神のやうに尊敬するのである。例へば普通の力士で見ると、彼れ等は横綱の下駄を揃へたり、湯に入つて背中を流したりするのは何でもない、或る場合にはさう云ふ人の入つた湯でも飲むと云ふ位である。其の道の人は其の道の達人を非常に偉いと思ふ。けれども其の道以外の者から見ると、餘り偉いとも感じない。例へば碁を打たない者から見ると、彼れは本因坊だとか、八段だとか七段だとか言つても「ナンダ本因坊がナンだ、八段がナンダ」と言ふであらう。擊劍をやらぬ人から見れば「二級の人がどうだ、三級がどうした」と思つて格別偉くも思はない。ナンダ竹の先をカチ〳〵やつて、名人も何もあつたものぢやないと言ふ。其の道に趣味を有たない者は、ナンダ横綱を張るのに一萬圓を出すなんて、馬鹿々々しい。其の金で何か儲かる商賣でも始めたら宜いではないか。此の寒いのに裸體になつて、十貫目もある綱を卷き付けて得意になつて居る。氣狂い見たやうなものだと言ふ。何でも其の通りである。何でも其の道でない人から見ると、殆んど何等の價値もない。であるから印度人種、若くは印度人種と類し

た思想を有するもの、或は適切に云へば、佛教的思想若くは信仰を有して居る人には、佛教は偉い教のやうに思はれる。從つて佛はスバラシイ偉人に思はれる。猶太人、若くは猶太人的思想を有するもの、或は適切に云へば、基督教的思想若くは信仰を有して居る人には、基督教は偉い教のやうに思はれる。從つて基督は大した偉人に思はれる。けれども、佛教や、基督教に對して、趣味も信仰も持たぬものから見ると、釋迦何するものぞ。親の命を聽かず、國の亡ぶるのも顧みず、氣狂いじみた事をして平氣で居る。耶蘇何するものぞ。徒らに天國を空想し、社會黨的世界主義を以つて、世人を邪道に導かんとすなどゝ云ふであらう。之れと同じ樣に、熱心なる佛陀、基督の門徒、若くは西洋哲學の心醉者より見れば、我が天照大神は、極めて平凡な人である。何等の價値の無い人のやうに見えるかもしれない。けれども我々日本國民から見ると、我々日本國民は今述べたやうな日本の國民的精神と云ふものを有つて居るのである。勿論此の國民的精神は或は大なる者があり、或は小なる者がある。恭で譬へて見ると、から笊（ざるこ）恭もあらふし、初段に井目の者もあらふし、八目の者、七目の者、三目の者もあるであらふ。

さう云ふやうに、我が國民的精神の淺深厚薄はあるけれども、日本國民である以上は、大抵或る程度の此の精神を有つて居ない者はない。斯う云ふ精神を有つて居る者の眼から見ると、此の精神の實に偉大なるものを有つて居られる比較すべきものが無い位偉大なものを有つて居られる天照大神は、實に偉大な御方であるとの感が起らざるを得ない。そこで天照大神は、我々の最も重んずる所の神となられて在はすのである。であるから實に天照大神の御德は何と名づけ奉つて宜いか、名け奉る言葉が無い位である。昔支那の孔子の門人は、孔子を呼んで「夫子は日月の如し」と言つたと云ふことであるが、實に我が國民は天照大神を如何に申上げて宜いか分らないので、そこで天照大神の御德の廣大なのを假りに天日に比して、天照大御神と申し、若くは大日霎貴尊と申し、若くは日の神と申したものと思はれる。印度人的の思想、或は猶太人的の思想、若くは歐米人的の思想を有つて居る人から見ると、極めて平凡に見える所の此の天照大神が我が國に於いては實に萬世の師表と仰がれる神に在はして此の神道の淵源を成された所の神に在はすのである。而して同時に我が皇室の御祖先に在はす

のである。神道の人生觀は、此の天照大神に依つて示されて居るのである。天照大神は總べて我々の儀表に在はす神である、天照大神の御行ひになつたことは我々日常の行爲の規範となるのである。即ち神道の淵源は實に此の天照大神に在るのである。勿論當時文學がなくして十分に天照大神の御事蹟が傳つて居ない。併しこの傳つて居るもの丶中には金玉のものがあるのである。我々の已に述べた天壤無窮の神勅の如き、世界無比の國體の淵源となり、神道の骨髓根本となつて居るのである。又三種の神器の深遠なる意味――道德上の意味を暫らく措いても――皇統一系の緣由となる深遠なる意味を有し、殊に寶鏡を天忍穗耳尊に授けらるゝ時に當り「吾が兒此の寶鏡を視まさんこと、當さに吾を視るが如くし、床を同くし、殿を共にし、以つて齋の鏡となすべし」と宣はつて居る。此の神勅は現代の國民道德、神道の重要な部分である祖先崇敬の淵源である。此の勅命と同時に、大神は高天原にきこしめす齋庭の穗を給ふ。是れ新嘗祭の料なると同時に、我が國民に一日も缺くべからざるものである。保食神に關する傳と共に祭祀と仁政との淵源である。その他大神は、種穀養蠶、紅織

等の事の範を示されて居る。尙素盞嗚尊上天の時には、大夫武備を設けられ、躬には十握劍、九握劍、八握劍又背上に靫を負ひ、手に弓箭を握り親ら防き給ふと傳へてあるのは、大神が武備にも細心の注意を拂はれたのを明にするものである。かう云ふ風な古傳はまだ澤山あるが、今云つたやうな一種の僻見を持つて居る人には、殆んど何等の價値を認めないかも知れない。が、正統の日本人の血の血管に流れて居る我が國民は、釋迦、基督、ソクラテースの聖を以つても、尙、說き得なかつた尊嚴なる大道を示されたる此の天照大神の御德を仰ぎ、人類萬世の儀表として崇敬渴仰しないものはないのである。かくて伊勢の大神宮の稜威は、天壤と共に窮りなきを知るべきである。

## 第八節　八百萬神

天照大神に次いで、三貴子として、月讀尊、素盞嗚尊と云ふ重要な神々のましましたのは、已に述べた通りである。月讀尊に就いては、古傳が餘り傳はつて居らぬが、要するに天照大神の御補佐にまし〳〵たものと思はれる。素盞嗚尊に就

いては、種々の古傳がある。それから素盞嗚尊の御子の大國主神と云ふ神が、天下經營の業に從事せられ、神道の各方面に著大な影響を遺され、又大國魂神として、大神（おほかみ）神として、神道に於いて一つの重要な神に在すのである。それから尙、天つ神の系統の神として、瓊々杵尊、武甕槌神、經津主神、天兒屋命、天太玉命、天鈿女命（あめのうづめのみこと）など重要な神々の澤山にましますのである。かゝる神々を總稱して八百萬神と申し奉るのである。而して天照大神の正統の神は、神日本磐余彦尊即ち神武天皇に至り、以下現人神として歷代の天皇に及ぶのである。かゝる神道の神々の中で、殊に重要な神々に關し、詳細に之れを講述するは、極めて必要のことであるけれども、本書のやうな小冊子では、それは出來ないのである。

要するに、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の至つて廣く、至つて大きく、至つて高く、至つて遠く、至つて眞、至つて善、至つて美なる御德を享受せられて、此の國に御出になつた神々は、自ら歷史的、地理的關係の下に、偉大なる我が國民的精神を得たまひて、我が國民の儀表となられ、神として國民を指導開發せられたのである。即ち天照大神の直系にまします歷代の天皇は、現人神として、秩序統一の根本となられ、崇敬渴仰の中心となられ、發展膨脹の源流となられて居るのである。かゝる萬世無窮の天皇を中心とし、恰も太陽を中心とし、多くの天體の活動するやうに歷代の多數の忠良なる我が國民は、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神より享受したる神德を發揮して、又神として盛に活動して、さうして神道を振興し、神道を發展し、以つて無限の將來に及ぶのである。

# 第八章　神道の内容

## 第一節　道の觀念

神道は、神の道である。その神々の事を大要述べたから、今度は神々の道の事に就いて述べなければならぬ。それに就いては、道と云ふ觀念は一體どう云ふ事を意味して居るのであるか、先づ之れを明にしなければならぬ。道と云ふ言葉は本居宣長の説に依つて見ると、知と云ふのが本の言葉であつて、今でも山路、野路、船路、通路など皆チとばかり言つて居る。それに美と云ふ稱める言葉を添へて、美知と云ふ言葉が出來て居るのであると云ふのである。何れにしても美知と云ふ昔の言葉は唯、吾々が日々通行する所の道路の意味の外には使はれて居らなかつた。所が後世漢字が這入つて來るやうになつて漢字の道の字を日本語に譯す時に、此の美知と云ふのに當嵌めた。そこで以つて此の美知と云ふ言葉の中へ、道の字の意味が這入つて來る樣になつた。詰り美知と云ふ言葉が、



今迄有つて居なかつた支那の道の字の意味を、其の中へ包含するやうになつた。それで、支那の道の字の意味はどう云ふのであるかと云ふと、『説文』に「道、行く所の道なり」と云ふ説明が與へられてあるやうに、昔は唯、道路の意義に使つて居つたものと見える。それから支那の聖人とか、君子とか云ふやうな人々は、日月の運行、四時の循環と云ふやうな自然現象即ち天然の有樣を見て、どうも是れが人間が丁度外を歩くのに、一定の道を執つて行くやうな工合に、定つて現象して居るのであると見たものと思はれる。人間が外を歩くのに道を外れれば他所の家の臺所などへ飛び込んだり、又は溝の中へ落ち込んだりしなければならぬ。道を歩きさへすれば安全である。道を歩かないと云ふと、人から小言を言はれたり、何かして色々の故障に出くはして、目的の地へ行く事が出來ない。さう云ふ工合に此の天然現象も矢張りキチン〳〵と、人が道路を歩くやうに進行して行くものであると思つたものと思はれる。そこで「一陰一陽之れを道と謂ふ」などゝ云つて陰陽の交代して行く所が道であると言ひ、又「盈て溝は天の道なり」と云ふ言葉もある。物が一杯になるまでは溢れなければ溢れてしまふ。一杯になるまでは溢れな

いけれども、一杯になれば溢れる。茶碗へ水を入れるのに、何遍入れても一杯になれば溢れる。丁度人間が外を歩くのと同じ事である。ちやんと極つて居る。さう云ふ風に見て又「盈れば必ず毀つ天の道なり」などゝ云つたものである。かう云ふ工合に天然現象が現象して行くのには、一定の道筋と云ふものが必ず在ると見た。さうして之れを天の道だと云ふ。所が其の天の道がさう云ふ風に行はれて居ると共に、更に之れを人間に及ぼして見ると、人間が日々行つて行くのは、矢張り一定の道筋を經て居る。日常、人に接する間に於いて、一定の道筋を經て居ると見たのである。そこで「父字ひ、子祇む。兄友に弟恭、天惟、我が民に與ふ彝なり」と云ひ、之れを天然の道であると見たものである。或は「忠信篤敬、天の道なり」と云ひ、君に忠義を盡し、朋友に信義を守り、又人に接して篤く、又敬しんで居ると云ふことは、是れは天の道である。斯う云ふ風に段々及ぼして來たものと思はれる。であるから支那の董仲舒と云ふ人は「道の大原天に出づ」と言つて居る。道と云ふものは詰り天に出て居る。「盈て蕩くは天の道なり」或は「盈れば必ず毀つ天の道なり」と云ふやうな工合に、人間の道も天に基いて、天道と同じ樣に行はれるのである。即ち自然現象が本性に從つて活動して居るやうに、人間も本性に從つて行ふ。そこが人間の天然に得た所のものである。先天的に得て居るものである。斯う見たのである。そこで支那では「性に率ふ、之れを道と謂ふ」と云ふ言葉が起つて來る。先天的である所の人の本性に率つて行くのが即ち道である。で支那の道の字には斯う云ふ意味が含まれて居る。人間が日常生活する上に於いて、必らず守つて行かなければならぬものを道と云ふのである。道は近きにあるのである。須臾も離るべからざるものである。離るべきものは、道ではないのであると言ふのである。

で我が國の美知と云ふ言葉には、支那の道と云ふ字が這入つて來る迄は、こんな觀念がなかつたのであるとしたならば、儒教の學者が言ひ來つて居るやうに、我が國に於いては上古の人間は禽獸と同じであつて、人道と云ふものを全く解さなかつたものであるか、どうかと云ふのが問題である。本居宣長は「古の大御代には道と云ふ言擧も更に無かりき」と言つて居る。それでは上古には道と云ふものは一切無かつたのであるかと言へば、宣長は「大いに然らず」として居る。

「皇國の古は道と云ふ言論はなかつたけれども、道と云ふ事實はあつたのである」と云ふのは、翁の主張である。誠に其の通りであつて、我が國に於いては古代道と云ふ風な言葉は無い。或は今日西洋で謂ふ所の本務とか、義務とか云ふ言葉も勿論無かつたのである。併し吾々が實際に於いて行ふ所の道と云ふ事實、本務なる事實は、優に十分に存在して居つたのである。唯、其の事實に道と云ふ名を附するやうになつたのは、道と云ふ字の輸入後のことである。道と云ふ言葉が無かつたからと言つて、決して一派の學者が言ふやうに、上古は禽獸のやうなものでは斷じてなかつたのである。

## 第二節　神道なる文字の起源

で、その道は、何と云ふかと云へば、卽ち「惟神の道」と云ふのである。「隨神の道」とも書くのである。此の我が國の昔の道を神道、又は神の道と云ふやうになつたのは何時頃であるかと云ふと、『書紀』には用明天皇の時に「天皇佛法を信じ、神道を尊ぶ」と錄せられて居る。併し此の文字は『鹽尻』と云ふ本に「神道の字我が帝紀を考ふるに佛法に對して云へるのみ、後の世の如くことゝ〳〵しく秘訣とするが如きに非ず」と書いてある通り、決して眞の神道の意に用ひられたのではない。篤胤も亦『書紀』の此の神道の文字を解して「神を祭つたり、神を禱つたり、又祓などの類、總べて神に仕へまつる事をひろく申したもので、所謂神事の事でござる、尤もこの神事も云ひもて行けば、神道の事ながら事と道とは幹と枝葉の如くで、右申たる神ながらの道とは、大きに本來の差別あることでござる。佛法と相對して神道とあればとて、後世の神學者などの云ふ如く、敎の事ぢやと心得るは非で、御座る。唯、此に所謂神道とは、用明天皇は佛法を御信じ遊ばしたけれども、神事のことも疎には遊ばされなんだと云ふ意に輕く見るが宜しいで御座る。」と云ふ風に云つて居る。で、此の時の神道と云ふのは、詰り神道の儀式的方面に名けたもので、根本的內容の意味に使はれたものではないやうである。さう云ふやうな儀式的方面は、智識の幼稚な國民の感情の要求を滿足させることは出來るけれども、人の智識が段々發達して來ると云ふと、唯、神の前に行つて御祭りをしたり祓をしたりするやうな事だけでは十分なる滿足は出來ないやうになる。

佛教に就いて見ても、佛教は一方に於いては、金色燦爛たる佛像を作つたり、豐富なる御供物を備へたり、金襴、袈裟、衣を着けたり、勿體らしく自らも解し得ないやうな御經を讀んだり、色々な儀式をするけれども、佛教があれだけのものであつたならば、佛教と云ふものは到底今日まで命脈を保つことは出來ない。又今日のやうに擴がることは出來ない。所が佛教は他方に於いて多くの人に、感心せしむるやうな色々の教理と云ふものを有つて居る。それで以つてあゝ云ふ工合に今日までその命脈を維持し、あんなに世界の各地に擴がる事が出來たのである。神道も唯、御祭りをするとか、祓をするとか、禊をするとか云ふ位な外面的のことだけでは、とても十分に後世の國民に滿足を與ふることが出來ない。そこで以つて佛教や儒教と同じやうに、我が國の固有の大道を理論的方面から說明して欲しいと云ふことになつて來る。佛教の幾千卷の經文も要するに、その骨髓根本となつて居る眞如、涅槃の說明に過ぎない。或は之れを體現する方法を示したに過ぎないと云へる。神道の骨髓根本、即ち私の上來說いて來たやうな所のものを、十分に理論的方面から說明したものを要求するやうになつて來る。此の潮流に乘じて叡山を開いた所の傳教大師最澄門下のものは、山王一實神道と云ふものを起した。此の山王一實神道と云ふのは、多少神道の學理的方面に觸れて居るのである。けれどももと〳〵佛教の教理を基礎としたものであつて、決して固有の大道を發揮することは出來ない。今日から見ると矢張り篤胤の所謂神事の意味の外にあまり出て居らないのである。最澄の一派と略、同時に弘法大師空海の一派が隆盛を極めた。一體弘法大師と云ふ人は、今日大師と云へば澤山あるにも係らず、直に弘法大師とせらるゝ位に博學宏才で能く事理の幽に徹して居つて當時に於ける一大人物であつたのであるから、その布教の上に神道を利用することの如何に便宜多いかと云ふことを悟つたものと思はれる。從つて最澄以上に此の點に考慮を廻らすことが多かつたらしい。そしてその門下に所謂濟々たる多士で、此れ等の人物が集つて茲に兩部習合神道と云ものを作り上げたのである。併し此の兩部習合神道も、林羅山が評して「佛法を以つて神道に合し、胎藏金剛兩界を以つて陰陽に合す、遂に以つて神佛本地一體と爲す」と云ふ說を立てたやうに、根本的の方面は佛教から成つて

居る。それから後卜部一派、殊に兼倶と云ふ人などは、斯う云ふ佛教的神道に滿足しないで、新たに神道を起して唯一神道と云ふものを立てたけれども、矢張り是れも佛教的神道たるを免れない。いつまでも〳〵神道は佛教の教義より離るゝことが出來なかつた。そこで世人も敢へて之れを怪まなかつた。卜部兼右の編と云ふ『神道根源』などには、「神道は佛法已前より有之、然に佛法渡て見合すれば、自と同じ物なる故に、引合て得心也」と云ふやうな次第であつた。

されど佛教的神道を嫌忌するの風は、漸次その勢を强くし、遂に伊勢の度會延佳の如き起りて盛に神道より佛教を驅逐せんことを企てた。されどその自らの思想は極めて貧弱で、一に儒教によりてその說をなさんと努めた。神道の文字が適切にその內容を得なかつたのは此の如く久しい間である。されば林羅山、大宰春臺のやうな學者でも、尙、且つ神道は已に支那の古代にあつたものだと信じて居た。されば林羅山は、德川義直に代りて『神祇寶典』に序を書いて、その言を結ぶに、「聖人神道を以つて教を設けて、天下服す」と云ふ『易』の語を以つてして居る。大宰春臺も亦、「今の人、神道を我國の道と思ひ、儒佛とならべて是を一つの道と心得候こと大なる誤にて候、神道はもと聖人の道の中に有之候」と云つて居るが、併し『易』の神道と我が固有の大道とは決して同一のものでない。故に伊勢貞丈は、「凡、事物、名は同じくして、實こととなることあるものなり」と『神道獨語』で道破して居る通りである。平田篤胤は、更に痛切に之れを論じて居る。それを少しく擧げて見ると、『易』の文に「天の神道」と云つたは、「四時不忒」とある如く、春夏秋冬の季候を忒はず、風吹き、雨降り、萬物の生出る所を以つて、天然の神道と云ふ心に云ひ、同じ『易』の文に「陰陽不測、之を神と謂ふ」とある神字の義で御座る。御國の謂ゆる神の如く、しやんと實物の神をさして、其神のなさるゝ神といふ義ではない、夫故に天の字と神の字の間へ、コレを訓む之の字を置て、「天之神道」と書き、天然の神道と云意に申したもので御座る」と云つて居る。誠にさうで、神道が支那にあつたと云ふのは、當を得て居らない。德川時代の燦然たる文藝復興と共に神道も大いに起り、伊勢の度會延佳と同時に江戸に吉川惟足出で、京都に山崎闇齋出で、盛に神道を提唱したのである。が、皆或は儒教に依り、或は佛教に依つたもので、固有の大道を十分に發揮したものではないのである。固有の大道

を十分に發揮して、神道と云ふ文字が神道の內容を十分に有するに至つたのは、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤の所謂四大人を俟つて後であつたのである。それから以後神道と云ふものが、神道の眞內容を有つて、世に行はれるやうになつて來たのである。

## 第三節　神道の根本義

希臘のアリストテレースの言葉の通り「人は社會的生物」であつて、先天的に社會を爲して生活して行くと云ふ傾を有つて居るのである。それでハイドと云ふ人なども言つて居る。「人間は自ら社交的の生物であつて、社會を離れては人間は既に人間でない。若し自ら喜んで一人で居るものがあるとしたならば、其のものは猛獸か、さもなくば神である。人間が他人との關係に依つて出來てくる所の總べてのものを人間から取り去つてしまふならば、是れ同情とか、愛とか、信仰とか、感謝とか、勇氣とか云ふやうなものを、一切取り去つてしまふので、詰り人間は正しく禽獸の中に這入つて行くものである」。斯う云ふやうな見解は西洋人の見解であるが、誠に正しい見解であつて、人はどうしても共同生活と云ふものを離れては生活することは出來ない。共同生活に依つて初めて我々は此の世に生れ、此の世に成長し、此の世に生存することが出來るのである。さう云ふ共同生活をすると云ふと、一個人の我儘勝手の行と云ふものは許されない。朝、起きる時には起きなくてはならぬ。夜、寢る時には寢なくてはならぬ。御飯を食べる時には食べなくてはならぬ。禮服を着る時には、之れを着なくてはならぬ。共同生活を爲して居る所の各人が各、個々別々の生活を爲すと云ふことは許されないのである。共同生活と云ふものに我儘放題を許されないと云ふのは、詰りそこに何か人の據らなければならぬ所のものがあるからである。共同生活には我々の行を律して行く所のものが出來てくるからである。其のものは要するに一個の家で言へば家風と云ふものになり、又一鄉で言へば鄉風と云ふものになり、學校などで言へば、校風と云ふものになり、國家に就いて言へば國風と云ふやうなものになつて來るのである。であるから人が養子に行き、又は嫁に行つて、其の家の家風に服從しないと云ふと、其の家に居ることは出來な

いやうになる。又他の鄕に行つて、其の鄕の風に從はなかつたならば、其の鄕に生活する事は出來ない。鄕に入つては鄕に從はなければならぬ。一つの學校に入學したならば、其の學校の校風に從はなければならぬ。其の學校の校風に反抗するならば、直に退學されてしまふ。一つの國民となれば、其の國家の國風と云ふものに從はなければならぬ。其の國風に反抗すれば、其の國家の一員となつて生存する事は出來ないのである。斯う云ふ國風と云ふものは、何れの國にもあるのである。さうして其の國風は何れの國に於いても奬勵發達することを努められて居る。若し其の國家の特殊の國風と云ふ者が衰へて來たならば其の國家は其の時に其の存在の理由を喪失するのである。手短に云へば滅亡するのである。歴史に就いて見ても、昔スパルタと云ふ國が希臘にありて非常に强い國であつた。嘗ては波斯侵入の百萬の軍隊を、僅かに三千の兵を以つて邀へ擊つと云ふ風に强い國であつた。是れと云ふも詰りスパルタの國風が極めて健實であつて、勇壯であつたからである。けれども一朝此の國風衰へて、彼れ等國民は皆利己のみを事とすると云ふ風になつて來た時には、羅馬の僅かな軍隊の馬蹄の下に蹂躙されてしまつたのである。其の羅馬と云ふ國も亦その固有の剛健質實な國風を維持して居る際には、非常に隆盛に赴いて、羅馬人は「羅馬の滅亡は世界の滅亡である」と誇つたのである。けれども後殖民地より澤山の金銀財寶を吸收して、さうして國民が奢侈贅澤に流れて、昔からの勤儉質實なる國風と云ふものを失つてしまふと、直に北方の蕃族の爲に蹂躙されてしまつたのである。さう云ふ工合に國風と云ふものは、其の國家と非常に密接なる關係を有つて居るのである。そこで獨逸が世界の大亂を惹起して、さうして世界の列强を相手にして久しく屈しなかつたと云ふのは、詰り獨逸國民が十八世紀の頃からして、此の獨逸の國風と云ふものの養成に努めて、或は國史を奬勵して愛國心を養ひ或は身體の鍛錬を努め以つて國家的教育を興隆し、獨逸國風を作つた爲である。獨逸が世界の强國を相手にして、頑强に戰爭したのは、決して彼れ等が基督教徒であるからではなくして、此の獨逸の國風、即ち獨逸の國民的精神を有して居たからである。けれどもそれはあまりに粗製品であつた。爲に獨逸もとう〳〵あの始末になつたのである。我が國に於ては斯う云ふ國風

と云ふものは、獨逸が十八世紀から作り出したやうな、又羅馬に嘗て在つて幾くもなくして羅馬國民が之れを失つたやうな、或はスパルタ國民が之れを有して居つて、而して暫時にして失つたやうな、極めて薄弱なる淺薄なる國風でないのである。我が國に於いては建國以前からして、此の國風即ち一般に謂ふ所の國體なるものが存立して居つて、さうしてそれに依つて建國もせられ、それに依つて國家も維持發展されて來たのである。其の國風或は國體と云ふものは何であるかと云ふと、即ち神道の發現である。神の道の發現である。此の神道は我が國民の有して居る所の國民的精神の精を體し華を集められて居る所の神々が云爲行動せられた其の跡に依りて養成せられ、發展せられて行く所のものである。而して此の國風即ち國體の最も根柢を築き上げられたのは已に述べた通りに天照大神である。天照大神は天壤無窮の神勅を御下しになると同時に又三種の神器を御下しになつたと云ふことも、前に述べて置いた。そして此の三種の神器を御授けになつた所の御趣意は、我々には分らない。併し賴山陽の說のやうな工合に、我々が此の事績に就いて考へて見ると、深遠なる意味が其の間に具つて居るやうに思はれる。此の事も前に述べて置いた。更に一歩を進めて論ずると、我が國民の有して居る國風の要素、即ち國民的精神と云ふものを、前に三種に分つて述べたが其の國民的精神の秩序的統一的思想の發達の極致は、此の神鏡に依りて示され、現世的快活的感情の發達の極致は神璽に依りて示され、發展的膨脹的性格の發達の極致は神劍に依つて示されて居るやうに思はれる。其の極致と云ふものは遂に歸して一となるのである。此の極致の歸して一となつた所のものが即ち大極致と云ふべきものである。其の大極致と云ふものは即ち神勅に示れて居る所の天照大神の御精神である。天照大神の御精神と云ふのはどうかと云ふと、即ち天壤無窮の國運發展と云ふ事である。何處迄も發展である。無限の發展である。天地と窮りなく發展するのである。發展の上に更に發展すると云ふのが、此の天照大神の大御精神である。それであるから歷代の天皇は、此の天祖天照大神の始め給ひ、又行ひ給ひ、示し賜つた所の洪範に依つて、さうして政治を爲して御居でになるし、又歷代の臣民は八百萬の神々が天祖の御敎に從つて云爲行動して來た其の事績に從つて云爲行動し